

## 中学国語基礎講座

### はじめに

はじめまして、中学国語基礎講座を担当する、笹森と申します。普段は高校受験生から、大学受験生まで、幅広く教えています。中学生でも、高校生でも、多くの生徒諸君が、まずは思い悩むことは「国語の成績が上がらない、もしくは上がりにくい」ということや、「国語の勉強の仕方が分からない」ということです。それは、国語の勉強というと「読解力を身につける」などと漠然としたことを考えているからではないでしょうか。

しかし、本当の「国語力」とは何かを知り、正しい「勉強法」を知れば、必ず成績は上がります。そして成績が上がれば、志望校に合格します。

本講座を受講することで、「国語力」＋「勉強法・受講サイクル」＝「合格」という、「成功の方程式」を身につけて下さい。

#### 「国語力」

- ①国語知識↓漢字知識（熟語・ことわざ・故事成語）、文法、文学史など
- ②文章ジャンル別読解法↓説明文、論説文、小説、随筆、古文、漢文など
- ③設問種類別解答法↓指示語、接続語、具体・内容・理由説明、空所補充など

…これらのことを主に本講座ではレクチャーしていきます。特に「国語知識」が軽視されがちですが、「知識」無くして「知恵」は生まれません。

また、文章も、設問もただ「何となく」読んで解くだけでは意味がありません。文章ジャンルごとの「読解法」、設問種類ごとの「解答法」を意識した上で、普段から文章を読み、問題を解くことが重要です。

### 「国語精読セオリー」

では、「読解力」とはどのような力なのか。それは文字通り「文章を読んで、問題を解く力」のことですが、ただ漠然と文章を読むことではありません。また問題を読んで解くだけではなく、試験時間内で読み解くという速読速解力も含まれます。「正確な読解のための方法」＝「国語読解セオリー」についてお話しします。このセオリーが身につけば、論理的な思考法や文章の作成法にも繋がります。今からお話しする方法を意識して、練習問題を解いていけば、必ず読解力は身につきます。

### 『国語精読セオリー』 ～正しく読み解く方法～

#### ①言葉の知識「国語ボキャビル（vocabulary building＝語彙増強）の必要性」

まず文章を読むためには、言葉の知識（ボキャブラリー）が必要である。現代文では、漢字知識（漢字・熟語・こと

わざ・慣用句・故事成語）・評論用語・文法知識など、古文では、歴史的仮名遣い・古文単語・古文文法など、漢文では、漢語・訓読法などといった、それぞれ国語の学習分野ごとに押さえるべき言葉の知識がある。

## ②作品背景の知識「背景知識 (background knowledge) の確実性」

次に、文章ジャンル別の背景知識に注目する。例えば、評論で「身体論」が出題されたら、こういったパラダイムが重要か、古文で「枕草子」が出題されたら、どのようなことを「をかし」といつているのか、などといったことである。これを押さえておけば、文章の趣旨のミスリードが減り、読解の確実性が上がる。また、背景知識としての文学史も必要である。

## ③文章の構造を掴む「論理的把握力 (grip of logic) の重要性」

そして、文章を「精読」する上で、押さえておきたいポイントが二つある。ただたんに言葉を追いかけるだけではなく、全体的な構造を掴むためである。

(a) 論理関係↓主語と述語の関係・指示語・接続語・程度の意味を表す副詞・具体例の箇所

(b) 修辞関係↓対比・並立・倒置・体言止め・比喻

これらをチェックして、言葉の意味と、前後の言葉の繋がりまで意識する。「論理」と「修辞」(文修飾)は、本文の論旨、主張に繋がる人が多いので重要である。

こうした『国語知識』『背景知識』『文章の構造』を押さえながら、読み解きすることが、「国語精読セオリー」です。つまり読解とは、このようなルールに基づいて読み進めて、自分の主観、直感ではなく、客観的ルールに依拠することなのです。

正しい方法論を踏まえて、読書や読解の経験値を重ねていくことで、様々な文章、設問への対応力である、「絶対的国語力」が身につくのです。

#### 「勉強法・受講サイクル」

①予習→テキストを15分程度で解く。

②授業→受講ペースを決めること。

③復習→「解き直し→答え合わせ→確認テスト」をすることが効果的な復習。

…予習はテキストを15分程度で解いてみて下さい。問題は、分からないところがあっても構いません。しかし、本文は、必ず目を通して置いて下さい。

そして授業を受けるペースについて。授業計画は、学期毎に構成されています。毎週の視聴日時を決めて、一講ごとに受



講することを推奨します。夏休み、冬休みなどは、季節講習会のつもりで、数講をまとめて受講することも良いかと思えます。一番大事なことは、「終わらせる日を決めて、そこから逆算し週や月あたりの受講ペースを決めること」です。

復習について、授業では「文章の読み方」↓「設問の解き方」↓「解答の一步步前までの導き」を展開し、「答え合わせ」まではしません。それは復習として、「必ず自分で解答を出すこと」をして欲しいからです。授業の後、「解き直し↓答え合わせ↓確認テスト」をすることが効果的な復習になります。

## 最後に

これらのことを、はじめにコツコツ繰り返して下さい。そうすれば必ず「実力」がつき、皆さんの「合格」に繋がります。しんどいなあと思うこともあるでしょうが、「しんどいときは、人生の登り坂」です。その坂の先には、皆さんの「成績向上」が待っているのです。

中学生生活では、部活や学校行事などで、何かとしんどいこともあるかと思いますが、一緒に楽しく国語を学び、笑いながら勉強出来るように、「面白おかしく国語を語りたいと思います。ぼちぼち、やっていきましょう！

笹森義通

# 目次

## 【国語知識】

第一講	《国語知識》漢字知識……………	p. 8
第二講	《国語知識》基礎文法 主語と述語・接続詞と指示語……………	p. 17

## 【文学的文章①】

第三講	《文学的文章》物語・小説の読解ルール(1) あらすじ・場面をとらえる……………	p. 25
第四講	《文学的文章》物語・小説の読解ルール(2) 心情・キャラ設定をとらえる……………	p. 34
第五講	《文学的文章》物語・小説の読解ルール(3) 主題をとらえる……………	p. 43
第六講	《文学的文章》物語・小説の弱点補強(1) あらすじ・心情を読み取る問題……………	p. 51
第七講	《文学的文章》物語・小説の弱点補強(2) 主題・心情の変化を読み取る問題……………	p. 60

## 【説明的文章①】

第八講	《説明的文章》説明文の読解ルール(1) 指示語・接続語から筆者の主張をおさえる……………	p. 71
第九講	《説明的文章》説明文の読解ルール(2) 段落ごとの内容から筆者の主張をおさえる……………	p. 81
第十講	《説明的文章》説明文の読解ルール(3) 要旨・筆者の主張をおさえる……………	p. 91
第十一講	《説明的文章》説明文の弱点補強(1) 指示語・接続語・段落内容をとらえる問題……………	p. 101
第十二講	《説明的文章》説明文の弱点補強(2) 要旨・主張をとらえる問題……………	p. 110

## 【文学的文章②】

第十三講	《文学的文章》随筆の読解ルール(1) 文意・構成をとらえる……………	p. 120
第十四講	《文学的文章》随筆の読解ルール(2) 表現・主題をとらえる……………	p. 129

第十五講	《文学的文章》随筆の弱点補強 構成・表現を読み取る問題	p. 139
【韻文】		
第十六講	《韻文》詩の読解ルール 構成・情景・修辞技法をとらえる	p. 146
第十七講	《韻文》短歌の読解ルール かたちと修辞技法をとらえる	p. 155
第十八講	《韻文》俳句の読解ルール 季語と切れ字をとらえる	p. 163
第十九講	《韻文》短歌・俳句の弱点補強 主題・心情・技法を読み取る問題	p. 170
【古典】		
第二十講	《古典》古文の読解ルール(1) 主語・歴史的仮名遣いをおさえる	p. 176
第二十一講	《古典》古文の読解ルール(2) 係り結びの法則	p. 183
第二十二講	《古典》古文の弱点補強 主語・仮名遣い・係り結びを読み取る問題	p. 191
第二十三講	《古典》漢文の読解ルール 故事成語・書き下し文の読み取り	p. 198
第二十四講	《古典》漢詩の読解ルール 漢詩のかたちと表現技法をとらえる	p. 205
第二十五講	《古典》漢文の弱点補強 漢詩・故事成語・書き下し文を読み取る問題	p. 213
【説明的文章②】		
第二十六講	《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(1) 科学論を読み取る	p. 223
第二十七講	《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(2) 哲学・身体論を読み取る	p. 233
第二十八講	《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(3) 日本語論を読み取る	p. 243
第二十九講	《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(4) 日本文化論を読み取る	p. 253
第三十講	《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(5) 自然文化論を読み取る	p. 262

第一講・《国語知識》漢字知識



【同音異義語】 次の——線のカタカナを漢字で書け。

- ① 会社の人事イドウ
- ② 犬小屋をイドウする
- ③ 図形のイドウを調べる
- ④ 問題のカイトウ用紙
- ⑤ アンケートのカイトウ
- ⑥ 大学でコウギを行う
- ⑦ 会社にコウギする団体
- ⑧ シュウカン誌を読む
- ⑨ 早く起きるシュウカン
- ⑩ 人口がゲンショウする
- ⑪ 自然のゲンショウ

( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )

【同訓異字】 次の——線のカタカナを漢字で書け。

- ⑫ 服がぴったりとアウ
- ⑬ 友達とアウ
- ⑭ 成功をオサめる
- ⑮ 学業をオサめる
- ⑯ 国家をオサめる
- ⑰ 商品をオサめる
- ⑱ 道をタズねる
- ⑲ 知人をタズねる
- ⑳ 台風にソナえる
- ㉑ 花をソナえる
- ㉒ 面積をハカル
- ㉓ 体重をハカル

( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )
( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )	( )

【類義語】

次の語の類義語を

から選び、漢字で書け。

②④ 時間をハカる

- ②⑤ 不意  
②⑥ 一切  
②⑦ 極度  
②⑧ 尊敬  
②⑨ 降参  
③⑩ 運命  
③⑪ 準備  
③⑫ 賛成  
③⑬ 方法  
③⑭ 返事  
③⑮ 材料  
③⑯ 向上

ヨウイ  
シンポ  
フクジユウ  
ゲンリヨウ  
トツゼン  
ドウイ  
ソンチヨウ  
カド  
ゼンブ  
シユダン  
シユクメイ  
オウトウ

【対義語】

次の語の対義語を

から選び、漢字で書け。

- ③⑦ 退化  
③⑧ 縦断  
③⑨ 生産  
④⑩ 上昇  
④⑪ 消極  
④⑫ 単独  
④⑬ 特殊  
④⑭ 安全  
④⑮ 人工  
④⑯ 異常  
④⑰ 革新  
④⑱ 回復  
④⑲ 有限

シヨウヒ  
アツカ  
キヨウドウ  
キケン  
オウダン  
シゼン  
セイジヨウ  
ホシュ  
カコウ  
ムゲン  
セツキョク  
イッパン  
シンカ

【慣用句】

「」の意味を表す慣用句になるように、  
あてはまる言葉を書け。

「」に

- ⑥2  が売れる 「世間に知られる」
- ⑥1  が棒になる 「歩き疲れる」
- ⑥0  を投げる 「あきらめる」
- ⑤9  にかける 「苦労して育てる」
- ⑤8  をさす 「念をおす」
- ⑤7  をひっぱる 「じやまをする」
- ⑤6  を濁す 「適当にごまかす」
- ⑤5  を長くする 「待ちわびる」
- ⑤4  をまく 「ひどく感心する」
- ⑤3  につく 「物事に慣れる」
- ⑤2  を売る 「さぼる」
- ⑤1  に流す 「すべて捨て去る」
- ⑤0  から火が出る 「はずかしい」

~~~~~

~~~~~

- ⑦6  が出る 「予算が超える」
- ⑦5  に乗る 「だまされる」
- ⑦4  をかける 「好意で世話する」
- ⑦3  をあげる 「降参する」
- ⑦2  に銘じる 「深く心に刻む」
- ⑦1  が堅い 「秘密を話さない」
- ⑦0  を並べる 「同じ力を持つ」
- ⑥9  をなでおろす 「安心する」
- ⑥8  がない 「大変好きである」
- ⑥7  を入れる 「横から口を出す」
- ⑥6  が合わない 「気が合わない」
- ⑥5  にかける 「自慢する」
- ⑥4  をふむ 「ためらう、迷う」
- ⑥3  をもつ 「味方する」

~~~~~

~~~~~

「ことわざ」「」の意味を表すことわざになるように、

□にあてはまる言葉を書け。

77 □に小判

「ねうちがわからないこと」

78 □の上にも三年

「苦しみを我慢すれば報<sup>むく</sup>われる」

79 □とすっぽん

「比較にならないこと」

80 かわいい子には□をさせよ

「子供は苦労させたほうがよい」

81 □をたたいて渡る

「用心の上にも用心する」

82 □は寝て待て

「幸運はあせらず待つべきである」

83 焼け石に□

「やっても効き目がない」

84 知らぬが□

「わからないのでのんきでいる」

85 九死に□を得る

「あやうく命が助かる」

86 □の耳に念仏

「さっぱり効き目がない」

87 人事を尽くして□を待つ

「できる限り努力してみる」

88 □も木から落ちる

「名人も時には失敗する」

89 □の功名

「失敗が偶然よい結果を生む」

【故事成語】

次の故事成語の意味として正しいものをあとから選び、記号で答えよ。

⑨⑩ 蛇足

⑨① 矛盾

⑨② 漁夫の利

⑨③ 推敲すいこう

⑨④ 五十歩百歩

ア あつても用のないもの。

イ 争いに乗じて第三者が利益を得ること。

ウ つじつまが合わないこと。

エ 本質的には差のないこと。

オ 文章をよく練り直すこと。

(	(	(	(	(
)	)	)	)	)



第一講・復習問題 《国語知識》 漢字知識

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、後の問題を解きなさい（一つ 1点 計50点満点）

問一 【同音異義語・同訓異字】 次の例文の、カタカナの

部分を漢字で書け。

- ① 会社の人事イドウ
- ② 犬小屋をイドウする
- ③ 問題のカイトウ用紙
- ④ アンケートのカイトウ
- ⑤ 大学でコウギを行う
- ⑥ 会社にコウギする団体
- ⑦ 服がぴったりとアウ
- ⑧ 友達とアウ
- ⑨ 成功をオサめる
- ⑩ 学業をオサめる

（	（	（	（	（	（	（	（	（	（
）	）	）	）	）	）	）	）	）	）

問二 【対義語】 次の語の対義語を漢字で書け。

- |      |      |      |      |      |           |           |          |          |          |
|------|------|------|------|------|-----------|-----------|----------|----------|----------|
| ⑤ 単独 | ④ 消極 | ③ 生産 | ② 縦断 | ① 退化 | ⑪ 国家をオサめる | ⑫ 商品をオサめる | ⑬ 面積をハカル | ⑭ 体重をハカル | ⑮ 時間をハカル |
|------|------|------|------|------|-----------|-----------|----------|----------|----------|

（	（	（	（	（	（	（	（	（	（
）	）	）	）	）	）	）	）	）	）

⑥ 特殊

⑦ 安全

⑧ 人工

⑨ 革新

⑩ 回復

問三

【慣用句】

「」の意味を表す慣用句になるように、  
□にあてはまる体の一部を表す言葉を書け。

① □ から火が出る「はずかしい」

② □ をまく「ひどく感心する」

③ □ を長くする「待ちわびる」

④ □ をひっぱる「じゃまをする」

⑤ □ 塩にかける「苦勞して育てる」

⑥ □ をもつ「味方する」

⑦ □ の □ をふむ「ためらう、迷う」

⑧ □ にかける「自慢する」

⑨ □ をなでおろす「安心する」

⑩ □ が出る「予算が超える」

問四

【ことわざ】

「」の意味を表すことわざになるよう  
に、□にあてはまる言葉を書け。

① □ に小判

「ねうちがわからないこと」

② □ の上にも三年

「苦しみを我慢すれば報われる」

③ □ とすっぱん

「比較にならないこと」

④ □ かわいい子には □ をさせよ

「子供は苦勞させたほうがよい」

⑤ □ をたたいて渡る

「用心の上にも用心する」

- ⑥  は寝て待て  
〔幸運はあせらず待つべきである〕
- ⑦ 焼け石に   
〔やっても効き目がない〕
- ⑧ 知らぬが   
〔わからないのでのんきでいる〕
- ⑨  の耳に念仏  
〔さっぱり効き目がない〕
- ⑩ 人事を尽くして  を待つ  
〔できる限り努力してみる〕

問五

【故事成語】

次の故事成語の意味として正しいものをあとから選び、記号で答えよ。

- ① 蛇足
- ② 矛盾
- ③ 漁夫の利
- ④ 推敲
- ⑤ 五十歩百歩
- ア あっても用のないもの。
- イ 争いに乗じて第三者が利益を得ること。
- ウ つじつまが合わないこと。
- エ 本質的には差のないこと。
- オ 文章をよく練り直すこと。

第一講・確認テスト《国語知識》漢字知識

次の語句の、カタカナ部分を漢字に改めるとどうなるか。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 会社の人事イドウ ①移動 ②異動 ③異同 ④移同

問二 試験のカイトウ用紙 ①回答 ②解答 ③解凍 ④回頭

問三 学業をオサめる ①習 ②納 ③修 ④治

問四 面積をハカる ①計 ②図 ③量 ④測

問五 原稿のスイコウ ①遂行 ②推考 ③遂講 ④推敲

☐
☐
☐
☐
☐

第一講・

《国語知識》基礎文法

主語と述語・接続詞と指示語



1 言葉の単位

1 文章——小説・随筆・解説・論説などのように、全体として一つの完結した意味を持ったまとまり。(話したものの場合は談話という。)

2 段落——文章の中でまとまった内容を表す一区切り。段落の初めは、行を改めて最初の一字分を空けて書く。こういう段落を形式段落(小段落)といい、内容のつながりからいくつかの形式段落をまとめたものを意味段落(大段落)という。

3 文——句点(。)や疑問符(?)や感嘆符(!)で区切られたまとまり。

例 下の公園では、大きなすべり台で遊んでいる子がいる。

4 文節——文を、実際に使われる言葉として意味をそこなわない程度にできるだけ細かく区切った一まとまり。

「ね」の入れられるところをさがすとわかりやすい。

例 みんなが一(ね)ぼくに一向(ね)かって一(ね)拍手を一(ね)して一(ね)いた。

5 単語——文節をつくっている一つ一つの言葉。それ以上小さく分けることのできない最小の言葉の単位。

例 物事の名前を表す単語——鳥 朝 仕事 友だち 遠回り

様子や動作を表す単語——暑い 静かだ 大きな 始める

他の単語について表現を助ける単語——は を に らしい ようだ

② 接続する語句 文と文、語句と語句、段落と段落をつなぐ働きをする語句。

例 目を遠ざけてみよう。すると、たちまちのうちに、この図はどくろをえがいた絵に変わってしまう。

雨、または雷雨のおそれがある。

③ 接続のしかたの種類 接続する語句は次のような意味関係で前後をつなぐ。

1 順接——前の内容を原因・理由とする内容などをあとに述べる。

例 きのう雨が降った。だから今日は公園がぬかるんでいる。

2 逆接——前の内容と逆になるような内容をあとに述べる。

例 大人から見ればささいな出来事だろう。でも僕は一生忘れない。

3 並立・累加——前の内容にあとの内容を並べたり、つけ加えたりする。

例 彼は出ていった。そして、二度と戻らなかった。

4 対比・選択——前の内容とあとの内容を比べたり、どちらかを選んだりする。

例 バスで行こうか。それとも自転車で行こうか。

5 説明——前の内容に対して説明を加えたり、事柄を補足したりする。

例 休んでよろしい。ただし、三十分だけです。

6 転換——前の内容に対して別の話題を持ち出す。

例 今日はこれで終わりにしましょう。ところで、今、何時ですか。

4 指示する語句 前の文や語句を指し示す働きをする語句。

一般に「こそあど言葉」と呼ばれるもので、左の表のように分類できる。

指示する語句は、文と文を接続する働きもある。

例 外で物音がした。その時、急に電気が消えた。

様子	方向	場所	事物	
こんな こう	こちら こつち	ここ	これ この	こ
そんな そう	そちら そつち	そこ	それ その	そ
あんな ああ	あちら あつち	あそこ	あれ あの	あ
どんな どう	どちら どつち	どこ	どれ どの	ど

5 文の成分 文を組み立てているそれぞれの部分。

1 主語 「何（だれ）が（は）」を表す文節。

例 わたしが 行く。 空が 青い。 ここは 市役所です。

2 述語 「どうする・どんなだ・何だ・ある（いる・ない）」を表す文節。

例 先生が 走る。 景色が すばらしい。 犬が いる。

3 修飾語——他の文節の内容を詳しく言い定める（修飾する）文節。また、定められる（修飾される）文節を、

被修飾語ひしゅうしよくごという。

例 先生が全速力ぜんそくりきで走る。 大きな犬が二匹もいる。

4 接続語——理由や条件を表したり、前後の文をつないで、その関係を示したりする文節。

例 努力したので、成功した。 雨が降った。しかしすぐにやんだ。

5 独立語——他の文節とは直接関係がなく、比較的独立している文節。感動・呼びかけ・応答・事柄の提示などを

表す。

例 まあ、きれい。「白鳥の湖」、それは私が初めて出会ったバレエだ。



例題

① 次の文から、接続する語句をそれぞれ抜き出せ。

(1) 畦道<sup>あぜみち</sup>も、車の通る道路も、ほとんど直線だ。しかしよく見ると、目立った曲線が二つある。

(2) 優れた地図はそれ自身の持つ風土色にあふれている。さらにその技術性によって、深く人をひきつけてやまないのである。

(1)

(2)

② 次の□にあてはまる言葉として最も適当なものをあとからそれぞれ選び、記号で答えよ。

(1) 外はひどい雨だ。□出かけるのは明日にしよう。

(2) 彼は勉強がよくできる。□彼はスポーツも万能だ。

(3) いっしょうけんめい走った。□追いつけなかった。

(4) 今夜はなかなか眠れない。□明日の発表会が心配だからだ。

(5) 局地的な雨□雷雨<sup>らいう</sup>のおそれがあります。

(6) 「ああ、よく眠った。□今、何時ですか。」

ア そのうえ

イ または

ウ しかし

エ なぜなら

オ だから

カ ところで

(4) (1)

(5) (2)

(6) (3)

第二講・復習問題 《国語知識》 基礎文法

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、後の問題を解きなさい（二つ 5点 計50点満点）

次の文章の空欄に入る接続語として最も適当なものを、傍線部とのつながりを考えて、後の選択肢から選び記号で答えよ。

吾輩は猫である。名前は ① 無い。

どこで生れたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。 ② あとで聞くとそれは書生という人間中で一番癡悪な種族であったそうだ。

この書生というのは時々我々を捕まえて煮て食うという話である。 ③ その当時は何という 考もなかったから別段恐しいとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあつたばかりである。

掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのが ④ 人間というもの の見始である。この時妙なものだと思つた感じが今でも残っている。第一毛をもつて装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶だ。 ⑤ 顔の真中があまりに突起している。 ⑥ その穴の中から時々ふうふうと煙を吹く。 ⑦ 咽せぼくて実に弱つた。これが人間の飲む煙草という

ものである事は ⑧ この頃知つた。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つておつたが、 ⑨ すると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。 ⑩ 助からないと思つていると、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

（夏目漱石「吾輩は猫である」）

10

5

ソ	ク	ア
しばらく	のみならず	だから
	ケ	イ
	また	そうして
	コ	ウ
	いわゆる	到底 <sup>とうてい</sup>
	サ	エ
	および	まだ
	シ	オ
	どうも	それなら
	ス	カ
	一方	しかも
	セ	キ
	ようやく	しかし

⑥	①
<input type="text"/>	<input type="text"/>
⑦	②
<input type="text"/>	<input type="text"/>
⑧	③
<input type="text"/>	<input type="text"/>
⑨	④
<input type="text"/>	<input type="text"/>
⑩	⑤
<input type="text"/>	<input type="text"/>

第二講・確認テスト《国語知識》基礎文法

問一 次の接続語の、意味は何か。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

(一) しかし

(二) ところで

(三) しかも

- ① 転換      ② 逆接      ③ 原因理由      ④ 累加

問二 次の語の、品詞は何か。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

(一) あれ・それ・これ

(二) あの・その・この

- ① 代名詞      ② 普通名詞      ③ 連体詞      ④ 副詞

第三講・《文学的文章》物語・小説の読解ルール(1)

あらすじ・場面をとらえる

?



① 小説読解のポイント

- (1) 全体のあらすじをとらえる。人物、背景、事件の三要素をおさえ、おおまかな話の流れをつかむ。
- (2) 情景、状況をとらえる。小説では心情と情景が重なり合っている場合が多いことに注意する。
- (3) 登場人物の心情をとらえる。態度、表情、会話、行動、情景などに暗示される心の動きを、前後の話の展開をふまえて読み取る。

② あらすじのとらえ方

- (1) 背景(いつ、どんなところで)をとらえる。

時

時代・季節(自然の風物に注意する)・月・日時(曜日) など。

場所

単にどこかというだけでなく、どんな場所かをつかむ。

- (2) 登場人物をとらえる。

だれが登場しているか、何人か、どんな人物かを読み取る。また、登場人物の関係もおさえる。

- (3) 出来事をとらえる。

どのような出来事が描かれているか、その出来事がどのように変化したかを読み取る。

### ③ 情景・状況のとらえ方

どのような情景か、それがどのような印象を与えるかを読み取る。

例題の文章では、比喩<sup>ひゆ</sup>を使うなどして、「場内」の設備の様子についてくわしく説明されている。

例 「西の空に太陽を示す丸い光」↓夕日

「西寄りななめに沈んでゆく」↓日没

「場内は闇に包まれ」↓「夜」の表現

←

プラネタリウムの作り出す人工的な空間が「夜になっていく」ことを観客に情景として示している。

### ④ 場面の転換を示す言葉を見つける。

場面や情景の変化をとらえることは、文章の構成や人物の心情を把握する手がかりになる。

例題の文章では「十一月も末の晴れた日曜日」から、四人が出かけた話が始まっている。

例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

プラネタリウムへ行こう、と言い出したのは、さやかだった。星座がはっきりしないのは、東京の空だからだ。プラネタリウムなら、いろいろな星座が見えるだろう。おばあちゃんにも、星を見せて上げよう、と言う。

十一月も末の晴れた日曜日、雄策が三人を車に乗せ、母の車椅子も積んで渋谷へ出かけた。一人で外出出来なくなった母の慰安のためにいいプランで、家族四人の行楽としても久々のことであつた。

文化会館にはショッピングのフロアーや映画館、食堂街もあり、四人は昼食をとると、そのままエレベーターで八階まで上った。前回の投影時間がまだ終わっていないので、それまでロビーや、円型の投影場を囲むようにぐるりと廻らされている廊下の展示物を見ることにした。壁にしつらえられているガラスケースの中には、望遠鏡の歴史を示す望遠鏡の模型や写真が展示され、古い中国や西洋の星座の拓本や絵、天球儀や隕石、太陽の周囲を廻る月と地球の模型など、さやかは熱心に見ている。今年はあてはずれだったが、三十三年周期で出現した過去の、文字通り雨のように降っているしし座の流星雨の版画や写真もあつて、

「うわー、こんなに凄いんだ。」

と、さやかは叫んだ。

「おばあちゃん、星が降るんじゃないで、地球が彗星の軌道を通る時に、彗星がまき散らしているチリが発光するのよ。昔の人は、こんなに降ると、空に星がなくなっちゃうんじゃないか、って思ったんだって。」

さやかは、ノースカロライナ州で見られた一八三三年の流星雨を杲然と見上げている人々の版画を見ながら、母の車椅子にかがみ込んで説明した。

投影時間になって、四人は場内<sup>②</sup>にはいった。日曜なので坐<sup>すわ</sup>れないといけないと思って早めに来たが、意外に空席が目立<sup>す</sup>た。

場内の中央に、丸い頭部にいくつものガラスの目玉を持つ巨大な蟻<sup>あり</sup>が肢<sup>あし</sup>を踏ん張ったような、黒い機械が据えられている。それを囲むように席が放射状に設けられていて、ドーム型の天井<sup>てんじょう</sup>を仰ぎ見られるように椅子はリクライニングになっている。

ドームの下方の周囲には、東西南北の表示と、東京タワー、国会議事堂、絵画館、駒場東大<sup>こまば</sup>などのシルエットが、ぐるりと一周りしていて、西と南の間には、富士山が見える。

雄策は母を車椅子からおろして座席に坐らせ、ドームを仰げるように椅子を倒した。四囲の扉が閉められると、低目のやわらかい女性の声で、解説が始まった。<sup>③</sup>西の空に太陽を示す丸い光が浮かび出し、西寄りななめに沈んでゆくにつれ場内は暗さを増してゆく。太陽は、富士山の後方<sup>ぼつ</sup>に没し、地平線<sup>あかねいし</sup>が茜色に染まった。間もなく場内は闇に包まれ、座席も見えなくなった。天空には星が現れ始め、南の上方に半月が浮かんだ。

幻想<sup>げんそう</sup>的な音楽の流れの中で、女声の説明が続けられ、白い光の矢印が星を指す。

満天の星の中で、よく目立つ木星、土星が拡大されると縞模様<sup>しまもよう</sup>や輪が見えた。ぼうつと帯状に見えるのがミルキイウェイと呼ばれる天の川だと説明があり、その部分が拡大される。北の空に輝く北極星も、春美はこれまで空を仰いで、星の中から見つけたことはなかった。

(注) リクライニング……背もたれの角度を変えられる仕組み。

(津村節子「流星」より)



(1) この文章は、どの場所でのできごとが中心になっているか。場所を表す言葉を抜き出せ。

(2) — 線①「家族四人」とあるが、「母」をのぞいた三人の名前を書け。

(3) — 線②「場内」にはいった直後に四人が目にした、設備の様子を説明した一文を文中から抜き出せ。

(4) — 線③「西の空に……見えなくなった」とあるが、この表現について述べたものとして最も適当なものを次の中から

選び、記号で答えよ。

ア 場内に作り出される夕方の情景を、沈む太陽を表す光の描写と深まっていく闇の描写とを織りまぜて印象的に表現している。

イ 夕日が地平線にゆっくりと沈んでいく情景に、壮大な宇宙の営みが暗示されていることを、順序立てて論理的に表現している。

ウ 人工的な美しさと自然のもつ趣とを対比させてとらえ、二つの情景を色彩豊かに描くことで幻想的に表現している。

第三講・復習問題 《文学的文章》 物語・小説の読解ルール(1)

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、後の問題を解きなさい（二つ 5点 計15点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

プラネタリウムへ行こう、と言い出したのは、さやかだった。星座がはっきりしないのは、東京の空だからだ。プラネタリウムなら、いろいろな星座が見えるだろう。おばあちゃんにも、星を見せて上げよう、と言う。

十一月も末の晴れた日曜日、雄策が三人を車に乗せ、母の車椅子も積んで渋谷へ出かけた。一人で外出出来なくなった母の慰安のためにいいプランで、家族〔甲〕人の行楽としても久々のことであった。

文化会館にはショッピングのフロアーや映画館、食堂街もあり、四人は昼食をとると、そのままエレベーターで八階まで上った。前回の投影時間がまだ終わっていないので、それまでロビーや、円型の投影場を囲むようにぐるりと廻らされている廊下の展示物を見ることにした。壁にしつらえられているガラスケースの中には、望遠鏡の歴史を示す望遠鏡の模型や写真が展示され、古い中国や西洋の星座の拓本や絵、天球儀や隕石、太陽の周囲を廻る月と地球の模型など、さやかは熱心に見ている。今年はあてはずれだったが、三十三年周期で出現した過去の、文字通り雨のように降っているしし座の流星雨の版画や写真もあって、

「うわー、こんなに凄いんだ。」

と、さやかは叫んだ。

「おばあちゃん、星が降るんじゃないくて、地球が彗星の軌道を通過する時に、彗星がまき散らしているチリが発光するのよ。昔の人は、こんなに降ると、空に星がなくなっちゃうんじゃないか、って思ったんだって。」

さやかは、ノースカロライナ州で見られた一八三三年の流星雨を呆然と見上げている人々の版画を見ながら、母の車椅子にかがみ込んで説明した。

投影時間になって、四人は場内にはいった。日曜なので坐れないといけないと思って早めに来たが、意外に空席が目立った。

場内の中央に、丸い頭部にいくつものガラスの目玉を持つ巨大な蟻が肢を踏ん張ったような、黒い機械が据えられている。それを囲むように席が放射状に設けられていて、ドーム型の天井を仰ぎ見られるように椅子はリクライニングになっている。

ドームの下方の周囲には、東西南北の表示と、東京タワー、国会議事堂、絵画館、駒場東大などのシルエットが、ぐらりと一周りしていて、西と南の間には、富士山が見える。

雄策は母を車椅子からおろして座席に坐らせ、ドームを仰げるように椅子を倒した。四囲の扉が閉められると、低目のやわらかい女性の声で、解説が始まった。西の空に太陽を示す丸い光が浮かび出し、西寄りななめに沈んでゆくにつれ場内は暗さを増してゆく。太陽は、富士山の後方に没し、地平線が茜色に染まった。間もなく場内は闇に包まれ、座席も見えなくなった。天空には星が現れ始め、南の上方に半月が浮かんだ。

〔乙〕な音楽の流れる中で、女声の説明が続けられ、白い光の矢印が星を指す。

満天の星の中で、よく目立つ木星、土星が拡大されると縞模様や輪が見えた。ぼうつと帯状に見えるのがミルキイウェイと呼ばれる天の川だと説明があり、その部分が拡大される。北の空に輝く北極星も、春美はこれまで空を仰いで、星の中から見つけたことはなかった。

(注) リクライニング……背もたれの角度を変えられる仕組み。

(津村節子「流星」より)

30

25

20

15

7


[illegible]

7

ア  
感動的

イ  
感情的

ウ  
情熱的

工  
幻  
想  
的

才  
空  
想  
的

第三講・確認テスト 《文学的文章》 物語・小説の読解ルール(1)

次の語句の、カタカナ部分を漢字に改めるとどうなるか。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 プラネタリウムのトウエイ時間 ①灯影 ②倒影 ③投影 ④投映

問二 廊下のテンジ物 ①点事 ②典事 ③展示 ④天事

問三 人々のハンガ ①版画 ②半画 ③汎画 ④判画

問四 イガイに空席が目立つ ①以外 ②意外 ③異外 ④委外

問五 その部分がカクダイされる ①各台 ②各大 ③拡大 ④拡題

☐
☐
☐
☐
☐

第四講・《文学的文章》物語・小説の読解ルール(2)

心情・キャラ設定をとらえる

?



① 心情のとらえ方

(1) 直接的な心情表現をおさえる。

「悲しい」「楽しい」や「……と思う」「……と感じた」など、具体的に心情が述べられている部分をおさえる。

・例題の文章では「嫌だった」「嫌がった」。

(2) 会話の部分に注意する。

会話の部分には、人物の気持ちや、心の動きが表現されている。

(3) 人物の表情・態度・行動に注意する。

なぜそんな表情や態度になるのか、なぜそういう行動をとるのかという理由を考えながら読む。

(4) 間接的な心情表現をおさえる。

文脈によってその表す心情が微妙に変わる表現に注意する。

(5) 情景描写と人物の心情のかわりをとらえる。

情景描写には、心情が反映していることが多い。

② 心情の変化をつかむ。

場面や情景の展開に合わせて、心の動きをとらえる。

③ 人物像（キャラ設定）をとらえる。

登場人物の人物描写・心情とその変化・会話・行動などからとらえる。

例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「ゆっくり歩いきいや。」ねえちゃんは、注意深くばあちゃんの体を支えて歩き出した。トイレに向かう二人がまり子の前を通り過ぎる時、まり子はいつも、思い出したようにテレビのスイッチを入れてみたり、カレンダーをめくってみたりする。どんな顔をしていればいいのか、わからないのだ。まり子のばあちゃんは、いつでも元気だったのもしくなければ嫌だった。だから、ねえちゃんみたいにはあちゃんをトイレに連れて行くことが、どうしてもできなかった。ねえちゃんが家にいない時は、誰も手をかける者がいないから、ばあちゃんはおまるを使う。ばあちゃんは、おまるを使うのをとても嫌がった。まり子は一度、一人でおまるにしゃがんだまま、涙をぼろぼろこぼしているばあちゃんを見てしまったことがある。胸<sup>①</sup>がきゅんとなった。それでもまり子には、ばあちゃんをトイレに連れて行く勇気がなかった。ねえちゃんはトイレから戻ってきて、ばあちゃんを隣の部屋に連れて行くと、ガラス戸を閉めて、 座り込んだ。「うちがお嫁<sup>よめ</sup>にいったら、ばあちゃん、とうとうおまるばかりになるねえ。あんなに嫌がっちゃうのに。」まり子は、ひざの上の〈へりんごさん〉をぎゅっと握って、黙ってダンボール箱へ押し込んだ。

十日ほどたって、ねえちゃんの婚約者と仲人<sup>なこうど</sup>さんが、結婚式の打ち合わせにやってきた。うだるような暑さで、皆冷たいものを飲んでいたが、ただ一人、ばあちゃんは、ほとんど何も口にしなかった。母さんが途中で気づいて麦茶を勧めても、ばあちゃんは小さく笑って、首を横にふった。

「のりえさんの小さい時の写真を拝見したいものですね。」という声に、まり子は気をきかせて、ばあちゃんの部屋にアルバムを取りに行った。アルバムを取り出したまり子は、なにげなく部屋を見渡した。(あれっ。)おまるが消えている。よく見ると、おまるは大きなふろしきでおおわれていて、その上に、去年、ねえちゃんがばあちゃんのために編んだ、うす水色

のひざかけがかけてあった。(ばあちゃん、なんでこんなこと……。) まり子は隠れたおまるをにらんだ。(ばあちゃん、おまるを見られるのが嫌だったんだ。ねえちゃんに迷惑かけたくなくて、それで朝から何も飲まなかったんだ。) 気がつくとはだして店先へ飛び出していた。(そうだ!) まり子はそのまま、物置へ走った。

しばらくして、まり子はみんなの前に戻ってきた。まり子は、ばあちゃんのそばに行くと、耳元でささやいた。「ばあちゃん、一緒にトイレに行こう。」ばあちゃんは、とっさにガラス戸の向こうを見た。そして、くちびるをかすかに動かしてまり子を見た。まり子は、ごわっとした、しわだらけの手を握った。ばあちゃんの体は考えていたよりずっと重く、立っているのがやっとだった。はじめの一步がなかなか踏み出せない。「まり子、もうええよ。」ばあちゃんが言った時、誰かがひょいと、まり子のおしりを押した。「まり子、がんばれ。」ねえちゃんの声だ。はずみで右足がついっと出た。一步、二歩。肩にかかる重さで何も考えられなかったが、ばあちゃんと二人で歩き出せた。まり子は、ひじでトイレのドアを開けると、ばあちゃんにあごで合図した。「ばあちゃん、これを見て!」トイレの手すりに、布きれがぐるぐると巻き付けてあった。「ばあちゃん、へりんごさん」よ。覚えちよる?」ばあちゃんは目を細めると、指の節がごきりと太くなった手で、手すりをなでた。「手すり、握りやすかる?へりんごさん」のすべり止め。」まり子は両足をふんばってばあちゃんの重みを支えながら、もう一度へりんごさん」を見た。

(注) おまる……持ち運びのできる便器。

へりんごさん」……幼いころ、祖母がリンゴのアップリケをつけてくれた、まり子のお気に入りだったTシャツ。ダンボール箱に入れて物置にしまわれていたが、姉が古着の整理をしている時に出てきた。

(村中李衣「りんごさん」より)



(1) — 線①「胸がきゅんとなった」とあるが、ここからまり子のどんな気持ちがわかるか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア いらだたしさ    イ みじめさ  
ウ もどかしさ    エ せつなさ

(2) にあてはまる最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア さつさと    イ ペしゃんと  
ウ ちょこんと    エ ゆったりと

(3) — 線②「ただ一人、……しなかった」とあるが、その理由がわかる一文の最初と最後の三字を書け。(句読点は含まない。)

、

(4) — 線③「まり子、もうええよ」とあるが、なぜばあちゃんはそう言ったのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア ねえちゃんが助けしてくれると思ったから。  
イ まり子の力のなさにあきれたから。  
ウ まり子にすまなかったから。  
エ 立つのに疲れてきたから。

(5) この文章ではあちゃんはどんな人物として描かれているか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 他人への依頼心が強く、涙もろい。

イ しんは強いが、周りに気をつかう。

ウ 警戒心は強いが、人に従う。

エ 我慢強く、心が広い。



第四講・復習問題 《文学的文章》 物語・小説の読解ルール(2)

授業で使ったテキストをじっくり見直して、後の問題を解きなさい（二つ 5点 計15点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「ゆっくり歩いきいや。」ねえちゃんは、注意深くばあちゃんの体を支えて歩き出した。トイレに向かう二人がまり子の前を通り過ぎる時、まり子はいつも、思い出したようにテレビのスイッチを入れてみたり、カレンダーをめくってみたりする。どんな顔をしていればいいのか、わからないのだ。まり子のばあちゃんは、いつでも元気でしたのもしくなければ嫌だった。

〔甲〕、ねえちゃんみたいにはあちゃんをトイレに連れて行くことが、どうしてもできなかった。ねえちゃんが家にいない時は、誰も手をかける者がいないから、ばあちゃんはおまるを使う。ばあちゃんは、おまるを使うのをとても嫌がった。まり子は一度、一人でおまるにしゃがんだまま、涙をぼろぼろこぼしているばあちゃんを見てしまったことがある。〔乙〕

がきゅんとなった。それでもまり子には、ばあちゃんをトイレに連れて行く勇気がでなかった。ねえちゃんはトイレから戻ってきて、ばあちゃんを隣の部屋に連れて行くと、ガラス戸を閉めて、ぺしゃんと座り込んだ。「うちがお嫁<sup>よめ</sup>にいったら、ばあちゃん、とうとうおまるばかりになるねえ。あんなに嫌がっちゃうのに。」まり子は、ひざの上の〈りんごさん〉をぎゅっと握って、黙ってダンボール箱へ押し込んだ。

十日ほどたって、ねえちゃんの婚約者と仲人<sup>なこうど</sup>さんが、結婚式の打ち合わせにやってきた。うだるような暑さで、皆冷たいものを飲んでいたが、ただ一人、ばあちゃんは、ほとんど何も口にしなかった。母さんが途中で気づいて麦茶を勧めても、ばあちゃんは小さく笑って、首を横にふった。

「のりえさんの小さい時の写真を拝見したいんですね。」という声に、まり子は気をきかせて、ばあちゃんの部屋にアル

バムを取りに行った。アルバムを取り出したまり子は、なにげなく部屋を見渡した。

（あれっ。）おまるが消えている。よく見ると、おまるは大きなふろしきでおおわれていて、その上に、去年、ねえちゃんがばあちゃんのために編んだ、うす水色のひざかけがかけてあった。（ばあちゃん、なんでこんなこと……。）まり子は隠れたおまるをにらんだ。（ばあちゃん、おまるを見られるのが嫌だったんだ。ねえちゃんに迷惑かけたくなくて、それで朝から何も飲まなかったんだ。）気がつくとはだして店先へ飛び出していた。（そうだ！）まり子はそのまま、物置へ走った。

しばらくして、まり子はみんなの前に戻ってきた。まり子は、ばあちゃんのそばに行くと、耳元でささやいた。「ばあちゃん、一緒にトイレに行こう。」ばあちゃんは、とっさにガラス戸の向こうを見た。そして、くちびるをかすかに動かしてまり子を見た。まり子は、ごわっとした、しわだらけの手を握った。ばあちゃんの体は考えていたよりずっと重く、立っているのがやっとだった。はじめの一步がなかなか踏み出せない。「まり子、もうええよ。」ばあちゃんが言った時、誰かがひょいと、まり子のおしりを押した。「まり子、がんばれ。」ねえちゃんの声だ。はずみで右足がついっと出た。一步、二歩。肩にかかる重さで何も考えられなかったが、ばあちゃんと二人で歩き出せた。まり子は、ひじでトイレのドアを開けると、ばあちゃんにあごで合図した。「ばあちゃん、これを見て！」トイレの手すりに、布きれがぐるぐると巻き付けてあった。「ばあちゃん、へりんごさん」よ。覚えちよる？」ばあちゃんは目を細めると、指の節がごきりと太くなった手で、手すりをなでた。「手すり、握りやすかる？へりんごさん」のすべり止め。」まり子は両足をふんばってばあちゃんの重みを支えながら、もう一度へりんごさんを見た。

（注）おまる……持ち運びのできる便器。

へりんごさん……幼いころ、祖母がリンゴのアップリケをつけてくれた、まり子のお気に入りだったTシャツ。ダンボール箱に入れて物置にしまわれていたが、姉が古着の整理をしている時に出てきた。

（むらなかりえ）村中李衣「りんごさん」より）

問一 空欄（甲）に入る接続語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア そして      イ しかし      ウ また  
エ だから      オ そのうえ

問二 空欄（乙）にあてはまる、体の一部を表す漢字一字を書け。

問三 この文章で、「まり子」はどんな人物として描かれているか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 「ばあちゃん」に対して反発を抱き、何かと反抗している。  
イ 「ばあちゃん」に対して心配ばかりし、いつも気をつかっている。  
ウ 「ばあちゃん」に対してどう接すれば良いか分からず、何も出来ずにいる時もある。  
エ 「ばあちゃん」に対して我慢強く接し、どのようなことにも心広く構えている。

第四講・確認テスト《文学的文章》物語・小説の読解ルール(2)

次の語句の、カタカナ部分を漢字に改めるとどうなるか。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 うだるようなアツさ

- ① 篤
- ② 熱
- ③ 厚
- ④ 暑

問二 ト中で気づいて

- ① 途
- ② 戸
- ③ 徒
- ④ 登

問三 アンだうす水色のひざかけ

- ① 編
- ② 安
- ③ 案
- ④ 按

問四 あごでアイ図した。

- ① 相
- ② 会
- ③ 合
- ④ 間

問五 指のフシ

- ① 付
- ② 臥
- ③ 伏
- ④ 節

☐
☐
☐
☐
☐

## 第五講・《文学的文章》物語・小説の読解ルール(3)

主題をとらえる

?



### 1 主題とは何か

作者がその作品を通して、読者に最も強くうったえようとしているテーマのことである。

### 2 主題のとらえ方

- (1) 各場面の人物・事件・背景（小説の三要素）をとらえ、あらすじ（展開）を理解する。
- (2) 人物の行動・心情などを手がかりに作者のうったえようとする主題をとらえる。

主題は、人物・事件・情景・心情などを総合してつかむ。次の三つを手がかりにする。

- ① 人物の行動・心情などから。
- ② クライマックス（やま場）から。
- ③ 事件の推移と人物から。

例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

江戸時代末期、オランダ商館医師で博物学者のシーボルトとお滝の間に生まれたお稲は、成長するにつれ、父シーボルトのように学問を身につけようと思うようになった。養父時治郎と母のお滝はお稲が学問をすることに反対したが、お稲の固い志を知り、シーボルトのかつての弟子であった二宮敬作のもとにやることにした。この時お稲は、十四歳であった。

見送る者は、「道中御無事に……」と口々に挨拶し、旅に出る者たちは見送ってくれた謝辞を述べた。

お稲は、A。母の眼に涙が光っているのを眼にした彼女は、胸に熱いものがつき上げるのを意識した。

「体に気をつけて……」

お滝が、頬に流れる涙をぬぐいながら言った。

お稲は、嗚咽おえろした。

「便りを必ず出しておくれ」

お滝が言うと、お稲はB。

お稲は、母にさからって学問修業を志し遠く伊予国いよのくにの二宮敬作のもとに赴くおもむ自分が、不孝な娘に思えた。<sup>①</sup>学問など志すことさえなければ、長崎で母の身近にいて安穩あんのんな生活をおくれる。それを母も望んでいたのだが、母をふり切るように遠い地へ行こうとしている自分が、人間としての道に反した女に思えた。

「不孝をお許し下さい」

お稲は、泣きながら辛うじてそれだけを口にした。



② お滝は、懷中から櫛くしをとり出すと無言でお稲の髪にさした。それは、シーボルトからの初めての便りとともに送られてきた玳瑁たいまいの櫛であつた。

「涙は、旅立ちに無用だ」

時治郎が、近寄つて言つた。

「さ、参りましょう」

番頭の吉兵衛が、お稲に声をかけた。

再び見送る者と旅立つ者の間で、別れの言葉が交された。お滝は、お稲の顔を見つめていた。お稲は頭をさげ、吉兵衛の後について歩きはじめた。

橋を渡つたお稲は、C。時治郎が手をふり、お滝は、硬直したように身じろぎもせず立っている。

道の曲り角まがに來た。お稲は、かすかに手をあげた。涙でかすんだ眼に、母の立ちつくす姿がぼんやりと見えた。

(吉村 昭「ふおん・しいはるとの娘」より)

(注) 嗚咽……声をおさえて泣くこと。

伊予国……今の愛媛県。

玳瑁……ウミガメの一種。甲らをべっこう細工にする。

- (1) A C にあてはまるお稲の動作として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア 何度もふり返った      イ お滝に歩み寄った

ウ 何度もうなずいた      エ 首を横に振った

A

B

C

- (2) — 線①「不孝な娘」とあるが、これと同じような意味を表す言葉を、文中から十二字で抜き出せ。


- (3) — 線②「お滝は、懷中から櫛をとり出すと無言でお稲の髪にさした」とあるが、この行為に込められたお滝の心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 今後、娘がしっかり生きていくことができるよう、あえて娘に対して厳しくしよう。

イ 娘の将来が心配ではあるが、娘の意志を尊重しながら無事を祈<sup>いの</sup>って見守っていこう。

ウ 学問の世界における娘の成功を楽しみにしながら、娘の帰りを長崎で待っていよう。

エ 娘は大人の複雑な人間関係が理解できていないので、説得するのはあきらめよう。

オ 娘は大人の複雑な人間関係が理解できていないので、説得するのはあきらめよう。

- (4) この文章の主題をまとめた次の文の    にあてはまる言葉を、文中から三字で抜き出せ。

学問修業のため、母と別れるお稲の   。


第五講・復習問題 《文学的文章》 物語・小説の読解ルール(3)

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、後の問題を解きなさい（二つ 5点 計30点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

江戸時代末期、オランダ商館医師で博物学者のシーボルトとお滝の間に生まれたお稲は、成長するにつれ、父シーボルトのように学問を身につけようと思うようになった。養父時治郎と母のお滝はお稲が学問をすることに反対したが、お稲の固い志を知り、シーボルトのかつての弟子であった二宮敬作（にのみやけいさく）のもとにやることにした。この時お稲は、十四歳であった。

見送る者は、「道中御無事に……」と口々に挨拶し、旅に出る者たちは見送ってくれた謝辞を述べた。

お稲は、A。母の眼めに涙が光っているのを眼にした彼女は、胸に熱いものがつき上げるのを意識した。

「体につけて……」

お滝が、頬に流れる涙をぬぐいながら言った。

お稲は、嗚咽おえんした。

「便りを必ず出しておくれ」

お滝が言うと、お稲はB。

お稲は、母にさからって学問修業を志し遠く伊予国いよのくにの二宮敬作のもとに赴く自分が、不孝な娘に思えた。学問など志すことさえなければ、長崎で母の身近にいて安穏あんおんな生活をおくれる。それを母も望んでいたのだが、母をふり切るように遠い地へ行こうとしている自分が、人間としての道に反した女に思えた。

「不孝をお許し下さい」

お稲は、泣きながら辛うじてそれだけを口にした。

お滝は、懷中から櫛くしをとり出すと無言でお稲の髪にさした。それは、シーボルトからの初めての便りとともに送られてきた玳瑁たいまいの櫛であった。

「涙は、旅立ちに無用だ」

時治郎が、近寄って言った。

「さ、参りましょう」

番頭の吉兵衛が、お稲に声をかけた。

再び見送る者と旅立つ者の間で、別れの言葉が交された。お滝は、お稲の顔を見つめていた。お稲は頭をさげ、吉兵衛の後について歩きはじめた。

櫛を渡ったお稲は、C。時治郎が手をふり、お滝は、硬直したように身じろぎもせず立っている。

道の曲り角に來た。お稲は、かすかに手をあげた。涙でかすんだ眼に、母の立ちつくす姿がぼんやりと見えた。

(吉村 昭「ふおん・しいほととの娘」より)

(注) 嗚咽……声をおさえて泣くこと。

伊予国……今の愛媛県。

玳瑁……ウミガメの一種。甲らをべっこう細工にする。

問一

A C にあてはまるお稲の動作として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア 何度もふり返った

イ お滝に歩み寄った

ウ 何度もうなずいた

エ 首を横に振った

A

B

C

問二

傍線部「人間としての道に反した女」と同じような意味で用いられている語句を、文中から四字で抜き出せ。

問三

次の文は、本文における「お稲」の母「お滝」の心情について述べたものである。空欄(甲)(乙)にあてはまる最も適当な二字の熟語を書け。

娘の(甲)が心配ではあるが、娘の意志を尊重しながら(乙)を祈って見守っている。

(甲)

(乙)

第五講・確認テスト 《文学的文章》 物語・小説の読解ルール(3)

次の語句の、カタカナ部分を漢字に改めるとどうなるか。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 ドウチュウご無事に…

- ①道中
- ②同中
- ③堂中
- ④動中

問二 学問シユギヨウ

- ①修行
- ②執行
- ③修業
- ④衆業

問三 親フコウな娘

- ①不幸
- ②不孝
- ③不好
- ④不候

問四 カイチユウから櫛をとり出す

- ①戒中
- ②壞中
- ③回中
- ④懷中

問五 涙は、旅立ちにムヨウだ

- ①無用
- ②無様
- ③無要
- ④無容

第六講・《文学的文章》物語・小説の弱点補強(1)

あらすじ・心情を読み取る問題

?



例題

次の文章は、「僕」と育ての親の「ハルさん」との大みそかの晩の話である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

除夜の鐘が遠くから聞こえる。テレビを消した居間で、僕はコタツに入ってノートをめくる。ときどきノートの文字がにじみそうになり、そのたびに手の甲で涙を拭<sup>ぬぐ</sup>う。母の日記だ。ハルさんが書き写した、母の日記が、僕の目の前にある。

「うちが死んでから、あんたにあげようと思うとったんじゃけどな」ハルさんは仏壇の下<sup>ひきだし</sup>の抽斗からノートを出して、言ったのだ。「ほいでも、あと、もうなんべん会えるんかわからんけん」と笑って、はい、と回覧板を回すような軽い手つきで僕に渡したのだった。「……なんで？」びりびりに引き裂いたはず、だった。

「なんでいうて、捨てられんが、やつぱり、こういうものは」

引き裂いたノートを、ハルさんはゴミ箱には捨てなかった。菓子箱の中に入れて筆<sup>たんす</sup>筒にしまいこんだ。「うちもカッとしたら後先考えんことしてしまうけんなあ……」とハルさんは言っつて、「血はつながつたらんのに、あんたとよう似とるやろ」と笑った。

僕が上京したあと、菓子箱を取り出して、手紙のかけらをジグソーパズルのようにつなぎ合わせた。何日もかかった。最初はセロハンテープで張り合わせようとしたが、手元が不器用なのでなかなかうまくいかず、結局書き写すことにした。

ハルさんの字だ。けれど、ハルさんの字ではない。「敬一くんのお母さん、達<sup>たつ</sup>筆<sup>ひ</sup>じゃけん、大変じゃったんよ」——ハルさんは、一文字ずつ、ノートに記された母の字を真<sup>ま</sup>似<sup>ね</sup>て書き写していったのだ。文字がまたにじむ。手の甲で涙を拭う。除夜の鐘が、また鳴った。その音に揺さぶられたように、文字はまたにじんてしまう。

さつきまで「テレビは目が疲れるけん」とイヤホンでラジオを聴いていたハルさんは、コタツにもぐり込んだまま横になって、うとうとしている。寝たふりをしているのかもしれない、とも思う。

僕はノートのページをめくる。母の日記は、もうすぐ終わる。長い手紙が、終わる。

最後の日の日記も、ハルさんは読み取れない文字を忠実に書き写していた。唯一読み取れた「けい」の文字も、しっかりと、写してくれていた。ノートは、本物の日記がそうだったように、三分の二ほどで終わっていた。余ったページをばらばらとめくる。このあたりにハルさんはよけいなことを書いていたんだな、と涙を嚙りながら浮かべた苦笑いが、ふと、止まった。最後のページに短い言葉が書いてあった。

〈追伸 敬一くん わたしも天国に行ってから、ずっと敬一くんの母親です〉

息を詰め、歯を食いしばった。

ノートを閉じて、また開く。最後のページをもう一度、眉間に力を込めて見つめる。

立ち上がった。隣の部屋の押し入れから、掛け布団を出した。たった一組の布団は、火の気のない部屋の押し入れの中で、冷たく、ぺたんこになっていた。

居間に戻る。仏壇を見つめ、深く頭を下げて、ハルさんの脇にかがみ込んだ。

ハルさんはやはり眠り込んでいるようだった。イヤホンが耳からはずれ、かすかないびきも聞こえる。僕はまた立ち上がり、両手に持った布団をファンヒーターの前にかざしながら、声をかけた。

「風邪ひくよ、お母ちゃん」

返事はなかった。揺り起こそうかと思ったが、いいよな、これで、と少しだけ温もった布団を肩から掛けた。コタツに戻って、ミカンを食べた。酸っぱさに顔をしかめ、口をとがらせて、誰が見ているわけでもないのに、照れ笑いを浮かべた。

除夜の鐘が鳴る。これでいくつだろう。もう日付は変わった。新しい年になった。



「お母ちゃん、明けておめでとう」

⑤ ハルさんに掛けた布団が、小刻みに震ふる。僕は二つめのミカンに手を伸ばす。

(重松 清「卒業」より)

(1) 線①「そのたびに手の甲で涙を拭う」は、いくつの単語からなっているか。その数を漢数字で書け。

(2) 線②「達筆」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 字を慌てて書いてあること。
- イ 文字をびっしり書いてあること。
- ウ 文字を上手に書いてあること。
- エ 下手な筆字で書いてあること。

(3) この話の中には、時間の経過を表すために効果的に繰り返し使われているものがある。それは何か。文中から抜き出せ。

[illegible]

第六講・復習問題 《文学的文章》 物語・小説の弱点補強(1)

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、後の問題を解きなさい（二つ5点 計30点満点）

次の文章は、「僕」と育ての親の「ハルさん」とのある夜の出来事である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

深夜の鐘が遠くから聞こえる。テレビを消した居間で、僕はコタツに入ってノートをめくる。ときどきノートの文字がにじみそうになり、そのたび①に手の甲で涙を拭<sup>ぬぐ</sup>う。母の日記だ。ハルさんが書き写した、母の日記が、僕の目の前にある。

「うちが死んでから、あんたにあげようと思うとったんじゃけどな」ハルさんは仏壇の下②の抽斗③からノートを出して、言ったのだ。「ほいでも、あと、もうなんべん会えるんかわからんけん」と笑って、はい、と回覧板を回すような軽い手つきで僕に渡したのだった。「……なんで？」びりびりに引き裂いたはず、だった。

「なんでいうて、捨てられんが、やつぱり、こういうものは」

引き裂いたノートを、ハルさんはゴミ箱には捨てなかった。菓子箱の中に入れて筆筒④にしまいこんだ。「うちもカッとしたら後先考えんことしてしまうけんあ……」とハルさんは言っつて、「血はつながつたらんのに、あんたとよう似とるやろ」と笑った。

僕が上京したあと、菓子箱を取り出して、手紙のかけらをジグソーパズルのようにつなぎ合わせた。何日もかかった。最初はセロハンテープで張り合わせようとしたが、手元が不器用なのでなかなかうまくいかず、結局書き写すことにした。

ハルさんの字だ。けれど、ハルさんの字ではない。「敬一くんのお母さん、達筆⑤じゃけん、大変じゃったんよ」——ハルさんは、一文字ずつ、ノートに記された母の字を真似⑥て書き写していったのだ。文字がまたにじむ。手の甲で涙を拭う。深夜の鐘が、また鳴った。その音に揺さぶられたように、文字はまたにじんてしまう。

さつきまで「テレビは目が疲れるけん」とイヤホンでラジオを聴いていたハルさんは、コタツにもぐり込んだまま横になって、うとうとしている。寝たふりをしているのかもしれない、とも思う。

僕はノートのページをめくる。母の日記は、もうすぐ終わる。長い手紙が、終わる。

最後の日の日記も、ハルさんは読み取れない文字を忠実に書き写していた。唯一読み取れた「けい」の文字も、しっかりと、写してくれていた。ノートは、本物の日記がそうだったように、三分の二ほどで終わっていた。余ったページをばらばらとめくる。このあたりにハルさんはよけいなことを書いていたんだな、と涙を啜りながら浮かべた苦笑いが、ふと、止まった。最後のページに短い言葉が書いてあった。

〈追伸 敬一くん わたしも天国に行ってから、ずっと敬一くんの母親です〉

息を詰め、歯を食いしばった。

ノートを閉じて、また開く。最後のページをもう一度、眉間に力を込めて見つめる。

立ち上がった。隣の部屋の押し入れから、掛け布団を出した。たった一組の布団は、火の気のない部屋の押し入れの中で、冷たく、ぺたんこになっていた。

居間に戻る。仏壇を見つめ、深く頭を下げて、ハルさんの脇にかがみ込んだ。

ハルさんはやはり眠り込んでいるようだった。イヤホンが耳からはずれ、かすかないびきも聞こえる。僕はまた立ち上がり、両手に持った布団をファンヒーターの前にかざしながら、声をかけた。

「風邪ひくよ、お母ちゃん」

返事はなかった。揺り起こそうかと思ったが、いいよな、これで、と少しだけ温もった布団を肩から掛けた。コタツに戻って、ミカンを食べた。酸っぱさに顔をしかめ、口をとがらせて、誰が見ているわけでもないのに、照れ笑いを浮かべた。

除夜の鐘が鳴る。これでいくつだろう。もう日付は変わった。新しい年になった。

「お母ちゃん、明けておめでとう」

ハルさんに掛けた布団が、小刻みに震える。僕は二つめのミカンに手を伸ばす。

(重松 清『卒業』より)

問一 傍線部①「その」の品詞は何か。漢字で書け。

問二 傍線部②「達筆」の意味を十字以内で書け。

問三 本文の中では、時間の経過を表すために効果的に繰り返し使われている言葉がある。それは何か。文中から抜き出して答えよ。また、そのことから、本文はいつの出来事といえるか。五字以内の語で答えよ。





問四

次の文章は、二重傍線部A「風邪ひくよ、お母ちゃん」と、二重傍線部B「ハルさんに掛けた布団が、小刻みに震える」を説明したものである。説明文中の空欄に入る最も適当な二字の熟語を書け。

二重傍線部Aは、「僕」がハルさんの思いを〔甲〕に受け止め、母としてのハルさんを心からいたわろうという思いでかけた言葉で、二重傍線部Bは、「ハルさん」が、ようやく自分が〔乙〕として認められた気がして、心が通じ合えたうれしさの余り、泣きながら体を震わせている様子である。

(甲)

(乙)

第六講・確認テスト《文学的文章》物語・小説の弱点補強(1)

次の語句の、カタカナ部分を漢字に改めるとどうなるか。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 カシ箱  
①歌子  
②菓子  
③香子  
④果子

問二 ブキヨウ  
①不器用  
②不機用  
③無器様  
④無機用

問三 ニツキ  
①日記  
②日期  
③日記  
④日器

問四 フトン  
①附団  
②付団  
③富団  
④布団

問五 ジョヤの鐘  
①序夜  
②除夜  
③徐夜  
④叙夜

第七講・《文学的文章》物語・小説の弱点補強(2)

主題・心情の変化を読み取る問題？



例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

車大工の三吉は、初めて車輪の支え木(矢)を作らせてもらえることになった。三吉は自分が作った支え木に名前を彫ろうと夜中に起き出したが、親方に見つかってしまう。しかし、親方はあまり怒らず、それどころかまちがえて「さんちき」と彫ってしまった三吉に手本を見せてくれた。そのとき外で物音がしたので戸を開けると、侍が倒れていた。

知らぬ間に、手が親方の着物のそでをぎっちり握り締めていた。

親方の後ろから三吉もついていき、侍の顔をのぞき込んだ。

いきなり、その目がくわつと開いた。にらみつけるように、こちらを見る。

「む、無念じゃ……。」

そのとき、A 走ってくる足音が聞こえた。

二人は、慌てて家の中へ駆け戻った。戸を閉めて、心張り棒をぎつちりとする。

やがて、三、四人の足音が表で止まった。鋭く低い声がしたかと思うと、すぐに、足音が、もと来たほうへ引き返していき、しだいに遠くなって消えた。

親方は、もう一度戸を細く開けた。何もなかった。倒れていた侍も刀も消えていた。

戸締まりをして親方は、自分でろうそくをつけた。のみをがらくた入れの中へしまうと、まだ体の震えの止まらない三吉



に向かって、静かに言った。

「侍に生まれんで、よかったな。」<sup>①</sup>

「……。」

「あの侍の目は、死ぬ間際やちゅうのに、憎しみでいっぱいやった。侍たちは、やたらと殺しおうてばかりや。国のためやとか言うてるけど、殺し合いの中から、いったい何を作り出すというんじや。」

親方は、三吉が作った矢を握ってぐいと引いた。びくともしない。<sup>②</sup>

「ええ仕上がりや。この車は何年持つと思う？」<sup>③</sup>

三吉は、やっと口を開いた。

「二、三十年やろか。」

「あほう、百年や。」

「百年も！」

「わしらより長生きするんや。侍たちは、なんにも残さんと死んでいくけど、わしらは車を残す。この車は、これから百年もの間、ずっと使われ続けるんや。」

「へええ。」<sup>③</sup>

「へええやあらへん。<sup>(ないだらう)</sup>おまえも、その車大工の一人やないか。まだ[B]やけど。」

「[B]は、余分や。」

「余分のついでに、今から百年先のことを考えてみよか。<sup>(みようか)</sup>世の中、どないなってるやろ。幕府が続いてるか、ほかの藩が天下を取ってるか分からん。けど、わしらみたいな町人の暮らしは、とぎれんと[C]やろ。<sup>(とぎれないで)</sup>祇園祭りも、町衆の力で毎年行われ、この車は、祭りのたびに、おおぜいの見物人の前をゴロゴロ引かれていく。ほいで、<sup>(それで)</sup>だれかが、今わしらの彫った

字を見つけるんや。見つけて、こない言うかもしれへん。」

そこで親方は、腕を組み、声の調子を変えてしゃべりだした。

「ほう、こりやなんと百年も前に作った車や。長持ちしてるなあ。なにに『さんちき』か……。ふうん、これを作った車大工やな。ちよつと変わった名前やけど、きつとD車大工やったんやろなあ……。」

「親方——。」

三吉は親方の腰をぎゅつと押した。怒られるかなと思ったけど、何も言われなかった。

「はっはっは、さあ、もう寝ろ。ろうそくがもつたいないやないか。」

親方は、それだけ言うと、さつさと奥へ入ってしまった。

三吉は、ろうそくを吹き消そうとして、もう一度車を見た。

さんちき

と彫った字が、ろうそくの明かりの中に、ぼんやりと浮かんで見える。

「さんちきは、きつと腕のええ車大工になるで。」

そつとつぶやいてから、思い切り息を吸い込んで、ろうそくの明かりをひと吹きで消した。

(吉橋通夫「さんちき」より)

(1) A にあてはまる物音として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア てくてくと イ ばらばらと  
ウ がやがやと エ そそくさと

(2) — 線① 「侍に生まれんで、よかったな」とあるが、職人に生まれた親方が、どうして侍に生まれないでよかったと思ったのか。  にあてはまるように、文中の言葉を用いて八字で書け。

殺し合いの中からは、  から。

(3) — 線② 「びくともしない」とあるが、どのような状態か。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア しっかりしている状態  
イ びくびくしている状態  
ウ よわよわしい状態

(4) — 線③「へええ」とあるが、三吉はどのような気持ちをこめて言ったのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 本場に車が百年も残るのかと疑問に思う気持ち。

イ 車が百年も残ると言う親方を馬鹿にする気持ち。

ウ 車が何年残ろうが自分には関係ないという気持ち。

エ 車が百年も残るのかと感心する気持ち。

(5) [B]にあてはまる言葉を次の中から選び、記号で答えよ。

ア 五人前 イ 二人前

ウ 半人前 エ 男前

(6) [C]にあてはまる親方の言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 続いている イ 楽しい

ウ 終わっている エ どのないなっている

(7) — 線④「声の調子を変えてしゃべりだした」とあるが、なぜ親方は「声の調子を変え」たのか。「……になりきるため」に続くように、文中の言葉を用いて六字で書け。


になりきるため

(8) D にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 腕のええ イ へんな

ウ 腕の悪い エ たよりない

☐

(9) — 線⑤「ろうそくがもったいないやないか」と親方が言ったのはどうしてか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 三吉をさりげなくほめたことに照れを感じてごまかしている。

イ おかみさんに二人の秘密がばれないかとひやひやしている。

ウ ろうそくを無駄<sup>むだ</sup>にしてはいけないと焦<sup>あせ</sup>っている。

エ 夜遅くまで起きている三吉をいさめている。

☐

第七講・復習問題 《文学的文章》 物語・小説の弱点補強(2)

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、後の問題を解きなさい（一つ5点 計25点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

車大工の三吉は、初めて車輪の支え木（矢）を作らせてもらえることになった。三吉は自分が作った支え木に名前を彫ろうと夜中に起き出したが、親方に見つかってしまう。しかし、親方はあまり怒らず、それどころかまちがえて「さんちき」と彫ってしまった三吉に手本を見せてくれた。そのとき外で物音がしたので戸を開けると、侍が倒れていた。

知らぬ間に、手が親方の着物のそでをぎっちり握り締めていた。

親方の後ろから三吉もついていき、侍の顔をのぞき込んだ。

いきなり、その目がくわつと開いた。にらみつけるように、こちらを見る。

「む、無念じゃ……。」

そのとき、ばらばらと走ってくる足音が聞こえた。

二人は、慌てて家の中へ駆け戻った。戸を閉めて、心張り棒をぎつちりとする。

やがて、三、四人の足音が表で止まった。鋭く低い声がしたかと思うと、すぐに、足音が、もと来たほうへ引き返していき、しだいに遠くなって消えた。

親方は、もう一度戸を細く開けた。何もなかった。倒れていた侍も刀も消えていた。

戸締まりをして親方は、自分でろうそくをつけた。のみをがらくた入れの中へしまうと、まだ体の震えの止まらない三吉

に向かって、静かに言った。

「侍に生まれんで、よかったな。」

「……。」

「あの侍の目は、死ぬ間際<sup>まぎわ</sup>やちゅうのに、憎<sup>にく</sup>しみでいっぱいやった。侍たちは、やたらと殺しおうてばかりや。国のためやとか言うてるけど、殺し合いの中から、いったい何を作り出すというんじや。」

親方は、三吉が作った矢を握ってぐいと引いた。<sup>①</sup>びくともしない。

「ええ<sup>(よじ)</sup>仕上がりや。この車は何年持つと思う?」

三吉は、やっと口を開いた。

「二、三十年やろか。」

「あほう、百年や。」

「百年も!」

「わしらより長生きするんや。侍たちは、なんにも残さんと死んでいくけど、わしらは車を残す。この車は、これから百年もの間、ずっと使われ続けるんや。」

「へええ。<sup>②</sup>」

「へええやあらへん<sup>(ないだらう)</sup>。おまえも、その車大工の一人やないか。まだ半人前<sup>③</sup>やけど。」

「半人前は、余分や。」

「余分のついでに、今から百年先のことを考えてみよ<sup>(みようか)</sup>か。世の中、どないなってるやろ。幕府が続いてるか、ほかの藩<sup>はん</sup>が天下を取ってるか分からん。けど、わしらみたいな町人の暮らしは、とぎれ<sup>(とぎれないうで)</sup>んと続いているやろ。祇園<sup>ぎおん</sup>祭りも、町衆<sup>まちしゅう</sup>の力で毎年行われ、この車は、祭りのたびに、おおぜいの見物人の前をゴロゴロ引かれていく。ほい<sup>(それで)</sup>で、だれかが、今わしらの

彫った字を見つけるんや。見つけて、こない言うかもしれへん。」

そこで親方は、腕を組み、声の調子を変えてしゃべりだした。

「ほう、こりやなんと百年も前に作った車や。長持ちしてるなあ。なにに『さんちき』か……。ふうん、これを作った車大工やな。ちよつと変わった名前やけど、きつと□のええ車大工やったんやろなあ……。」

「親方——。」

三吉は親方の腰をぎゅつと押した。怒られるかなと思ったけど、何も言われなかった。

「はっはっは、さあ、もう寝ろ。ろうそくがもつたいないやないか。」<sup>④</sup>

親方は、それだけ言うと、さつさと奥へ入ってしまった。

三吉は、ろうそくを吹き消そうとして、もう一度車を見た。

さんちき

と彫った字が、ろうそくの明かりの中に、ぼんやりと浮かんで見える。

「さんちきは、きつと腕のええ車大工になるで。」

そつとつぶやいてから、思い切り息を吸い込んで、ろうそくの明かりをひと吹きで消した。

(吉橋通夫「さんちき」より)



問一 傍線部①「びくもしない」とあるが、どのような状態か。次の空欄にあてはまる最も適当な言葉を、五字以内の語句で書け。

している状態

問二 傍線部②「へええ」とあるが、三吉はどのような気持ちを込めて言ったのか。次の空欄に当てはまる最も適当な二字の熟語を書け。

車が百年も残るのかと

する気持ち

問三 傍線部③「半人前」とあるが、親方は三吉に、どのような意味で「半人前」と言ったのか。次の空欄にあてはまる最も適当な二字の熟語を書け。

三吉が職人として、

だということ。

問四 本文中の空欄にあてはまる体の一部を表す言葉を、漢字一字で書け。

問五 傍線部④「ろうそくがもったいないやないか」と親方が言ったのはどのような気持ちか。次の空欄にあてはまる最も適当な二字の語を書け。

三吉をさりげなくほめたことに

を感じてごまかしている。

第七講・確認テスト《文学的文章》物語・小説の弱点補強(2)

次の語句の、カタカナ部分を漢字に改めるとどうなるか。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 サムライ ①侍 ②待 ③持 ④恃

問二 オヤカタ ①親片 ②親型 ③親方 ④親肩

問三 トジまり ①戸絞まり ②戸閉まり ③戸締まり ④戸占まり

問四 チョウシ ①調子 ②銚子 ③長子 ④丁子

問五 ダイク ①大供 ②大工 ③大久 ④大口

☐
☐
☐
☐
☐

# 第八講・《説明的文章》説明文の読解ルール(1)

指示語・接続語から筆者の主張をおさえる

?



## 1 説明文の読み方

- (1) 全体の内容をとらえる。まず、何を話題にしているかをとらえる。冒頭の段落に書かれていることが多い。
- (2) 文脈をとらえる。接続語・指示語に注意して、内容の流れを正しく理解する。
- (3) 要点をとらえる。段落ごとの中心となる内容をとらえる。
- (4) 筆者の主張を読み取る。文章全体の構成をとらえ、中心となる段落から筆者の最も伝えたい内容をつかむ。

## 2 話題の中心をとらえる。

説明文は、筆者が自分の得意とする分野について説明・解説し、自分の考えを読者に伝えようとする文章である。問題とする内容は、わかりやすく冒頭に書かれていることが多い。また、筆者の主張したいことも冒頭や最後に述べられていることが多い。

## 3 内容を正しく理解する。

- (1) 指示語 ふつう、その語より前の内容を指す。語句の場合もあるし、一文、それ以上のまとまりの場合もある。
- (2) 接続語 論理的に組み立てられた説明文では、文と文のつながり、各段落の役割、文章全体の構成を理解するための手がかりとなる。

4 要点をとらえる。

- (1) 要点とは、段落の中で筆者が最も強く述べようとしている中心の考え。
- (2) 指示語（例それ）、接続語（例つまり）を手がかりに、筆者の考え、主張を述べている部分（中心文）と、例を示して説明している部分とを見きわめる。

5 要約する。

それぞれの段落の役割に注意しながら、要点をまとめることを要約という。

例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 文章で人をだまさないためには、そこで述べているのが、実際に体験したり目撃したり調査したりしたことなのか、それとも、なにかをもとにして自分が推察したこと、日ごろ考えていること、想像してみたことなのかを明確にしなければならぬだろう。つまり、事実なのか、推測や意見なのかを区別する必要があるということである。事実であれば「である」「だった」と結んでもいい。が、推論なら推論らしく「だろう」とか「と思われる」とか「らしい」とか明記する。こういうことをめんどろがって、読者が事実と意見とを混同するような文章は、結果として嘘をついたことになる。たったそれだけで悪文の資格を獲得する。

② たとえば、子どもが赤い目をして立っていたとする。そういう書き方にとどめれば、むろん事実の文だ。「目が充血している」ととらえて、そう書いても、このへんまでは、まず、事実を書いているとして問題はない。□、そこから、さっきまで泣いていたという判断をひきだすところまで進めば、もう客観的な事実だけを述べた文とはいえない。

③ 客観事実を伝える文のほうが高価値な文とか、推論や意見を述べるのがいけないとかいうつもりは毛頭ない。ただ、悪文であることをまぬがれるためには、「さっきまで泣いていたのだ」と書くのと、「泣いていたにちがいない」と書くのと、「泣いていたのだろう」と書くのと、「泣いていたのかもしれない」と書くのでは、事実の認識のしかたに差があるということをおぼえて、正確に伝える配慮が必要だといいたいだけだ。その子は単に寝不足だったのかもしれないのである。

④ 新聞記事ともなれば、文章の具体性や平明さも大事だが、何よりも必要なのは正確さだ。辰濃和男『文章の書き方』では、正確に伝えるために、こまめに調べることに、先入観にとらわれずに自分の目でしっかり見ることを勧めている。具体的には、数字と固有名詞には特に気をつけ、おっくうがらずに辞典や年表その他の資料にあたるのがまず必要だとい

15

10

5

う。<sup>②</sup>そうすることで不注意な誤りが大幅に減り、孫引きによる失敗もある程度防げるといふ。また、夕焼けというとき、「あかね色」と書きやすいが、実際には朱色に燃えるときも、淡い紅色に染まるときも、えんじ色に見えるときもある。この教訓は新聞記事の場合だけではなく、文章の書き方一般にあてはまる。

⑤ 事実か意見かという点をもう少し細かく見れば、同じく事実を伝える態度で書く文章にもいろいろある。それが自分の直接に体験した事実なのか、人から伝え聞いた事実なのか、または、だれかの考えを引用したり紹介したりしているのか、といった違いを区別することも大切だ。一方、意見を述べる態度で書く文章でも、それが自分自身の考えなのか、だれかの考えなのかを明確にすることが肝要だ。推定・評価・説・主張といった判断の差を言語的に明示することが正しい伝達を支えていることを忘れないようにしたい。

⑥ このあたりの表現態度があいまいなままに書きつづけると、あとで修正不能になることもある。推敲段階で正確な文章に近づけようとして表現をいじりだすと、つじつまが合わなくなることが多いのだ。たとえば、事実をもとに次を展開させたはずなのに、そこが実は意見だったというようなことがあとでわかると、そこだけ直せばいいというものではなく、それ以降の論が成り立たなくなる。自分の意見のつもりで書いていたところが実は他人の意見のうけうりだったりすると、全体の記述の流れがおかしくなり、オリジナリティーが消滅したりする。直せば直すほど支離滅裂になり、ますます悪文に近づく。

⑦ 文章はまちがってさえいなければいいというものではない。これで意図が充分通じるか、相手が誤解するおそれはないか、もっとわかりやすく書けないか、というふうに一度、他人の目で批判的に読んでみるのである。他人は自分ではない。これは恐ろしいことだ。そのことがほんとうにわかったとき、悪文は大幅に減るはずである。(中村 明「悪文」より)

(注) 孫引き……他の本に引用してある文句をそのまま引用すること。

オリジナリティー……独自性。独創性。

(1) — 線①「悪文」とあるが、どのような文章か。①段落の中から二十字以内で抜き出し、最初と最後の三字を書け。

(2) にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア　そして　　イ　しかし

ウ　すると　　エ　また

(3) — 線②「そうすること」とあるが、どうすることか。それが書かれている部分を文中から抜き出し、最初と最後の三字を書け。

(4) この文章の内容を説明した次の文の  にあてはまる言葉を漢字二字で書け。

人に  を与えない文章の書き方。

第八講・復習問題 《説明的文章》 説明文の読解ルール(1)

授業で使ったテキストをじっくり見直して、後の問題を解きなさい（二つ5点 計25点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

文章で人をだまさないためには、そこで述べているのが、実際に体験したり目撃したり調査したりしたことなのか、それとも、なにかをもとにして自分が推察したこと、日ごろ考えていること、想像してみたことなのかを明確にしなければなら  
ないだろう。つまり、事実なのか、推測や意見なのかを区別する必要があるということである。事実であれば「である」「  
だった」と結んでもいい。が、推論なら推論らしく「だろう」とか「と思われる」とか「らしい」とか明記する。こうい  
うことをめんどうがって、読者が事実と意見とを混同するような文章は、結果として嘘をついたことになる。たったそれだ  
けで悪文の資格を獲得する。

A、子どもが赤い目をして立っていたとする。そういう書き方にとどめれば、むしろ事実の文だ。「目が充血してい  
る」ととらえて、そう書いても、このへんまでは、まず、事実を書いているとして問題はない。B、そこから、さつき  
まで泣いていたという判断をひきだすところまで進めば、もう客観的な事実だけを述べた文とはいえない。

客観事実を伝える文のほうが価値が高いつか、推論や意見を述べるのがいけないとかいうつもりは毛頭ない。ただ、悪文  
であることをまぬがれるためには、「さつきまで泣いていたのだ」と書くのと、「泣いていたにちがいない」と書くのと、「泣  
いていたのだろう」と書くのと、「泣いていたのかかもしれない」と書くのでは、事実の認識のしかたに差があるというこ  
とを自覚し、正確に伝える配慮が必要だといいたいだけだ。その子は単に寝不足だったのかもしれないのである。

新聞記事ともなれば、文章の具体性や平明さも大事だが、何よりも必要なのは正確さだ。辰濃和男『文章の書き方』で



は、正確に伝えるために、こまめに調べることに、先入観にとらわれずに自分の目でしっかり見ることを勧めている。具体的には、数字と固有名詞には特に気をつけ、おつくうがらずに辞典や年表その他の資料にあたる必要だということ。そうすることで不注意な誤りが大幅に減り、孫引きによる失敗もある程度防げるという。また、夕焼けというと、すぐ「あかね色」と書きやすいが、実際には朱色に燃えるときも、淡い紅色に染まるときも、えんじ色に見えるときもある。この教訓は新聞記事の場合だけではなく、文章の書き方一般にあてはまる。

事実か意見かという点をもう少し細かく見れば、同じく事実を伝える態度で書く文章にもいろいろある。①それが自分の直接に体験した事実なのか、人から伝え聞いた事実なのか、または、だれかの考えを引用したり紹介したりしているのか、といった違いを区別することも大切だ。一方、意見を述べる態度で書く文章でも、②それが自分自身の考えなのか、だれかの考えなのかを明確にすることが肝要だ。推定・評価・説・主張といった判断の差を言語的に明示することが正しい伝達を支えていることを忘れないようにしたい。

このあたりの表現態度がいまいなままに書きつづけると、あとで修正不能になることもある。推敲段階で正確な文章に近づけようとして表現をいじりだすと、つじつまが合わなくなることが多いのだ。たとえば、事実をもとに次を展開させたはずなのに、そこが実は意見だったというようなことがあとでわかると、そこだけ直せばいいというものではなく、それ以降の論が成り立たなくなる。自分の意見のつもりで書いていたところが実は他人の意見のうけうりだったりすると、全体の記述の流れがおかしくなり、オリジナリティーが消滅したりする。直せば直すほど支離滅裂になり、ますます悪文に近づく。

文章はまちがってさえいなければいいというものではない。これで意図が充分通じるか、相手が誤解するおそれはないか、もつとわかりやすく書けないか、というふうに一度、他人の目で批判的に読んでみるのである。他人は自分ではない。これは恐ろしいことだ。そのことがほんとうにわかったとき、悪文は大幅に減るはずである。

なかむら  
あきら  
(中村 明「悪文」より)

(注) 孫引き……他の本に引用してある文句をそのまま引用すること。

オリジナリティー……独自性。独創性。

問一 本文は、「悪文」とはどのような文章かを述べたものである。筆者の考える「悪文」の説明として適切な内容になる

よう、次の文の空欄(甲)、(乙)、(丙)にあてはまる二字の熟語を、本文の第一段落からそれぞれ抜き出せ。

読者が、(甲)と(乙)とを(丙)するような文章。

(甲)


(乙)


(丙)


問二 本文中の空欄Aにあてはまる「具体例をあげて説明する副詞」を、ひらがな四字で答えよ。

問三 本文中の空欄Bにあてはまる「逆接の接続詞」を、ひらがな三字で答えよ。





第八講・確認テスト 《説明的文章》 説明文の読解ルール(1)

次の語句の、カタカナ部分を漢字に改めるとどうなるか。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 ジッサイ ① 実際 ② 実祭 ③ 実歳 ④ 実蔡

問二 タイケン ① 体険 ② 体検 ③ 体験 ④ 体儉

問三 ソウゾウ ① 総造 ② 総像 ③ 想造 ④ 想像

問四 スイソク ① 推則 ② 推測 ③ 推側 ④ 推速

問五 タイド ① 態度 ② 体度 ③ 対度 ④ 怠度

☐
☐
☐
☐
☐

第九講・《説明的文章》説明文の読解ルール(2) 段落ごとの内容から筆者の主張をおさえる？



① 形式段落（小段落）と意味段落（大段落）

(1) 形式段落 行をかえて一字下げて書き始められている、それぞれのまとまり。

(2) 意味段落 意味のまとまりのうえから、形式段落をいくつかの大きい段落にまとめとらえたもの。

小段落の内容をとらえ、大段落にまとめる。

例題の本文では、大段落(一)―笑いとは何か？ どのような意味を持っているのか？ 脳の中では何が起きているのか？

(筆者の問いかけ) ①

大段落(二)―笑いの性質・特徴。 ②③

大段落(三)―笑いのために必要なこと。 ④⑤⑥⑦

大段落(四)―「笑い」のはたらき、意味、効果。 ⑧

② 段落の役割、段落相互の関係をとらえる。

(1) 段落の最初の語句（特に指示語・接続語）に注意する。

(2) 中心となる語句や文に注意して要点をとらえる。

(3) 段落の役割には、次のようなものがある。

- ・ 問題提示
- ・ 例示・比較・検討・原因・結果・補足・発展など
- ・ 結論・結び

③ 文章の構成 基本的な形は次の二つである。

(1) 三段型

序論（問題提示・意見）

←

本論（説明・証明・例示）

←

結論（主張・まとめ）

(2) 四段型（起承転結）

序論（起）（問題提示・意見）

←

説明（承）（内容を深める・検討）

←

論証（転）（角度を変える・対立）

←

結論（結）（主張・まとめ）

筆者の主張は、最終段落に述べられていることが多い。

例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 一体、人間にとって笑いとは何なのだろうか？ 生きる上で、笑うということはどのような意味を持っているのだろうか？ 笑っている時に、人間の脳の中では何が起きているのか？ そのような問題に、ずっと関心を抱いてきたのである。

② 笑いとは、決して気楽なものではない。時にそれは、生きるということの切なさ、難しさと結びついている。恐怖や不安が笑いの背景にあることも多い。イギリスのコメディでは、社会に対する風刺が笑いの原動力になっている。

③ その一方で、笑いのプロフェッショナルたちは、単なる批判では笑いにならないことも知っている。あくまでも、目的が「笑う」ことだとすれば、その大目標を達成するためには、絶妙なバランスと、繊細な文脈せんさいの設定が必要となるのだ。

④ 笑いのためには、時には身を捨てることも必要である。自分の欠点、ダメなところを客観的に見ることができるか。そのような「メタ認知」の能力が、笑いには欠かせない。ある人が、自分の欠点を懸命に隠そうとすると、周囲の人たちはかえってそのことが気になって仕方がなくなるのである。自分の一番痛いポイントを、人前でユーモアをもって話すことができる人は、それだけ自分自身から解放されている。

⑤ 「ある人の価値は、何よりも、自分自身からどれくらい解放されているかということで決まる」。

⑥ 相対性理論を創った天才物理学者、アルベルト・アインシュタインはそうに言った。そのアインシュタインは、生涯にわたってユーモアのセンスを忘れなかった人だった。そのことと、アインシュタインが相対性理論という革命を成し遂げたことは関係しているかもしれない。

⑦ 自分自身をメタ認知して、苦しいことを笑いに転化することができる、それだけ生きる上での前向きなエネルギーを得ることができる。また、自分の欠点をしっかりと見据えることで、その改善を図ることができる。欠点を隠して、うや

15

10

5

むやにしてしまったり、実際以上に自分を大きく見せようとしたりするよりは、はるかに素晴らしい人生を送ることができる。

⑧「笑い」は、人生の階段を上るための支点である。生きる以上、どんな人にも苦難は訪れる。しかし、笑いがあれば、逃れようがないように見える泥沼からも、すつと身体を浮かび上がらせることができる。笑いは、人と人とのコミュニケーションを円滑にする。さらさらとした非難の代わりに、愛のあるツツコミをやりとりすることができる。笑いがあれば、経済や社会の状況がどんなに悪くなっても、なおも前向きの気持ちを忘れずに、日々を生きることができる。

（茂木健一郎「笑う脳」より）

（注）コメディ……喜劇。

風刺……社会、政治などを遠回しに批判すること。

繊細……こまやかなこと。

メタ認知……自分の思考や行動を客観的にとらえて理解すること。

相対性理論……物理学の基礎理論。

転化……ほかの状態に変えること。



(1) この文章は、意味のうえから、大きく四つに分けることができる。その分け方として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア ①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧

イ ①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧

ウ ①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧

エ ①・②・③・④・⑤・⑥・⑦・⑧

(2) ①段落の問いかけに対する答えをまとめているのは、どの段落か。段落番号で答えよ。

(3) 線部「身を捨てる」とはどうすることか。文中から二十一字で抜き出し、最初と最後の三字を書け。

(4) ⑦段落は、④・⑤・⑥段落とどのような関係にあるか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア ④段落とは反対の考えを、⑤・⑥段落の例を参考にして⑦段落で述べている。

イ ④・⑤・⑥段落で述べたことについて、⑦段落で具体的な例をあげて説明している。

ウ ④段落で述べたことを、⑤・⑥段落の例と合わせてもう一度⑦段落でまとめている。

(5) 筆者の考えをまとめた次の文の a 〔 〕 c 〔 〕 にあてはまる言葉を文中からそれぞれ抜き出せ。

自分自身から a 〔 一 〕 字され、自分の b 〔 二 〕 字を笑いに転化できれば、 c 〔 三 〕 字の気持ちが生まれ、日々を生きることが  
できる。

a

b

c

第九講・復習問題 《説明的文章》 説明文の読解ルール(2)

授業で使ったテキストをじっくり見直して、後の問題を解きなさい（一つ5点 計25点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一体、人間にとって□□とは何なのだろうか？ 生きる上で、笑うということはどのような意味を持っているのだろうか？ 笑っている時に、人間の脳の中では何が起こっているのか？ そのような問題に、ずっと関心を抱いてきたのである。

笑いとは、決して気楽なものではない。時にそれは、生きるということの切なさ、難しさと結びついている。恐怖や不安が笑いの背景にあることも多い。イギリスのコメディでは、社会に対する風刺が笑いの原動力になっている。

① その一方で、笑いのプロフェッショナルたちは、単なる批判では笑いにならないことも知っている。あくまでも、目的が「笑う」ことだとすれば、その大目標を達成するためには、絶妙なバランスと、繊細せんさいな文脈の設定が必要となるのだ。

笑いのためには、時には身を捨てることも必要である。自分の欠点、ダメなところを客観的に見ることができるか。そのような「メタ認知」の能力が、笑いには欠かせない。ある人が、自分の欠点を懸命に隠そうとすると、周囲の人たちはかえってそのことが気になって仕方がなくなるのである。自分の一番痛いポイントを、人前でユーモアをもって話すことができる人は、それだけ自分自身から解放されている。

「ある人の価値は、何よりも、自分自身からどれくらい解放されているかということ決まる」。

相対性理論を創った天才物理学者、アルベルト・アインシュタインはそうに言った。そのアインシュタインは、生涯にわたってユーモアのセンスを忘れなかった人だった。そのことと、アインシュタインが相対性理論という革命を成し遂げたことは関係しているかもしれない。

自分自身をメタ認知して、苦しいことを笑いに転化することができれば、それだけ生きる上での前向きエネルギーを得ることができる。<sup>②</sup>また、自分の欠点をしっかりと見据えることで、その改善を図ることができる。欠点を隠して、うやむやにしたりしまったり、実際以上に自分を大きく見せようとするよりは、はるかに素晴らしい人生を送ることができる。

「笑い」は、人生の階段を上るための支点である。生きる以上、どんな人にも苦難は訪れる。しかし、笑いがあれば、逃れようがないように見える泥沼からも、すつと身体を浮かび上がらせることができる。笑いは、人と人とのコミュニケーションを円滑にする。ざらざらとした非難の代わりに、愛のあるツツコミをやりとりすることができる。笑いがあれば、経済や社会の状況がどんなに悪くなっても、なおも前向きの気持ちを忘れずに、日々を生きることができる。

（茂木健一郎「笑う脳」より）

（注） コメディ……喜劇。

風刺……社会、政治などを遠回しに批判すること。

繊細……こまやかなこと。

メタ認知……自分の思考や行動を客観的にとらえて理解すること。

相対性理論……物理学の基礎理論。

転化……ほかの状態に変えること。

問一 本文中の空欄には、テーマにつながるキーワードが入る。その言葉は何か、二字の語で答えよ。

問二

傍線部①「その一方で」とあるが、前後をどのような接続関係でつなげているか。二字の熟語で答えよ。

--

問三

傍線部②「また」とあるが、前後をどのような接続関係でつなげているか。二字の熟語で答えよ。

--

問四

筆者は、「笑い」のために、どのような能力が必要だと考えているか。四字の語で答えよ。

--

問五

筆者は、「笑い」の効用としてどのようなことをあげているか。文中から二十字で抜き出せ。

--

第九講・確認テスト 《説明的文章》 説明文の読解ルール(2)

次の語句の、カタカナ部分を漢字に改めるとどうなるか。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 カンシンを抱いてきた

- ① 関心
- ② 感心
- ③ 歓心
- ④ 甘心

問二 笑いのハイケイ

- ① 拝啓
- ② 背景
- ③ 背啓
- ④ 拝景

問三 ソウタイ性理論

- ① 総体
- ② 総対
- ③ 相對
- ④ 相体

問四 苦しいことを笑いにテンカする

- ① 添加
- ② 転嫁
- ③ 転訛
- ④ 転化

問五 ざらざらとしたヒナンの代わり

- ① 非難
- ② 避難
- ③ 否難
- ④ 悲難

☐
☐
☐
☐
☐

第十講・《説明的文章》説明文の読解ルール(3) 要旨・筆者の主張をおさえる？



1 要旨

筆者の主張の要約である。筆者が最も述べたいと思っていることを短くまとめたもの。

2 要旨のとらえ方

(1) 中心段落をみつける。

段落ごとの要点をつかみ、段落相互の関係を見きわめる。そして、中心となる段落と、例示や補足説明などの段落とを区別する。

(2) 中心文をみつける。

中心段落の中で、筆者の主張を表現している文をとらえる。

(3) キーワードに注意する。

文章の中でくり返し用いられている語句をいう。これは、要旨と深くかわってくることが多い。キーワードの出る部分は注意して読み、筆者の意図をつかむようにする。

(4) 文脈に注意して内容をとらえる。

筆者の意見や考えなどの展開をおさえるため、文脈には注意する。指示語で指し示された内容は、必ず指示内容を確認して文脈を明確にしておく。とくに段落冒頭の指示語は、段落相互の関係をとらえるのに重要な役割をはたすことが多い。

3 要旨のまとめ方

(1) できるだけ簡潔にまとめる。

修飾語など省略できるものはできるだけ除き、わかりやすい文にする。

(2) 文中の言葉を用いて短くまとめる。

キーワードがあればもちろんそれを用いる。また、文中の表現でそのまま使える部分は、抜き出して用いた方がよい。

(3) 文意の通るわかりやすい文を書くように心がける。

文中の語句を省略したりつなげたりして、作文することになるため、文の脈絡がなくなり伝えるべき意図が不明瞭ふめいりようになりやすい。筆者の主張・考えがよくわかるように、順序を入れかえたり自分の言葉を加えたりする工夫をする。



例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私たち人間は誰<sup>だれ</sup>でも、この世に生きていくとき、必ずなにかをつくり出し、それによって自己を表現している。なにかをつくるというと、ふつう手仕事や、でなければ工場労働の機械をつかつての生産を、また自己を表現するというと、芸術家の仕事や、でなければ趣味としてやっている俳句や短歌や陶芸など、そういったもののだけを、人は考えがちである。けれども、ここでのいうのは、もっと広い意味でつくり出すことであり、表現である。広い意味でいえば、およそ私たちは、なにもつくらず、なにも表現せずに生きていることはありえないし、生きていくことはできない。

たとえば、極端な話だが、ここに、来る日も来る日も一日中自分の部屋に閉じこもって、誰にも会わず、なにもしない人がいたとする。この人は一見したところなにもつくらず、なにも表現していないように見える。

②、果たして、そういう人は、なにもつくらず、なにも表現していないだろうか。必ずしもそうとはいえない。なんとすれば、その人が<sup>③</sup>そのように振る舞うとき、そこに家族やまわりの人々との間にやはり一種独特の関係をつくり出しているからである。また、その関係を通して「変わり者」あるいは「人間嫌い」として自分を表現しているからである。どうしてもこのようなことになるのだろうか。思うにそれは、私たち人間の一人一人が、この世に生きていくかぎり、すでになんらかの人間関係、社会関係の網のなかで、同じことだがある一定の意味の場＝文化のなかで生きているからであろう。

私たちの一人一人は、ただ個人として在るのではないばかりか、単に集団の一員として在るのでもなくて、そのような意味をもった関係のなかにある、そこそいなければならぬ。だからこそ、自分では社会や政治にまったく関心をもたなくとも、私たちはそれらと無関係でいることはありえないことにもなるのである。むしろそれは、物理的、自然的な関係ではなくて、意味的、価値的な関係である。そうした関係のなかでは、すべての態度、なにもしないことでさえ、いわば一つの行

為になり、なんらかの意味を帯びてくる。

そのことをきわめて鋭くとらえ、表しているのは、現代芸術である。たとえばある作曲家は、ピアニストに対して演奏会場のステージのピアノの前におもむろに腰をかけるなり四分三十三秒間なにもしないままのように指示し、その間に聞こえてくる自然音に聴衆の耳を傾けさせて、それを『四分三十三秒』と名づけた。一風変わったこの例が現代芸術にとって画期的な「作品」であるとされるのも、そこにあるのが単なる奇抜な思いつきではなくて、それをこえたものだからであろう。演奏会場という特定の意味の場そのものを生かして、つくることや表現することのなんたるかを、根本から問いなおしたものだからであろう。

このように私たち人間にとって、なにかをつくり出したり表現することは、なんら特別のことではない。それは、生きるということとほとんど同義語でさえある。

（中村雄二郎「共通感覚論」より）  
なかむらゆうじろう

(1) 線①「考えがちである」は、どういう意味で使われているか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 考える傾向がある      イ 考える可能性がある

ウ 考える危険がある      エ 考える必然性がある

(2) ②にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア さらに      イ そして

ウ だが      エ また

(3) 線③「そのように振る舞う」とは、どのように振る舞うことか。具体的に説明している部分を文中からそのまま抜き出し、最初と最後の五字を書け。



(4) 線④「そうした関係のなかでは……帯びてくる」とあるが、同じ内容を言いかえた次の一文の ⑤ にあてはまる言葉を文中から十九字で抜き出し、最初の五字を書け。

人間は、 ⑥ において生きているものだから、何もしていなくてもその行為に意味が生まれる。

(5) この文章全体で述べている内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 人間は、一人きりで生きているように見えても、芸術や趣味をとおして人間性を豊かに表現できる存在である。
- イ 人間は、なんらかの人間関係や社会関係のなかにあつて、なにかをつくり出し表現して生きている存在である。
- ウ 人間は、社会や政治に深くかわつており、なにもしないことでさえ一つの行為を意味するという存在である。
- エ 人間は、家族や集団の一員として生きるからこそ、一種独特の関係をつくり出し自己を表現できる存在である。



第十講・復習問題 《説明的文章》 説明文の読解ルール(3)

授業で使ったテキストをじっくり見直して、後の問題を解きなさい（二つ5点 計30点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

私たち人間は誰<sup>だれ</sup>でも、この世に生きていくとき、必ずなにかをつくり出し、それによって自己を表現している。なにかをつくるというと、ふつう手仕事や、でなければ工場労働の機械をつかつての生産を、また自己を表現するというと、芸術家の仕事や、でなければ趣味としてやっている俳句や短歌や陶芸など、そういったものだけを、人は考えがちである。けれども、ここでのいうのは、もっと広い意味でつくり出すことであり、表現である。広い意味でいえば、およそ私たちは、なにもつくりず、なにも表現せずに生きていることはありえないし、生きていくことはできない。

①、極端な話だが、ここに、来る日も来る日も一日中自分の部屋に閉じこもって、誰にも会わず、なにもしない人がいたとする。この人は一見したところなにもつくりず、なにも表現していないように見える。

②、果たして、そういう人は、なにもつくりず、なにも表現していないだろうか。必ずしもそうとはいえない。なんとすれば、その人がそのように振る舞うとき、そこに家族やまわりの人々との間にやはり一種独特の関係をつくり出しているからである。また、その関係を通して「変わり者」あるいは「人間嫌い」として自分を表現しているからである。どうしてこのようなことになるのだろうか。思うにそれは、私たち人間の一人一人が、この世に生きていくかぎり、すでになんらかの人間関係、社会関係の網のなかで、同じことだがある一定の意味の場Ⅱ文化のなかで生きているからであろう。

私たちの一人一人は、ただ個人として在るのでもないばかりか、単に集団の一員として在るのでもなくて、そのような意味をもった関係のなかにある、とこそいわなければならない。

③こそ、自分では社会や政治にまったく関心をもたなくと

も、私たちはそれらと無関係でいることはありえないことにもなるのである。むしろそれは、物理的、自然的な関係ではなくて、意味的、価値的な関係である。そうした関係のなかでは、すべての態度、なにもしないことでさえ、いわば一つの行為になり、なんらかの意味を帯びてくる。

そのことをきわめて鋭くとらえ、表しているのは、現代芸術である。たとえばある作曲家は、ピアニストに対して演奏会場のステージのピアノの前におもむろに腰をかけるなり四分三十三秒間なにもしないままのように指示し、その間に聞こえてくる自然音に聴衆の耳を傾けさせて、それを『四分三十三秒』と名づけた。一風変わったこの例が現代芸術にとって画期的な「作品」であるとされるのも、そこにあるのが単なる奇抜な思いつきではなくて、それをこえたものだからであろう。演奏会場という特定の意味の場そのものを生かして、つくることや表現することのなんたるかを、根本から問いなおしたものだからであろう。

このように私たち人間にとって、なにかをつくり出したり表現することは、なんら特別のことではない。それは、生きるということとほとんど同義語でさえある。

(中村雄二郎「共通感覚論」より)

問一 本文中の空欄①には具体例を示す副詞が入る。最も適当な語をひらがな四字で答えよ。


問二 本文中の空欄②には逆接の接続詞が入る。最も適当な語をひらがな二字で答えよ。

問三 本文中の空欄③には原因・理由の接続詞が入る。最も適当な語をひらがな三字で答えよ。

問四 本文中の傍線部「それ」が指し示す部分を、文中から十七字で抜き出せ。

問五 次の文は、本文の内容について、説明したものである。空欄に入る最も適当な二字の熟語を答えよ。ただし、(甲)と(乙)に入る言葉の順は問わない。

人間は、なんらかの(甲)関係や(乙)関係のなかにあつて、なにかをつくり出し表現して生きている存在であり、何をしていなくてもその存在や行為に意味が生まれてくる。

(甲)

(乙)

第十講・確認テスト 《説明的文章》 説明文の読解ルール(3)

次の語句の、カタカナ部分を漢字に改めるとどうなるか。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 キョクタンな話

- ① 曲胆
- ② 曲端
- ③ 極胆
- ④ 極端

問二 エンソウ会場

- ① 宴奏
- ② 宴想
- ③ 演奏
- ④ 演想

問三 (ステージの前の) チョウシユウの耳

- ① 町衆
- ② 聴衆
- ③ 長州
- ④ 徴収

問四 カツキ的な「作品」

- ① 画期
- ② 活気
- ③ 各期
- ④ 各機

問五 ドウギ語

- ① 動議
- ② 道義
- ③ 同議
- ④ 同義

☐
☐
☐
☐
☐



第十一講・《説明的文章》説明文の弱点補強(1)

指示語・接続語・段落内容をとらえる問題？



例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 情報の発信は、情報処理の最後のステップ<sup>①</sup>であると同時に次のステップの始まりでもある。つまり、発信された情報は他者に受信され、次の情報処理の第一ステップが始まるのである。

② このようにして情報の受信・送信のサイクルは次々に網の目のようにつながって、情報化社会のネットワークを形成する。このネットワークは、<sup>②</sup>いわば情報化社会という生命体の毛細血管である。この毛細血管に沿って情報という血液が流れることによって、初めて情報化社会の生命活動が維持される。その生命活動がさまざまな文化を生み出し、文明を開花させるのである。

③ このように考えると、情報を発信するという行為が情報化社会にとっていかに本質的であるかがわかるであろう。もし仮に情報を発信する人が一人もいなくなったならば、それは情報化社会という生命体の死を意味しているのである。

④ A、なぜかわれわれ日本人は、情報を発信することよりも情報を受信することの方を好むようである。あるメールリング・リストでも、以前にそのことが話題になったことがある。ある管理者が調べてみたところ、そのメールリング・リストで活発に情報の発信をする人は全体の約二割であった。つまり、「全体の二割の人の所得（発言）で全体の所得（発言）の八割を占める」というパレート<sup>④</sup>の法則があてはまっていたのである。

⑤ こうした日本人の控えめな性癖<sup>⑤</sup>は、そろそろ改めるべきときではないだろうか。情報化社会を生き抜くためには知性を磨くことが不可欠である。そして、知性を磨くための最も効果的な方法は、情報を発信することである。なぜなら、人間

の言葉には思考を方向づけたり整理したりする働きがあるからである。われわれは誰しも、頭のなかでもやもやしていた事柄が、言葉で表現することによってすっきり整理できた、というような経験をしたことがあるのではないだろうか。<sup>⑤</sup>このよ

うな例からも、言葉には知性を磨く働きがあることがわかるはずである。

⑥ つまり、情報を発信しないことは、食べて寝るだけで運動や仕事をしないと同一ことなのである。そんな生活が体によくないことは明らかである。体に贅肉<sup>ぜいにく</sup>がついて「体の切れ」が悪くなり、ますます運動するのがおっくうになる。運動不足では食欲もわかず、せつかくのご馳走<sup>ちそう</sup>もおいしく食べられないであろう。

⑦ これとまったく同様に、情報を受信するばかりで発信をしないと、<sup>⑥</sup>知性に贅肉<sup>ぜいにく</sup>がついて「頭の切れ」が悪くなり、ますます情報を発信するのがおっくうになる。何<sup>なん</sup>ごとにも好奇心<sup>こうきしん</sup>がわかず、おいしい「生の情報」が送信されてきても、受信する気分にならないことであろう。

⑧ B、情報化社会を生き抜くためには、常に情報の発信をして知性をシェイプアップしておくことが大切なのである。

(注) (森 敏昭<sup>としあき</sup>)「集中力をつける」より

メーリング・リスト……特定の人々を一つのメールアドレスに登録し、そのアドレスに届いたメールを全員に配信する仕組み。  
管理人……メーリング・リストの設置者、運営者。

パレット……イタリアの学者。

「生の情報」……新聞などの活字情報とは違って、ネットワークを通じて伝わってくる即時的な情報。

(1) 線①「ステップ」とあるが、同じような意味の言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 足場 イ 段階

ウ 草原 エ 表現

(2) 線②「このネットワーク」とあるが、どのようなものか。「……」のようなネットワーク」に続くように、文中から

三字で抜き出せ。

のようなネットワーク

(3) 線③「いわば」とほぼ同じ意味の言葉の例として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 私の叔父は東京の浅草、いわゆる下町で生まれ育った。

イ 木造の家は湿度の高い日本の気候にちょうど合っている。

ウ 決勝戦の会場はさながらラッシュ時の駅のような混雑だ。

エ パソコンの説明書の記述は難しくてまるで分からない。

アの前の事柄があとの事柄の原因や理由になることを表す。

イ 前の事柄にあとの事柄を付け加えることを表す。

ウ 前の事柄からあとの事柄に話題を変えることを表す。

工 前の事柄と逆になるような事柄があとにくることを表す。

7

7

線④「こうした日本人の控えめな性癖」とあるが、どのようなものか。それが書かれている部分を、文中から二十

[illegible]

線⑤「このような例」とあるが、どのような例か。それが具体的に書かれた一文を文中から抜き出し、最初と最後


§


(7) ———線⑥「知性に贅肉がついて『頭の切れ』が悪くなり」を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 大量の情報を処理することに追われて、落ち着いて自分の生活や健康を振り返ることができなくなること。
- イ たくさんの情報を手に入れることだけで満足してしまい、自分で深く考えたり、判断したりしなくなること。
- ウ 手当たりしだいに情報を受け取り、他の誰よりも物知りになることで、自分の知性にうぬぼれてしまうこと。
- エ 数ある情報の中から、自分に必要な情報を手に入れることが難しくて、先を見通した考え方ができないこと。



第十一講・復習問題《説明的文章》説明文の弱点補強(1)

授業で使ったテキストをじっくり見直して、後の問題を解きなさい（一つ5点 計25点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

情報の発信は、情報処理の最後のステップであると同時に次のステップの始まりでもある。つまり、発信された情報は他者に受信され、次の情報処理の第一ステップが始まるのである。

このようにして情報の受信・送信のサイクルは次々に網の目のようにつながって、情報化社会のネットワークを形成する。このネットワークは、いわば情報化社会という生命体の毛細血管である。この毛細血管に沿って情報という血液が流れることによって、初めて情報化社会の生命活動が維持される。その生命活動がさまざまな文化を生み出し、文明を開花させるのである。

このように考えると、情報を発信するという行為が情報化社会にとっていかに本質的であるかがわかるであろう。もし仮に情報を発信する人が一人もいなくなったならば、それは情報化社会という生命体の死を意味しているのである。

〔A〕、なぜかわれわれ日本人は、情報を発信することよりも情報を受信することの方を好むようである。あるメーリング・リストでも、以前にそのことが話題になったことがある。ある管理人が調べてみたところ、そのメーリング・リストで活発に情報の発信をする人は全体の約二割であった。つまり、「全体の二割の人の所得（発言）で全体の所得（発言）の八割を占める」というパレート<sup>ひが</sup>の法則があてはまっていたのである。

こうした日本人の控えめな性癖<sup>ひが</sup>は、そろそろ改めるべきときではないだろうか。情報化社会を生き抜くためには知性を磨くことが不可欠である。そして、知性を磨くための最も効果的な方法は、情報を発信することである。なぜなら、人間の言

葉には思考を方向づけたり整理したりする働きがあるからである。われわれは誰しも、頭のなかでもやもやしていた事柄が、言葉で表現することによってすっきり整理できた、というような経験をしたことがあるのではないだろうか。このような例からも、言葉には知性を磨く働きがあることがわかるはずである。

つまり、情報を発信しないことは、食べて寝るだけで運動や仕事をしないと同じことなのである。そんな生活が体によくないことは明らかである。体に贅肉ぜいにくにがついて「体の切れ」が悪くなり、ますます運動するのがおっくうになる。運動不足では食欲もわかず、せっかくなご馳走ちそうもおいしく食べられないであろう。

これとまったく同様に、情報を受信するばかりで発信をしないと、知性に贅肉ぜいにくがついて「頭の切れ」が悪くなり、ますます情報を発信するのがおっくうになる。何ごとにも好奇心こうきしんがわかず、おいしい「生の情報」が送信されてきても、受信する気分にならないことであろう。

**B**、情報化社会を生き抜くためには、常に情報の発信をして知性をシェイプアップしておくことが大切なのである。

(森 敏昭もり としあき「集中力をつける」より)

(注) メールリング・リスト……特定の人々を一つのメールアドレスに登録し、そのアドレスに届いたメールを全員に配信する仕組み。

管理人……メールリング・リストの設置者、運営者。

パレート……イタリアの学者。

生の情報……新聞などの活字情報とは違って、ネットワークを通じて伝わってくる即時的な情報。

問一

傍線部「情報化社会のネットワーク」とはどのようなものに例えられているか。その比喻表現を四字熟語のかたちで文中から抜き出せ。


問二

本文中の空欄A・Bには、それぞれのどのような言葉が入るか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア しかし      イ そして      ウ だから  
エ たとえば      オ また

A
B

問三

次の文は、本文の内容について、説明したものである。空欄に入る最も適当な言葉を文中から抜き出して答えよ。空欄(甲)には二字の熟語、空欄(乙)には三字の熟語が入る。

(甲)の発信をしないでいると、たくさんの(甲)を手に入れることだけで満足してしまい、自分で深く考えたり、判断したりしなくなり、(乙)がわかなくなる。

(甲)

(乙)



第十一講・確認テスト《説明的文章》説明文の弱点補強(1)

次の例文の、傍線部と二重傍線部における、修辭上の関係はどのような関係か。次の選択肢から選りなさい。

問一 遠くから来た少女は、不思議な目をしていた。

問二 遠くから来た少女は、不思議な目をしていた。

問三 雨も、風も、激しさを増した。

問四 男は、じつと立っていた。

- ①修飾・被修飾の関係
- ②並立の関係
- ③補助の関係
- ④主述の関係

☐
☐
☐
☐

第十二講・《説明的文章》説明文の弱点補強(2)

要旨・主張をとらえる問題



例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 見ている世界は知覚の枠組みだけで決まるわけではない。感覚が鋭敏だからといって、かならずしも多くのものが知覚されているとはかぎらない。A、イヌの嗅覚は人間の数千倍とも数千万倍ともいわれる。これは匂いを嗅ぎわけける細胞が、人の場合は約五〇〇万個なのに対して、イヌは約二億五千万個もあるためである。しかし、イヌはその鋭い嗅覚でつねにあらゆる匂いを感じているわけではない。関心のある匂いには集中するが、そうでない匂いは無視しているからである。

② これは人間も同じである。同じ視覚の構造を持つ人間であっても、文化や時代によって見える風景がちがうのは、どこに関心をおいてイメージをつくるかが異なるためである。中世のヨーロッパ人には自然が関心の対象でなかった話はすでにした。もっと身近な例でいえば、町を歩いている若い女の子たちは中年男性など見ていないし、若い男性は女の子ばかり見ていて、そのほかのものは目に入っていないかもしれない。別々の年齢の人たちが同じ町を同じ時間歩いて、なにを見えてきたかと聞けば、それぞれまったくちがう答えが返ってくるはずである。

③ マーシャル・マクルーハンは、こんな話を紹介している。

④ 二〇世紀の前半、あるアフリカの村で、白人の衛生監視員たちが、村人たちに衛生の大切さを教える映画を見せた。上映後、監視員は、村人に「あなたたちは映画で何を見ましたか」とたずねた。監視員は「手を洗っているのを見ました」とか「服をきれいにしているのを見ました」といった反応を期待していたはずだ。B、村人から返ってきたのは「ニワ

トリを見ました」という答えだった。一人だけではなく、みな同じことをいった。

⑤ 監視員たちはとまどった。映画は衛生の大切さを説いたものであつて、ニワトリとは関係ない。そもそもニワトリが映画に出ているはずなどなかった。いぶかしんだ監視員が注意深く映画を見なおすと、途中で、一瞬、画面の下をニワトリが横切る場面が見つかった。撮影現場のそばにいたニワトリが偶然カメラに映りこんでいたのだった。監視員たちは、このときまで、だれもそのことに気づいていなかった。しかし、<sup>④</sup>村人たちにとって、この映画でもっとも印象に残ったのが、このニワトリだった。一方、監視員たちが伝えたかった映画の筋については、村人はまったく理解していなかった。

⑥ この話は、無文字社会の人びとが映画の内容を理解できないことを伝えているわけではない。人は、自分たちの文化的な文脈の中にあるものしか見えないのである。われわれが映画を見てストーリーを理解できるのは、そこに使われている約束事を学習して理解しているからだ。

⑦ たとえば、ドラマの中で男性の笑っている顔が映り、つぎに女性が照れている顔が映ったら、われわれは説明されなくても、二人が同じ場所で見つめ合っているとわかる。それはふだんからテレビや映画を通して、そういう映像の文法に慣れ親しんでいるからである。しかし、そうした約束事を知らなければ、男と女の関係を結びつけては考えられない。監視員たちが上映した映画の中に、村人がニワトリしか見えなかったのは、唯一、<sup>⑤</sup>ニワトリだけが村人の生活の文法で解釈できるものだったからである。

⑧ つまり「見る」には約束事が必要なのだ。これは人間も動物も同じである。動物行動学者のティンバーゲンは、セグロカモメのヒナは餌がほしいとき、親鳥のくちばしの先にある赤い点をつつくことを発見した。ヒナは親鳥をその全体の姿で認識しているのではなく、くちばし状の形とその先端にある赤い点として把握しているのである。それがヒナにとって、親を認識するために先天的にプログラムされた約束事である。この時期のヒナには、たとえ赤い印をつけた棒であっても親鳥に見えるのである。

⑨ どうしてセグロカモメのヒナは親を全体として見ないのか。それは逆のパターンを考えればわかる。視覚に入ってくるすべての情報を分析してから認識するとなったら、とほうもない情報処理能力と時間が必要とされる。野生動物が、そんなことに時間をかけていては、自分の生存が危ぶまれる。そのため、いま生きるうえで必要な情報だけを取りだし、わかりやすくパターン化してイメージを作りあげているのである。

(田中真知「美しいをさがす旅にでよう」より)

(注) 知覚……感覚器官が外界の物事をとらえ、見分ける働き。

鋭敏……鋭いこと。

嗅覚……においを感じ取る働き。

いぶかしむ……不審に思う。

文脈……文章の展開のしかた。ここでは筋道、背景。

先天的に……生まれた時から。

A・B にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア A  $\parallel$  なぜなら B  $\parallel$  やがて  
イ A  $\parallel$  たとえば B  $\parallel$  ところが

ウ A<sub>II</sub>とところが B<sub>II</sub>そして  
エ A<sub>II</sub>そして B<sub>II</sub>なぜなら

工 A Ⅱ  
そして B Ⅱ  
なぜなら

——線①「これ」が指すものを、「……ということ。」に続くように、文中から三十五字以上四十字以内で抜き出せ。

という。と。

——線②「それぞれ……返ってくるはず」とあるが、筆者がこのように考える理由を文中から二十四字で抜き出せ。

線③「こんな話」が書かれている段落はどこか。段落番号ですべて答えよ。

[illegible]

--

イ 文化や時代がちがっても、人間が見る風景にちがいはない。

工「見る」ために必要なのは、約束事を学習して理解することである。

第十二講・復習問題《説明的文章》説明文の弱点補強(2)

授業で使ったテキストをじっくり見直して、あとの問題を解きなさい（一つ5点 計40点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

見ている世界は知覚の枠組みだけで決まるわけではない。感覚が鋭敏だからといって、かならずしも多くのものが知覚されていとはかぎらない。[A]、イヌの嗅覚は人間の数千倍とも数千万倍ともいわれる。これは匂い<sup>にお</sup>を嗅ぎわけ細胞

が、人の場合は約五〇〇万個なのに対して、イヌは約二億五千万個もあるためである。しかし、イヌはその鋭い嗅覚でつねにあらゆる匂いを感じしているわけではない。関心のある匂いには集中するが、そうでない匂いは無視しているからである。

これは人間も同じである。同じ視覚の構造を持つ人間であっても、文化や時代によって見える風景がちがうのは、どこに関心をおいてイメージをつくるかが異なるためである。中世のヨーロッパ人には自然が関心の対象でなかった話はすでにした。もっと身近な例でいえば、町を歩いている若い女の子たちは中年男性など見ていないし、若い男性は女の子ばかり見ていて、そのほかのものは目に入っていないかもしれない。別々の年齢の人たちが同じ町を同じ時間歩いて、なにを見てきたかと聞けば、それぞれまったくちがう答えが返ってくるはずである。

マーシャル・マクルーハンは、こんな話を紹介している。

二〇世紀の前半、あるアフリカの村で、白人の衛生監視員たちが、村人たちに衛生の大切さを教える映画を見せた。上映後、監視員は、村人に「あなたたちは映画で何を見ましたか」とたずねた。監視員は「手を洗っているのを見ました」とか「服をきれいにしているのを見ました」といった反応を期待していたはずだ。[B]、村人から返ってきたのは「ニワトリを見ました」という答えだった。一人だけではなく、みな同じことをいった。

監視員たちはとまどった。映画は衛生の大切さを説いたものであって、ニワトリとは関係ない。そもそもニワトリが映画に出てくるはずなどなかった。いぶかしんだ監視員が注意深く映画を見なおすと、途中で、一瞬、画面の下をニワトリが横切る場面が見つかった。撮影現場のそばにいたニワトリが偶然カメラに映りこんでいたのだった。監視員たちは、このときまで、だれもそのことに気づいていなかった。しかし、村人<sup>①</sup>たちにとって、この映画でもっとも印象に残ったのが、このニワトリだった。一方、監視員たちが伝えたかった映画の筋については、村人はまったく理解していなかった。

この話は、無文字社会の人びとが映画の内容を理解できないことを伝えているわけではない。人は、自分たちの文化的な文脈の中にあるものしか見えないのである。われわれが映画を見てストーリーを理解できるのは、そこに使われている約束事を学習して理解しているからだ。

たとえば、ドラマの中で男性の笑っている顔が映り、つぎに女性が照れている顔が映ったら、われわれは説明されなくても、二人が同じ場所で見つめ合っているとわかる。それはふだんからテレビや映画を通して、そういう映像の文法に慣れ親しんでいるからである。しかし、そうした約束事を知らなければ、男と女の関係を結びつけては考えられない。監視員たちが上映した映画の中に、村人がニワトリしか見えなかったのは、唯一<sup>②</sup>、ニワトリだけが村人の生活の文法で解釈できるものだったからである。

つまり「見る」には約束事が必要なのだ。これは人間も動物も同じである。動物行動学者のティンバーゲンは、セグロカモメのヒナは餌がほしいとき、親鳥のくちばしの先にある赤い点をつつくことを発見した。ヒナは親鳥をその全体の姿で認識しているのではなく、くちばし状の形とその先端にある赤い点として把握しているのである。それがヒナにとって、親を認識するために先天的にプログラムされた約束事である。この時期のヒナには、たとえ赤い印をつけた棒であっても親鳥に見えるのである。

どうしてセグロカモメのヒナは親を全体として見ないのか。それは逆のパターンを考えればわかる。視覚に入ってくるす



べての情報を分析してから認識するとなったら、とほうもない情報処理能力と時間が必要とされる。野生動物が、そんなことに時間をかけていては、自分の生存が危ぶまれる。そのため、いま生きるうえで必要な情報だけを取りだし、わかりやすくパターン化してイメージを作りあげているのである。

(田中真知「美しいをさがす旅にでよう」より)

(注) 知覚……感覚器官が外界の物事をとらえ、見分ける働き。

鋭敏……鋭いこと。

嗅覚……においを感じ取る働き。

いぶかしむ……不審に思う。

文脈……文章の展開のしかた。ここでは筋道、背景。

先天的に……生まれた時から。

問一 空欄A・Bにあてはまる言葉をひらがな四字でそれぞれ答えよ。

A	B

問二 線①「村人たちにとって……ニワトリだった」とあるが、それは、村人たちにとってニワトリがどのようなものだからか。それを表す二字の熟語を、文中から二つ抜き出せ。


問三

——線②「いま生きるうえで必要な情報」とあるが、セグロカモメのヒナにとっての「必要な情報」とは何か。次の文の空欄（甲）と（乙）に入る、最も適当な言葉を文中から抜き出せ。

親鳥のくちばしの先にある〔甲〕をつつけば、〔乙〕がもらえるということ。

（甲）

（乙）

問四

筆者の主張を説明した次の文の空欄（甲）と（乙）に入る、最も適当な言葉を文中から抜き出して答えよ。

「〔甲〕」ために必要なのは、〔乙〕を学習して理解することである。

（甲）

（乙）

第十二講・確認テスト《説明的文章》説明文の弱点補強(2)

次の語句のカタカナ部分を漢字に直し、適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 犬のキュウ覚  
①旧 ②吸 ③急 ④嗅

問二 視覚のコウ造  
①講 ②溝 ③構 ④購

問三 エイ生の大切さ  
①営 ②衛 ③英 ④栄

問四 カン視員  
①監 ②艦 ③鑑 ④観

問五 赤い点として把阿克  
①悪 ②飽 ③空 ④握

☐☐☐☐☐

第十三講・《文学的文章》随筆の読解ルール(1) 文意・構成をとらえる？



随筆とは、筆者がおりにふれて感じたこと、考えたことを自由に書いたものである。だから決まった形式はなく、内容も様々である。

① 随筆の文意をとらえる。

(1) 文章を書いたきっかけをつかむ。

① 時・所・出来事をつかむ。(小説の場合と同じように「いつ・どこで・どうした」をおさえる。)

② どんな体験や見聞が、文章を書く動機となっているかをつかむ。

(例題の文章では、小値賀島<sup>おぢかじま</sup>、隠岐<sup>おき</sup>の中ノ島<sup>なか</sup>の二つの島を訪れて、そこで交わした「あいさつ」が、きっかけとなっている。)

(2) 体験や出来事について、筆者の感じたことを読み取る。

(3) 体験や出来事に対する、筆者の感想、意見を読み取り、中心になる考え方、訴えたいことをとらえる。

② 随筆の構成をとらえる。

(1) 筆者の考えや感想は、どのように表現されているかをとらえる。

① 体験・出来事をあげ、それに対する感想、意見を述べる。

② 具体例としてあげた体験、出来事の中に、心情として表す。

③ 最初に筆者の視点として提示し、それに適した体験例を示す。

3

筆者のものの方や感じ方をとらえる。

文章に表現しようとした対象が、どのように表現されているかを読み取る。

例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

五島列島ごとうれつとうの小値賀島おちかじまへ行つたときのことである。小学校の前のみごとな松並木の道を歩いていたら、道の向こう側を連れだつてやってきた二、三年生くらいの男の子と女の子がこちらに向かって A あいさつをした。腰を折るおじぎをして、

「こんにちは。」と口をそろえて言う。大きな明るい声だった。一瞬、返事を返すのが遅れた。私に向かってのあいさつであるとは分らなかったのだ。だが、周りにほかの人はいなかった。私はあわてて「こんにちは。」を返した。

小値賀島のあちらこちらで、そうだった。見知らぬ旅行者の私に、ていねいなあいさつであった。たばこを買いに立ち寄った小さな雑貨屋では、一個買っただけの私に、おばあさんが腰を折り両手をひざにそろえて、「ありがとうございます」と頭を下げた。このときも私は大あわてでおじぎを返したのだったが、小値賀島にいる間じゅう、おばあさんのあいさつを思い出して気持ちがよかったものである。あのおばあさんの温かい笑顔は今も目に残っている。

見知らぬものどうしがおおぜいの都会では、道で会う人みんなにあいさつをするわけにはいかないし、商店の人がいちいちていねいなあいさつをしていたら商売にならないだろう。だが、小さな島や山間の村などに行くと、あいさつというものがきちんと生きている。形だけが残っているというのではなくて、あいさつというものを自然に生み出す生き方が伝えられているのである。

私は最近、一か月に一つか二つずつ、日本の島を歩いてきた。たいていは一日のうちに自分の足で歩きつくせる小さな島である。その多くの島で、私は、都会にはないあいさつに出会ってきた。小値賀島は最初に行った島だったのであいさつをされてとまどったのだが、そのうち、島ではみんながあいさつを交わすのがあたりまえという気持ちになって、どの島でも道で人に会ったら私からまずあいさつをするのが習慣になった。ついでに立ち話をして島のことを教えてもらったことも数

多い。

こんなあいさつもあった。隠岐おきの中ノ島なかでのことである。

私は前日まで隣の知夫里島ちぶりにいて、農耕や牧畜用のわずかな車のほかにはほとんど自動車を必要としない知夫里島のゆったりした暮らしにすっかり魅せられていたのだが、後鳥羽院ごとばいんの住んだ島にもついでに寄ってみたいと思って中ノ島なかにやってきて、初めはちよつとがっかりしたのだった。知夫里島よりはかなり大きい中ノ島はすでに自動車社会になっていて、知夫里島で見たような人と自然が豊かに交わる生き方はずっと少なくなっているように見えた。

だが、隠岐神社おきじんじやへの道をしていく歩いていくときのこと、道ばたに女子中学生が二人立ち止まって道を渡ろうとしていると、そこへ走ってきた小型トラックが、横断歩道の印も何もない所だが少女たちの手前に停車して、道を渡らせた。私は、ああいいな、と見ていたのだが、その後でもつとびくりした。道を渡り終えた少女たちが、くると向き直ると、トラックの運転手に向かって深いおじぎをして、「ありがとうございます。」と声をそろえたのだ。運転手はたぶんそのあいさつを予想していたのだろう。無事に渡り終えるのを見守り、向き直ったのあいさつに手を振ってから、ゆっくり車を発進させていった。

自動車社会になっても、今のところはまだ、島の生き方が伝えられて、運転手と少女たちのあいさつとなっているのだろう。自動車社会でのあいさつがそんな形で生まれているのだった。

こういうものが、文化の伝承であろう。その底には、生き方の伝承があるはずだ。人がどう生きるのがいいかという生き方が伝えられ、そこからあいさつも生まれてくる。B さえ伝えられているならば、自動車という新しい暮らしの道具が入ってきたときにも、それに見合ったあいさつの仕方がおのずとつくられるということだろう。

(高田たかだ 宏ひろし「島で見たことから」より)

(注) 五島列島……長崎県、長崎市の北西海上にある約二百の島。

隠岐……現在の島根県の隠岐諸島。

後鳥羽院……承久じやうきゆうの乱で隠岐に流された第八十二代天皇の退位後の呼び名。

(1) この文章は「起承転結」に分かれている。「転」の部分の最初の五字を書け。

(2) 

A
---

・

B
---

にあてはまる言葉を文中からそれぞれ抜き出し、Aは五字、Bは三字で書け。

A	B

(3) — 線「見合った」とあるが、「見合う」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 互いに見る      イ 受けつがれる

ウ つり合う      エ かさねる

(4) この文章では何が述べられているか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 自動車社会      イ 文化の伝承

ウ あいさつの仕方

--

--



第十三講・復習問題 《文学的文章》 随筆の読解ルール(1)

授業で使ったテキストをじっくり見直して、あとの問題を解きなさい（一つ5点 計20点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 五島列島ごとうれっとうの小値賀島おぢかじまへ行つたときのことである。小学校の前のみごとな松並木の道を歩いていたら、道の向こう側を連れだつてやってきた二、三年生くらいの男の子と女の子がこちらに向かつて「A あいさつをした。腰を折るおじぎをして、「こんにちは。」と口をそろえて言う。大きな明るい声だった。一瞬、返事を返すのが遅れた。私に向かつてのあいさつである」と分らなかったのだ。だが、周りにほかの人はいなかった。私はあわてて「こんにちは。」を返した。

② 小値賀島のあちこちで、そうだった。見知らぬ旅行者の私に、ていねいなあいさつであった。たばこを買いに立ち寄った小さな雑貨屋では、一個買っただけの私に、おばあさんが腰を折り両手をひざにそろえて、「ありがとうございました。」と頭を下げた。このときも私は大あわてでおじぎを返したのだったが、小値賀島にいる間じゅう、おばあさんのあいさつを思い出して気持ちがよかったものである。あのおばあさんの温かい笑顔は今も目に残っている。

③ 見知らぬものどうしがおおぜいの都会では、道で会う人みんなにあいさつをするわけにはいかないし、商店の人がいちいちいねいなあいさつをしていたら商売にならないだろう。だが、小さな島や山間の村などに行くと、あいさつというものがきちんと生きている。形だけが残っているというのではなくて、あいさつというものを自然に生み出す生き方が伝えられているのである。

④ 私は最近、一か月に一つか二つずつ、日本の島を歩いてきた。たいていは一日のうちに自分の足で歩きつくせる小さな島である。その多くの島で、私は、都会にはないあいさつに出会ってきた。小値賀島は最初に行った島だったのであいさつ

をされてとまどったのだが、そのうち、島ではみんながあいさつを交わすのがあたりまえという気持ちになって、どの島でも道で人に会ったら私からまずあいさつをするのが習慣になった。ついでに立ち話をして島のことを教えてもらったことも数多い。

⑤ こんなあいさつもあつた。隠岐おきの中ノ島なかでのことである。

⑥ 私は前日まで隣の知夫里島ちぶりにいて、農耕や牧畜用のわずかな車のほかにはほとんど自動車を必要としない知夫里島のゆったりした暮らしにすっかり魅せられていたのだが、後鳥羽院ごとばいんの住んだ島にもついでに寄つてみたいと思つて中ノ島にやってくる、初めはちよつとがっかりしたのだった。知夫里島よりはかなり大きい中ノ島はすでに自動車社会になっていて、知夫里島で見たような人と自然が豊かに交わる生き方はずっと少なくなっているように見えた。

⑦ だが、隠岐神社おきしんじやへの道をつくって歩いてきたときのこと、道ばたに女子中学生が二人立ち止まって道を渡ろうとしてみると、そこへ走ってきた小型トラックが、横断歩道の印も何もない所だが少女たちの手前に停車して、道を渡らせた。私は、ああいいな、と見ていたのだが、その後でもっとびっくりした。道を渡り終えた少女たちが、くると向き直ると、トラックの運転手に向かって深いおじぎをして、「ありがとうございます。」と声をそろえたのだ。運転手はたぶんそのあいさつを予想していたのだろう。無事に渡り終えるのを見守り、向き直つてのあいさつに手を振ってから、ゆっくり車を発進させていった。

⑧ 自動車社会になつても、今のところはまだ、島の生き方が伝えられて、運転手と少女たちのあいさつとなつてゐるのだらう。自動車社会でのあいさつがそんな形で生まれているのだった。

⑨ こういうものこそが、文化の伝承であらう。その底には、生き方の伝承があるはずだ。人がどう生きるのがいいかという生き方が伝えられ、そこからあいさつも生まれてくる。B さえ伝えられているならば、自動車という新しい暮らしの道具が入ってきたときにも、それに見合ったあいさつの仕方がおのずとつくられるということだろう。

(注) 五島列島……長崎県、長崎市の北西海上にある約二百の島。

隠岐……現在の島根県の隠岐諸島。

後鳥羽院……承久じょうきゅうの乱で隠岐に流された第八十二代天皇の退位後の呼び名。

(高田たかだ 宏ひろし) 「島で見たことから」より

問一 この文章は形式段落としては九段落で構成されているが、意味段落としては四段落に分かれている。形式段落の番号

を用い、意味段落の四段落に分けよ。

・

・

・

問二 空欄A・Bにあてはまる言葉を文中からそれぞれ抜き出し、Aは五字、Bは三字で書け。

A

B

問三 この文章で述べられているテーマは何か。五字以内の語句で答えよ。

第十三講・確認テスト 《文学的文章》 随筆の読解ルール(1)

次の語句のカタカナ部分を漢字に直し、適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 小さな雑カ屋

- ① 荷
- ② 菓
- ③ 家
- ④ 貨

問二 あいさつをするのがシユウ慣になった

- ① 習
- ② 集
- ③ 周
- ④ 衆

問三 農耕や牧チク用

- ① 蓄
- ② 畜
- ③ 逐
- ④ 築

問四 すっかりミせられていた

- ① 見
- ② 観
- ③ 魅
- ④ 視

問五 文化の伝シヨウ

- ① 承
- ② 称
- ③ 涉
- ④ 章

☐
☐
☐
☐
☐

第十四講 ●

《文学的文章》随筆の読解ルール(2)

表現・主題をとらえる



① 表現を味わう。

(1) 文体・表現の特徴をつかむ。

(2) ユニークな表現を味わう。

随筆は個性あふれる文章である。筆者の独特な表現を味わう。

(3) 比喩に注意する。

随筆の表現技法では、特に比喩に注意する。そこに筆者の感じ方が表れている。

② 主題をとらえる。

意見、感想から筆者のものの見方や感じ方をとらえ、主題に迫る。

(1) 事実と意見・感想とを区別する。

随筆は、筆者が経験したり見聞したりしたこと（事実）に対する筆者の意見・感想に主眼が置かれる。

(2) 筆者のものの見方をとらえる。

筆者の意見・感想にあたる部分から、独特なものの見方や感じ方を読み取る。

(3) 主題をとらえる。

① 文学的な随筆……感情や情緒を表した内容になっているので、文章の裏に隠されている主題をつかむ必要がある。

② 思索的な随筆……論説文や評論文のように中心文や中心段落をとらえて、主題を導き出す。

(4) とりあげる中心テーマから、主題をまとめる。

3 随筆の種類

- (1) 文学的な味わいのあるもの
- (2) 感想・批評などをまとめたもの
- (3) 科学的な内容を持ったもの
- (4) 日記・紀行文のようなもの

例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

四十<sup>しまんと</sup>十川<sup>とがわ</sup>で漁をして暮らしているおじさんに話を聞いた。舟<sup>ふね</sup>の上で、日本最後といわれる清流に浮かびながら。

「柴<sup>しば</sup>づけ漁」というその漁法は、実に素朴なものである。柴を束ねたものを川に沈め、一週間から十日たったところで引き上げる。すると、そこに住みついた川エビやウナギが捕れるという仕組みだ。「住む」というのがみそで、だから罫いをしなくても逃げられることはない。時間と共に獲物が増えてゆくことはあっても、決して減りはしない。

柴は、おじさんが山で刈ってくるという。「だから、半分は山の仕事」だそうだ。川エビとウナギでは住まいの好みが違うらしく、ウナギの方は葉っぱを多くしてやらないとだめ、とのこと。そのあたりは、長年の経験がものをいう。

目の前でわたしのために、ウナギをさばいてくれた。自然に川に生息しているウナギは、とてもスマートだ。まず、きりのようなもので首の辺りをトンと突いて、まな板の上に固定する。すうつと背中から包丁を入れ、開く。肝を取って骨を取ってでき上がり。三等分にしたものを、その場でかば焼きにしてもらった。舟の上に、ちゃんとこんろが積んであるのだ。わたしはふだん、魚をさばくときには、なんとなく背中<sup>①</sup>の辺りがすうすうしてしまう。生け作りの魚の目玉なども気になってしまう方である。

が、おじさんがウナギをさばいてゆく一部始終を見ていて、そんな感じは全くなかった。むしろ「美しいな」と思った。本当においしくいただいた。

「ただ、ちょっとかわいそうな気がしますね……。」わたしがそう言った時、ぴっと一瞬、おじさんの顔がこわばった。

「それは仕方のないことじゃろ。人間に食べられるのが、こいつらの運命よ。」

終始なごやかな笑顔で話してくれていたので、厳しい表情が、逆に鮮やかに印象に残っている。まこと安易に言っ

まった「かわいそう」を、後悔こうかいした。ふだん、自分が魚をさばいたり、生け作りの目玉を見たりして思う「気持ち悪い」という感覚も、同じ安易さ③からきているのではないかと思った。

おじさんにさばれるウナギは、ちっとも気持ち悪くない。その違いは何だろう。

その違いは、魚とのつながり方ではないかと思う。同じ自然の中で生きているものとして、おじさんと魚はつながっている。都市で生活しているわたしたちは、自然から離れた位置にあって、魚とかかわりを持つ。だからいとも簡単に「かわいそう」と言えるし、無責任に「気持ち悪い」と感じてしまう。

おじさんは漁をしながら、魚たちにどんな気持ちを抱いているのだろう。「かわいそう」ではなくて……。

ごちそうさま、と言いながらさりげなくきいてみた。しばらくの沈黙の後に返ってきた答えは、「ありがとう」④だった。

(俵 たわら 万智 まち「四万十川のウナギ」より)

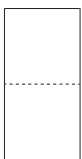
25

(1) — 線①「舟の上で」が直接かかる部分はどこか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 浮かびながら イ 話を聞いた

ウ 漁をして エ 暮らしている

(2) (1)のような表現技法を何というか。漢字二字で答えよ。



法



20



(3) — 線②「みそ」とあるが、これと同じ意味で用いられているものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 手前みそ                      イ 脳みそ

ウ その考えがみそだ              エ みそをつける

☐

(4) 第四段落の表現上の特色の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 外来語や擬人法を用いたリズムミカルな文章。

イ 反復法や倒置法を用いたはぎれのよい文章。

ウ 擬音（声）語や擬態語を用いた平易な文章。

エ 対句や比喩を用いた簡潔な文章。

☐

(5) — 線③「同じ安易さ」とあるが、そのような「安易さ」がなぜ生まれてくると筆者は考えているか。最も適当な一文を抜き出し、最初の五字を書け。


(6) 線④「ありがとう」にこめられたおじさんの気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 四万十川が、豊かな獲物を自分にもたらし続けていることに対する感謝の気持ち。

イ 筆者が、魚と自分とのつながりを認めていることに対する感謝の気持ち。

ウ 美しい自然が、人間的なふれあいを深めてくれることに対する感謝の気持ち。

エ 魚が、その命によって自分を生かしてくれていることに対する感謝の気持ち。



第十四講・復習問題 《文学的文章》 随筆の読解ルール(2)

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、あとの問題を解きなさい（一つ5点 計30点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

四万十川<sup>しまとがわ</sup>で漁をして暮らしているおじさんに話を聞いた。舟<sup>ふね</sup>の上で、日本最後といわれる清流に浮かびながら。

「柴<sup>しば</sup>づけ漁」というその漁法は、実に素朴なものである。柴を束ねたものを川に沈め、一週間から十日たったところで引き上げる。すると、そこに住みついた川エビやウナギが捕れるという仕組みだ。「住む」というのがみそで、だから囲いをしなくても逃げられることはない。時間と共に獲物が増えてゆくことはあっても、決して減りはしない。

柴は、おじさんが山で刈<sup>き</sup>ってくるという。「だから、半分は山の仕事」だそうだ。川エビとウナギでは住まいの好みが違うらしく、ウナギの方は葉っぱを多くしてやらないとだめ、とのこと。そのあたりは、長年の経験がものをいう。

目の前でわたしのために、ウナギをさばいてくれた。自然に川に生息しているウナギは、とてもスマートだ。まず、きり取<sup>き</sup>ってでき上がり。三等分にしたものを、その場でかば焼きにしてもらった。舟の上に、ちゃんとこんろが積<sup>た</sup>んであるのだ。わたしはふだん、魚をさばくときには、なんとなく背中<sup>せなか</sup>の辺りがすうすうしてしまう。生け作りの魚の目玉なども気にな<sup>な</sup>ってしまう方である。

が、おじさんがウナギをさばいてゆく一部始終を見ていて、そんな感じは全くなかった。むしろ「美しいな」と思った。本当においしくいただいた。

「ただ、ちょっとかわいそうな気がしますね……。」わたしがそう言った時、ぴっと一瞬、おじさんの顔がこわばった。

「それは仕方のないことじゃろ。人間に食べられるのが、こいつらの運命よ。」

終始なごやかな笑顔で話してくれていたので、厳しい表情が、逆に鮮やかに印象に残っている。まこと安易に言っ  
 まった「かわいそう」を、後悔した。ふだん、自分が魚をさばいたり、生け作りの目玉を見たりして思う「気持ち悪い」と  
 いう感覚も、同じ安易さからきているのではないかと思った。

おじさんにさばかれるウナギは、ちっとも気持ち悪くない。その違いは何だろう。

その違いは、魚とのつながり方ではないかと思う。同じ自然の中で生きているものとして、おじさんと魚はつながって  
 る。都市で生活しているわたしたちは、自然から離れた位置にあつて、魚とかかわりを持つ。だからとても簡単に「かわい  
 そう」と言えるし、無責任に「気持ち悪い」と感じてしまう。

おじさんは漁をしながら、魚たちにどんな気持ちを抱いているのだろう。「かわいそう」ではなくて……。

ごちそうさま、と言いながらさりげなくきいてみた。しばらくの沈黙の後に返ってきた答えは、「ありがとう」だった。

(たわら 俄 まち 万智「しまんとがわ 四万十川のウナギ」より)

問一 — 線①「舟の上で」が直接かかる部分はどこか。五字の語句を文中から抜き出せ。


問二 本文の一行目で用いられている修辞技法を何というか。漢字二字で答えよ。


問三

第四段落で用いられている表現上の特色を、二つ答えよ。(いずれも漢字三字)

--	--	--

--	--	--

問四

——線②「自然の中で生きている」とあるが、対比的な表現を文中から十字以内の言葉で抜き出せ。

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問五

次の文は、本文の内容について説明したものである。空欄に入る適当な言葉を、二字の熟語で答えよ。

魚が、その命によって自分を生かしてくれていることに対する□の気持ち。

--	--

第十四講・確認テスト 《文学的文章》 随筆の読解ルール(2)

次の語句のカタカナ部分を漢字に直し、適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 日本最後といわるセイ流 ①静 ②勢 ③清 ④聖

問二 実にソ朴なもの ①素 ②祖 ③粗 ④疎

問三 エ物が増えていくこと ①餌 ②穫 ③獲 ④得

問四 長年の経ケン ①儉 ②験 ③険 ④検

問五 同じ安イさ ①易 ②委 ③為 ④夷

☐
☐
☐
☐
☐

第十五講・《文学的文章》随筆の弱点補強 構成・表現を読み取る問題？



例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

豆腐は偉い。形が残ろうと、つぶされようと、変幻自在に豆腐としての存在を主張している。しかも、過度な自己主張はなくて、どんな味にも染まるが、決して自分の味を失うことはない。甘かったりしょっぱかったりする味付けに従うとみせながら、その実したたかに自己主張している。

色にしても同じことだ。豆腐は白いので、どんな色にも染まるのだが、もともと白いのだという観念を絶対に捨てない。形にしろ、どんな容器にも入って固まる。冷たくしても、熱くしても、何の変化もない。料理の相手も選ばない。野菜でも魚でも肉でもきちんと相手をしてみせ、自分はわきに控えながらも、本来備わった品位を毅然と保っている。どんなことをしても、豆腐は自己を失うことはない。ほんとうに豆腐は偉いものだ。私は豆腐が好きなのである。

私の近所には、幸いよい豆腐店がある。が、看板は出ていない。

「もう年をとったし、量産できないのだから、昔から買ってくれる人だけが買ってくれればいい。おおぜいの人がいって来てくれたって、売るものがないから。」

豆腐店の主人はこう言うのである。看板を出すか出さないかで、この奥ゆかしさだ。

今の場所に、私の妻の一家は戦後間もなく住みついたのだが、そのころからすでに豆腐店の主人は桶を二つてんびん棒で担いで、近所に売り歩いていたという。量販店ができる以前、豆腐店は近所と結びついていた。作った人の顔がわかるので、食べるほうとしても安心なのである。

豆腐を食べたくなると、私は自分で買いに行く。豆腐店の夫婦は元気だ。店はステンレスの道具もコンクリートの床も、磨き上げられていて清潔この上ない。「できたばかりでまだ温かいから、家に着いたらすぐ、氷水をたっぷり入れたボウルに沈めて、冷蔵庫に入れるんだよ。」

主人は嫁ぐ娘を送り出すような口調で言いながら、ていねいに豆腐を包んでくれるのである。

「今日は出来がちよつと悪いんだ。すぐに水につけてね。」

そう言つて大きく切ってくれることもある。毎日、出来不出来がある。油揚げは、今日は焦げたから売らない、と言われることもある。いなりずしにするなら売らないけど、そうでなければ安くしておく、と言われる日もある。豆腐も油揚げも、よくできた日は主人の笑顔を見ているだけでわかる。

「ニガリをうつときは、ほんとうに真剣よ。軟らかくてこしのある豆腐を作りたいものね。一時間に千丁も作る豆腐屋があるのに、うちは三時間半も四時間もかかって、六十丁しか作らないから。それを子供が見ているからね。後を継がないって。私たちが終わりですよ。知っている人は、三代も食べてくれるけれども。」

ある日、豆腐を買いに行った私に、奥さんはこう話してくれた。主人はステンレスの機械を黙々と磨いていた。

(立松和平「象に乗って」より)

(注) ニガリ……豆腐を作るときに用いる液。



(1) — 線①「変幻自在に」とあるが、「変幻自在」とはどのような意味か。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 幻想から覚め自分を取り戻すこと。  
 イ どんな場合にも形を変えないこと。  
 ウ 考えが次々変わり定まらないこと。  
 エ 思いのままに姿を変えてゆくこと。

(2) 豆腐に対する主人の心配りのこまやかさが表現されている比喩の部分を、文中から十二字以内でそのまま抜き出せ。


(3) — 線②「主人はステンレスの機械を黙々と磨いていた」とあるが、この主人の心情を説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア いっしょうけんめい豆腐を作っても量販店に押され、子供も後を継がないのでむなしく思っている。  
 イ 後を継ぐものはないが、自分の豆腐を買いに来る人のためにおいしい豆腐を作りたいと思っている。  
 ウ 職人かたぎの自分を理解してくれるが、ときおり愚痴をこぼす妻の態度を苦々しく思っている。  
 エ 長年働いてくれた機械に深い愛情を感じながらも、新しい機械の導入に踏み切りたいと思っている。

--

第十五講・復習問題《文学的文章》随筆の弱点補強

授業で使ったテキストをじっくり見直して、あとの問題を解きなさい（一つ10点 計30点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

豆腐は偉い。形が残ろうと、つぶされようと、に豆腐としての存在を主張している。しかも、過度な自己主張はなく、どんな味にも染まるが、決して自分の味を失うことはない。甘かったりしょっぱかったりする味付けに従うとみせながら、その実したたかに自己主張している。

色にしても同じことだ。豆腐は白いので、どんな色にも染まるのだが、もともと白いのだという観念を絶対に捨てない。形にしろ、どんな容器にも入って固まる。冷たくしても、熱くしても、何の変化もない。料理の相手も選ばない。野菜でも魚でも肉でもきちんと相手をしてみせ、自分はわきに控<sup>ひか</sup>えながらも、本来備わった品位<sup>きざん</sup>を毅然と保っている。どんなことをしても、豆腐は自己を失うことはない。ほんとうに豆腐は偉いものだ。私は豆腐が好きなのである。

私の近所には、幸いよい豆腐店がある。が、看板は出ていない。

「もう年をとったし、量産できないのだから、昔から買ってくれる人だけが買ってくれればいい。おおぜいの人がいって来てくれたって、売るものがないから。」

豆腐店の主人はこう言うのである。看板を出すか出さないかで、この奥ゆかしさだ。

今の場所に、私の妻の一家は戦後間もなく住みついたのだが、そのころからすでに豆腐店の主人は桶<sup>おけ</sup>を二つてんびん棒で担いで、近所に売り歩いていたという。量販店ができる以前、豆腐店は近所と結びついていた。作った人の顔がわかるので、食べるほうとしても安心なのである。

豆腐を食べたくなると、私は自分で買いに行く。豆腐店の夫婦は元気だ。店はステンレスの道具もコンクリートの床も、磨き上げられていて清潔この上ない。「できたばかりでまだ温かいから、家に着いたらすぐ、氷水をたっぷり入れたボウルに沈めて、冷蔵庫に入れるんだよ。」

主人は嫁ぐ娘を送り出すような口調で言いながら、ていねいに豆腐を包んでくれるのである。

「今日は出来がちょっと悪いんだ。すぐに水につけてね。」

そう言って大きく切ってくれることもある。毎日、出来不出来がある。油揚げは、今日は焦げたから売らない、と言われることもある。いなりずしにするなら売らないけど、そうでなければ安くしておく、と言われる日もある。豆腐も油揚げも、よくできた日は主人の笑顔を見ているだけでわかる。

「ニガリをうつときは、ほんとうに真剣よ。軟らかくてこしのある豆腐を作りたいものね。一時間に千丁も作る豆腐屋があるのに、うちは三時間半も四時間もかかって、六十丁しか作らないから。それを子供が見ているからね。後を継がないって。私たちが終わりですよ。知っている人は、三代も食べてくれるけれども。」

ある日、豆腐を買いに行った私に、奥さんはこう話してくれた。主人はステンレスの機械を黙々と磨いていた。

(立松和平「象に乗って」より)

(注) ニガリ……豆腐を作るときに用いる液。

問一 本文中の空欄に入る、「思いのままに姿を変えていく」という意味の最も適当な四字熟語を答えよ。


---

---

---

---

---

---

---

---

[illegible]

のため

第十五講・確認テスト《文学的文章》随筆の弱点補強

次の語句のカタカナ部分を漢字に直し、適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 豆フは偉い

- ① 腑
- ② 附
- ③ 腐
- ④ 符

問二 ヘン幻自在

- ① 偏
- ② 返
- ③ 編
- ④ 変

問三 リヨウ販店ができる以前

- ① 良
- ② 料
- ③ 量
- ④ 両

問四 清ケツこの上ない

- ① 欠
- ② 潔
- ③ 決
- ④ 結

問五 ほんとうにシン剣よ

- ① 真
- ② 新
- ③ 信
- ④ 心

第十六講・《韻文》詩の読解ルール 構成・情景・修辞技法をとらえる？



① 詩の表現技法をとらえる。

詩の表現では、作者の気持ちを何かに託したり、何かにたとえたりすることが多く、様々な表現技法を用いる。

(1) 比喩 ある物事をほかの物事にたとえて表現する。

・直喩 「のようだ」「みたいだ」の形で、ストレートにたとえる技法。

・隠喩 「のようだ」を用いずにたとえる技法。

・擬人法 人間でないものを人間にたとえる技法。

(2) 倒置法 言葉の順序を逆にすることで印象を強める。

(3) 反復法 同じ言葉を繰り返して、感動や印象を強める。

(4) 対句法 対となる語を並べ、印象を強める。

(5) 体言止め 行の終わりを名詞で止め、余情をもたせる。

(6) 呼びかけ 呼びかけるような表現。親しみをもたせる。

② 主題のとらえ方

(1) 行と行、連と連の間の変化から心情をとらえる。

(2) 言葉の生きた使い方を知る。

表現上、歴史的仮名遣いや、擬声（音）語・擬態語などが効果的に用いられることがある。

(3) 詩の最初か最後の言葉に注意する。

(4) 詩の主題は、(3)のほかに次のような部分に着目してとらえる。

- ・ 繰り返し言われている部分。
- ・ 表現技法が使われている部分。

例題

次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

くらし

食わずには生きてゆけない。

メシを

野菜を

肉を

空気を

光を

水を

親を

きょうだいを

師を

金もこころも

□ 生きてこれなかった。

ふくれた腹をかかえ

口をぬぐえば

10

5



台所に散らばっている  
にんじんのしつぽ

鳥の骨

父のはらわた

四十の日暮れ

私の目にはじめてあふれる獣の涙。

(石垣<sup>いしがき</sup>りん「表札など」より)

Ⓐ

15

20

(1) この詩の表現上の特色として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 七音と五音が繰り返されている。

イ 同音の語を繰り返しリズムを持たせている。

ウ 擬声語・擬態語が用いられている。

エ 易しい言葉で呼びかけられるように作られている。

(2) この詩のⒶの部分に見られる表現技法を次の中から選び、記号で答えよ。

ア 擬人法      イ 比喩

ウ 倒置法      エ 体言止め



- (3)  にあてはまる最も適当な言葉を詩の中から五字で抜き出せ。

- (4) この詩で、作者の心情の高まりが最もはっきりと表れている一行はどれか。詩の中からそのまま抜き出せ。

- (5) この詩の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 不快な現実を避けて、自分の幸福な人生を追い求めている。
- イ 周りのものや人を犠牲にして生きている自分を見つめている。
- ウ 生活力がなくて、家族に貧乏をさせている自分を悲しんでいる。
- エ つらく悲しいことばかりなので、自分の人生を嘆いている。


## 第十六講・復習問題《韻文》詩の読解ルール

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、あとの問題を解きなさい（一つ5点 計25点満点）  
次の詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

くらし

食わずには生きてゆけない。

メシを

野菜を

肉を

空気を

光を

水を

親を

きょうだいを

師を

金もこころも

食わずには生きてこれなかった。

10

5

ふくれた腹をかかえ

口をぬぐえば

台所に散らばっている

にんじんのしっぱ

鳥の骨

父のはらわた

四十の日暮れ

私の目にはじめてあふれる獣の涙。

(石垣<sup>いしがき</sup>りん「表札など」より)

20

15

問一 この詩の表現上の特色を五字以内の語句で答えよ。

問二 この詩の後半に繰り返し見られる表現技法を答えよ。

問三 この詩で、作者の心情の高まりが最もはっきりと表れている一行はどれか。詩の中からそのまま抜き出せ。

問四 次の文は、本文の内容について説明したものである。空欄（甲）（乙）に入る適当な言葉を、二字の熟語で答えよ。

周りのものや人を〔甲〕にして生きている〔乙〕を見つめている。

（甲）

（乙）

第十六講・確認テスト《韻文》詩の読解ルール

次の語句のカタカナ部分を漢字に直し、適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 ギ人法 ①偽 ②擬 ③疑 ④欺

問二 ビユ ①癒 ②愉 ③諭 ④喩

問三 トウ置法 ①倒 ②頭 ③投 ④答

問四 タイ言止め ①体 ②対 ③態 ④帯

問五 反ブク法 ①副 ②複 ③腹 ④復

第十七講・《韻文》短歌の読解ルール かたちと修辞技法をとらえる？



(1) 短歌の表現形式とリズムをとらえる。

表現形式

- ① 短歌の基本的な形式は、五・七・五・七・七の五句三十一音である。

(注)破調…三十一音より多いものを「字余り」、少ないものを「字足らず」という。

- ② 句切れ…意味や調子のうえで、句が切れること。この句切れをつかむことにより、短歌の意味や作者の感動をとらえることができる。

・初句切れ 五／七・五・七・七

・二句切れ 五・七／五・七・七

・三句切れ 五・七・五／七・七

・四句切れ 五・七・五・七／七

・句切れなし 切れめのないもの

リズム（歌調）

・五七調…二句切れ・四句切れの歌。力強く重々しい感じがする。

・七五調…初句切れ・三句切れの歌。優しくなめらかな感じがする。

(2) 短歌の表現技法を理解する。

表現技法

- ・ 比喩……あるものにたとえて印象を強める。
- ・ 倒置法……言葉の順序を逆にし、意味・感動を強める。
- ・ 反復法……同じ言葉や内容を並べて強調する。
- ・ 体言止め……結句を体言（名詞）で終え、調子をととのえたり、余韻を残す。
- ・ 枕詞……特定の言葉にかかり、調子をととのえる。

\* たらちねの母がつりたる青蚊帳あおがやをすがしといねつたるみたれども

長塚節ながつかたけし

(3) 情景・心情をとらえる。

- ① 季節・時・場所を具体的に表した語をつかむ。
- ② 表現技法などで強調された部分に着目し、作者の感動の中心をとらえる。



例題

① 次の短歌を読んで、あとの問いに答えなさい。

- A みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる  
 B ふるさとの尾鈴<sup>をすず</sup>の山のかなしき秋もかすみのたなびきて居り<sup>を</sup>  
 C 連結をはなれし貨車がやすやすと走りつつ行く線路の上を  
 D ゆく秋の大和の国の薬師寺<sup>やくしじ</sup>の塔の上なる一ひらの雲  
 E 瓶<sup>かめ</sup>にさす藤の花<sup>ふち</sup>ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり

斎藤茂吉  
 若山牧水  
 佐藤佐太郎  
 佐佐木信綱  
 正岡子規

(1) 次の①～④にあてはまる歌を、それぞれA～Eから選び、記号で答えよ。

- ① 「三句切れ」になっている歌  
 ② 「字余り」になっている歌  
 ③ 「体言止め」になっている歌  
 ④ 「倒置法」が使われている歌

(2) Aの歌の——線部に使われている表現技法を次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 比喩  
 イ 擬人法  
 ウ 反復法  
 エ 枕詞

①

②

③

④

(3) Eの歌の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 作者の心情や行動に直接触れず、見たままを写實的に表現している。

イ 童心に返った喜びの心情が、率直に表現されている。

ウ 季節の移り変わりをとらえ、躍動的に表現している。

2 次の短歌を読んで、あとの問いに答えなさい。

A 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる

B 見渡せば花ももみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ

C 金色の小さき鳥の形して銀杏ちるなり夕日の岡に

D おり立ちてけさの寒さを驚きぬ露しとしと柿の落ち葉深く

E ふるさとの訛なつかし

停車場の人ごみの中に

そを聴きにゆく

藤原敏行

藤原定家

与謝野晶子

伊藤左千夫

石川啄木

(1) Aの歌の季節として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 晩秋 イ 初春

ウ 初冬 エ 初秋

(2) Bの歌にはどのような表現技法が使われているか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 倒置法 イ 体言止め

ウ 比喩 エ 擬人法

(3) Cの歌の「金色の小さき鳥の形」とは何を表しているか。歌の中から抜き出せ。

(4) Dの歌はどのような情景を詠んだものか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア たくましい情熱をともなった決意が、目の前の風景を通して、ありありと感じられる。

イ 動的なものと静的なものとの対比によって、さわやかさと解放感を感じさせる。

ウ 上の句でまず実感を率直に述べ、続いて移り行く季節に対する感動を表現している。

エ のびやかに大きく歌い出し、対象を厳しくとらえて、心の緊張と不安感を描いている。

(5) Dの歌の中で字余りになっているところは第何句か。次の中から選び、記号で答えよ。

ア 初句 イ 二句

ウ 四句 エ 結句

(6) Eの歌に――線「そを聴きにゆく」とあるが、作者は何を聴きにいくのか。歌の中から六字で抜き出せ。


--

第十七講 ● 復習問題 《韻文》 短歌の読解ルール

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、あとの問題を解きなさい（一つ5点 計25点満点）

次の短歌を読んで、あとの問いに答えなさい。

A  
みちのくの母のいのちを一目見ん一目みんとぞただにいそげる ひとめ

B  
ふるさとの尾鈴をすずの山のかなしさよ秋もかすみのたなびきて居り

C 連結をはなれし貨車がやすやすと走りつつ行く線路の上を

D ゆく秋の大和やまとの国やくしじの薬師寺の塔の上なる一ひらの雲

E  
瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり

さいとうもきち  
斎藤茂吉

わかやまほくすい  
若山牧水

佐藤佐太郎

佐佐木信綱

まさおかしき  
正岡子規

AとEの短歌の特徴を、五字以内の語句でそれぞれ答えよ。

D	A
E	B
	C

第十七講・確認テスト《韻文》短歌の読解ルール

次の語句のカタカナ部分を漢字に直し、適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 ドウ心に返った喜び

- ① 動  
② 同  
③ 憧  
④ 童

問二 ヤク動的に表現している

- ① 益  
② 約  
③ 曜  
④ 躍

問三 テイ車場の人々

- ① 低  
② 定  
③ 亭  
④ 停

問四 実感をソツ直に述べる

- ① 卒  
② 率  
③ 即  
④ 速

問五 心のキン張と不安感

- ① 禁  
② 筋  
③ 緊  
④ 均

☐
☐
☐
☐
☐

# 第十八講・《韻文》俳句の読解ルール 季語と切れ字をとらえる



俳句…五・七・五の十七音から成り、季語（季題）を詠み込むことを約束としている。（有季定型）

江戸時代に、松尾芭蕉により俳諧が大成され、近代になり正岡子規・高浜虚子・河東碧梧桐らに受け継がれた。また、尾崎放哉・種田山頭火らに代表される、季語や俳句の定型にとらわれず自由に表現する新形式、（無季・）自由律俳句も現れた。

俳句は、世界で最も短い詩形の中に豊かで深い叙情や思いを込めることができ、有季定型という約束があることにより無限の豊かさを生んでいる。

表現技法…句のイメージや情感を味わうために、表現技法の生かされ方をとらえることが手がかりとなる。

俳句の表現技法…季語は、単なる約束事ではなく、十七音という最短詩形の中で工夫された表現技法である。旧暦との季節の違いからくるずれや無季のものに留意する必要がある。

また、「や」「かな」「けり」などの切れ字は、意味の切れ目を示すとともに、作者の感動を込めて句のリズムを引き締める。五・七・五の定型を破って音数が多くなることを字余り、少なくなることを字足らず、また定型をリズムにおいて守りながら、意味において句の途中で切れ目のあるものを句またがり（中間切れ）という。

俳句の鑑賞のしかた

- (1) その句が詠まれたときの情景を想像してみる。
- (2) 豊かで磨きぬかれた表現を味わう。
- (3) 歌や句に込められた作者の心情をとらえる。

例題

① 次の俳句について、あとの問いに答えなさい。

A 頂上や殊に野菊の吹かれ居り

B いちじくのゆたかに実る水の上

C つきぬけて天上の紺曼珠沙華

D 水仙や古鏡のごとく花をかかぐ

E 五月雨や起きあがりたる根なし草

F 町空のつばくらめのみ新しや

(注) 曼珠沙華……彼岸花。 つばくらめ……つばめ。

(1) 上の俳句 A～F のうちから夏の句を選び、その句の季語をそのまま書け。

(2) 上の俳句 A から、切れ字を抜き出せ。

原石鼎

山口誓子

山口誓子

松本たかし

村上鬼城

中村草田男



(3) 次の鑑賞文はA～Fのうち三つの俳句について述べたものである。その三つの俳句をそれぞれ選び、その記号を書け。

ア 故郷の古めいた、なつかしい風物の中に季節の使者を発見した新鮮な感動をよんでいる。

イ 色彩の対比が鮮やかで、花のすつくと立っている情景が強く印象づけられる。

ウ 花の比喩表現から、花卉の清らかな美しさ、飾られている様子まで連想される。

ア

イ

ウ

② 次の俳句と鑑賞文を読んで、あとの問いに答えなさい。

暗く暑く大群集と花火待つ

西東 三鬼

川の土手の上には人がいっぱい出ている。作者もその大群集の中に立ち交じって花火の始まるのを待っている。もう暗くなったのに始まらない。群集のいきれの中で、風の絶えた夕風の夏のむし暑さに汗びっしりになりながら待っている。大群集も待ちかねながらじつと堪えている。もうじき夜空に揚がる華麗な火の花を見て心の鬱をはらそうと我慢している。その大群集の我慢と一緒に作者も黙って待っている。花火の句ではなく、花火を待つことに①句であり、②句だ。その吐息と息を合わせているのを詠んだ句である。

(注) 人いきれ……人が多く集まっいて、体の熱気やにおいが立ちこめること。

夕風……夕方、海風と陸風が交代するとき、しばらく無風状態になること。

鬱……はればれしない気持ち。

(井本農「名句鑑賞十二月」より)

(1) 文章中の俳句の、「花火」のほかにもう一つある季語を抜き出せ。

(2)  ①・②にあてはまる最も適当な言葉を鑑賞文中からそれぞれ抜き出せ。

①

②

(3)  ③にあてはまるこの句のイメージを表した言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 強く重い                      イ 豪快で力強い

ウ はかなく美しい              エ つらく寂しい

# 第十八講・復習問題《韻文》俳句の読解ルール

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、あとの問題を解きなさい（一つ5点 計30点満点）  
次の俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

- A 頂上や殊に野菊の吹かれ居り
- B いちじくのゆたかに実る水の上
- C つきぬけて天上の紺曼珠沙華
- D 水仙や古鏡のごとく花をかかぐ
- E 五月雨や起きあがりたる根なし草
- F 町空のつばくらめのみ新しや

（注）曼珠沙華……彼岸花。

つばくらめ……つばめ。

原石鼎

山口誓子

山口誓子

松本たかし

村上鬼城

中村草田男

問  
A～Fの俳句の季語と季節を答えよ。

F … 季語	E … 季語	D … 季語	C … 季語	B … 季語	A … 季語
<div></div>	<div></div>	<div></div>	<div></div>	<div></div>	<div></div>
季節	季節	季節	季節	季節	季節
<div></div>	<div></div>	<div></div>	<div></div>	<div></div>	<div></div>

第十八講・確認テスト《韻文》俳句の読解ルール

次の語句のカタカナ部分を漢字に直し、適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 チョウ上や

① 超

② 長

③ 丁

④ 頂

問二 サミダレや

① 三月雨

② 五月雨

③ 七月雨

④ 九月雨

問三 新センな感動

① 選

② 先

③ 鮮

④ 染

問四 色サイの対比

① 際

② 才

③ 彩

④ 祭

問五 大ゲン集の中

① 群

② 軍

③ 郡

④ 勲

第十九講・《韻文》短歌・俳句の弱点補強 主題・心情・技法を読み取る問題？



例題

1 次の短歌を読んで、あとの問いに答えなさい。

- A 白鳥<sup>しらとり</sup>はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ
- B 夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳ふかれけり
- C 暑き日の午後のちまたは風たえて塔のごとくに公孫樹<sup>いぢやう</sup>たちたり
- D あたらしく冬きたりけり鞭<sup>むち</sup>のごと幹ひびき合ひ竹群<sup>たかむら</sup>はあり
- E 瓶<sup>かめ</sup>にさす藤<sup>ふじ</sup>の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり
- F 夕やけ空焦<sup>こ</sup>げきはまれる下にして氷<sup>うみ</sup>らんとする湖の静けさ

- わかやまぼくすい 若山牧水
- よさのあきこ 与謝野晶子
- さとうさ たろう 佐藤佐太郎
- みやうじ 宮柊二
- まさおかしき 正岡子規
- しまき あかひこ 島本赤彦

(1) 二句切れで、同時に比喩表現が用いられている短歌はどれか。A～Fの中から一首選んで、その記号を書け。

(2) 広々とした自然の中でのさわやかな光景をよんでいる短歌はどれか。A～Fの中から一首選んで、その記号を書け。

- (3) 次の文章はFの短歌の鑑賞文である。□の中には、この短歌の初句から五句までの中の一つの句がそのまま入る。最も適当な句を抜き出せ。

あかあかと輝く夕やけの空と、つめたく静まりかえって動かぬ湖の対照が、大変に印象的な歌です。□ということばからは、この地におとずれた季節の厳しさと見る者の心をひきしめるような緊迫感が感じられます。

- 2 次の俳句を読んで、あとの問いに答えなさい。

- |                                  |   |                                     |                                    |   |  |
|----------------------------------|---|-------------------------------------|------------------------------------|---|--|
| F                                | E   | D                                   | C                                  | B   | A  |
| 雀 <small>すずめ</small> らも海かけて飛べ吹流し | 玉 <small>たま</small> の如 <small>ごと</small> き小春 <small>びより</small> 日和を授かりし | 咳 <small>せき</small> の子のなぞなぞあそびきりもなや | 咳 <small>せき</small> をする母を見上げてゐる子かな | 冬 <small>ふゆ</small> の水 <small>みづ</small> 一枝の影も欺 <small>あざむ</small> かず | 暖炉 <small>おとこ</small> もえ末子 <small>おとこ</small> は父のひざにある |
| 石田波郷 <small>いしだ はきょう</small>     | 松本たかし <small>まつもと たかし</small>   | 中村汀女 <small>なかつむら ぢよ</small>        | 中村汀女 <small>なかつむら ぢよ</small>       | 中村草田男 <small>なかつむら くさた お</small>                                      | 橋本多佳子 <small>はしもと たかこ</small>                          |

(1) 他<sup>ほか</sup>と異なった季節の句が一句ある。その句の季語を抜き出し、その季節も書け。

季語

季節

(2) A～Fの中から、擬人法が用いられている句を一つ選び、その記号を書け。

(3) 次の文章は、A～Fのある句の鑑賞文の一節である。この鑑賞文の□にあてはまる言葉として、最も適当なものをその句の中から五字で、そのまま抜き出せ。

次々とせがまれて、ややもてあまし気味の気持ち「□」と表現されている。嘆息しつつも、やめられないでいるその子ぼんのうぶりに、一種のユーモラスな雰囲気がかもし出されている。


--

--

--



第十九講・復習問題《韻文》短歌・俳句の弱点補強

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、あとの問題を解きなさい（一つ5点 計20点満点）

問一 次の短歌と鑑賞文を読んで、空欄にあてはまる最も適当な語句を、短歌から抜き出せ。

夕やけ空焦げきはまれる下にして氷らんとする湖の静けさ

島木赤彦

あかあかと輝く〔甲〕と、つめたく静まりかえって動かぬ〔乙〕の対照が、大変に印象的な歌です。〔丙〕ということばからは、この地におとずれた季節の厳しさと見る者の心をひきしめるような緊迫感が感じられます。

〔甲〕

〔乙〕

〔丙〕

問二 次の俳句と鑑賞文を読んで、空欄にあてはまる最も適当な語句を、俳句から抜き出せ。

咳<sup>せき</sup>の子のなぞなぞあそびきりもなや

中村汀女<sup>なかむらていじょ</sup>

次々とせがまれて、ややもてあまし気味の気持ち「」と表現されている。嘆息しつつも、やめられないでいるその子ほんのうぶりに、一種のユーモラスな雰囲気がかもし出されている。

第十九講・確認テスト《韻文》短歌・俳句の弱点補強

次の語句のカタカナ部分を漢字に直し、また太字の部分は読み方として適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 アツき日の午後 ①暑 ②熱 ③厚 ④篤

問二 公孫樹たちたり ①たんぽぽ ②まろにえ ③いちよう ④ぼぶら

問三 瓶にさす藤の花 ①へい ②かめ ③びん ④かん

問四 ダン炉もえ ①段 ②団 ③暖 ④談

問五 小春日和 ①ひわ ②にちわ ③びわ ④びより

☐
☐
☐
☐
☐

第二十講・《古典》古文の読解ルール(1) 主語・歴史的仮名遣いをおさえる？



1 古典の読解

古典の文章（古文）では、仮名遣いや言葉の意味など、現代語と異なる部分を理解することが必要であるが、まずその第一歩として、何度も音読して古文のリズムに慣れ、古文の表現に親しむことが大切である。

2 現代仮名遣いと歴史的仮名遣いの違いをおさえる。

〈歴史的仮名遣いの読み方の原則〉

(1) 語の初めにこない八行（ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ）の音

↓ウ行（ワ・イ・ウ・エ・オ）の音

例 あはれ↓あわれ いふ（言ふ）↓いう

にほひ↓におい いへ（家）↓いえ

(2) ゐ・ゑ・を↓い・え・お

例 ゐる↓いる ゑむ（笑む）↓えむ をとこ↓おとこ

(3) ぢ・づ・↓じ・ず

例 すぢ（筋）↓すじ わづか↓わづか

(4) む（助動詞や助詞の場合）↓ん

例 らむ↓らん 行かむ↓行かん

(5)

その他

例

けふ↓きよう

くわん

(官)

↓かん

うつくしうて↓うつくしゆうて

例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、竹取の翁おきなといふものありけり。① 野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。② 名をば、さぬきのみ  
今ではもう昔のことだが  
いた  
分け入って  
いろいろな物を作るのに

やつことなむいひける。③

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。④ あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばか  
根元の光る竹が  
近寄って  
背丈が三寸

りなる人、いとうつくしうてゐたり。  
ほとんどの人が  
たいへん  
すわっていた

〔竹取物語〕より

(注) 三寸……一寸は約三・〇三センチメートル。

(1) 線①～④の言葉を、現代仮名遣いで書け。

①

②

③

④

(2) — 線①「竹取の翁といふものありけり」を現代語訳する場合、「いふもの」のあとにどのような助詞を補ったらよいか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア を イ は  
ウ の エ が

(3) — 線②「取りつつ」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 取りながら イ 取りながらも  
ウ 取っては エ 取り続けて

(4) — 線③「あやしがりて」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 疑わしく感じて イ おそろしく思って  
ウ 不思議に思っ て エ あやしいと感じて

(5) — 線④「うつくしうて」とあるが、「うつくし」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア かわいい イ りっぱだ  
ウ きれいだ エ 好ましい

第二十講・復習問題《古典》古文の読解ルール(1)

授業で使用したテキストをしっかりと見直して、あとの問題を解きなさい（一つ5点 計25点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

今は昔、竹取の翁といふものありけり。<sup>A</sup>野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。<sup>①</sup>

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。<sup>B</sup>あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。<sup>C</sup><sup>②</sup>

〔「竹取物語」より〕

（注）三寸……一寸は約三・〇三センチメートル。

問一 線①、②の言葉を、現代仮名遣いで書け。

①

②

問二 線A「竹取の翁といふものありけり」を、助詞などを補って現代語訳せよ。



問三  
〓  
線B 「あやしがりて」を現代語訳せよ。

問四  
〓  
線C 「うつくしうて」を現代語訳せよ。

第二十講・確認テスト《古典》古文の読解ルール(1)

次の古文単語の、意味や太字の読みを答えなさい。

問一 竹取の翁(訓読み)

①おう

②じい

③おきな

④おうな

問二 あやしがる(意味)

①不思議に思う

②心配に思う

③珍しく思う

④辛く思う

問三 うつくし(意味)

①趣深い

②かわいらしい

③上品だ

④高貴だ

問四 いと(意味)

①少しは

②いろいろ

③わずかに

④たいへん

問五 よろづ(意味)

①たくさん

②特別

③わずか

④大事

# 第二十一講・《古典》古文の読解ルール(2)

## 係り結びの法則



### 1 古語の意味

- (1) 現代語と語形が似ていても意味の違う言葉

例 をかし (趣がある) やがて (すぐに) かなし (いとおしい)

- (2) 現代語にはない言葉

例 いと (たいそう)

「けり、たり、なり」など文末の表現

### 2 古文の文法・語法に注意する。

- (1) 主語などの省略がある。

例 (翁は) 野山にまじりて竹を取りつつ、……。

- (2) 助詞の省略が多い。

例 三寸ばかりなる人(が)、いとうつくしうて……。

- (3) 「係り結び(の法則)」がある。

ふつう、文末は言い切りの形(終止形)で終わるが、上に係りの助詞「ぞ・なむ・や・か」などがくる場合は連体形、「こそ」がくる場合は已然形(いぜんけい)で結ぶ。

例 もと光る竹なむ一筋ありける。

あざ笑ひてこそ立てりけれ。

(「ける」「けれ」の終止形は「けり」)。

(4)

**助動詞や助詞の意味を考える。**

文脈から考えて、どのような意味にとるのがふさわしいかを判断すればよい。

【例】「つつ」は、同じ動作（ここでは竹を取ること）がくり返される意を表す助動詞。

「ならむ」の「む」は推量を表す助動詞。

「何とか」の「か」は疑問を表す助詞。

例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(かぐや姫に熱心に求婚した五人の貴公子のうち、くらもちの皇子は、蓬萊の玉の枝を探しにいくと言って船出するが、実は、にせの玉の枝を作らせていた。皇子は、翁と姫に、架空の冒険談を語る。)

これやわが求むる山ならむと思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐらして、二、三日ばかり、見

これこそ

やはり

周囲

(一) 回って

歩くに、天人のよそほひしたる女、山の中よりいで来て、銀の金匱を持ちて、水をくみ歩く。これを見て、船より下り

服装

山の中から出てきて

おわん

て、「この山の名を何とか申す。」と問ふ。女、答へていはく、これは蓬萊の山なりと答ふ。これを聞くに、うれしきことか

うれしくてたまりません

ぎりなし。  
でした

〔「竹取物語」より〕

(注) 蓬萊の玉の枝……根が銀、茎が金、実が真珠でできているといわれる木の枝。蓬萊(蓬萊山)は、中国の伝説上の理想郷。

(1) 線①～③の言葉を、現代仮名遣いで、すべてひらがなで書け。

①

②

③

(2) 線①「わが求むる山ならむ」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。また、「わが求むる

山」とは何のことを指すか。文中から四字で抜き出せ。

ア わたくしが探し求めた山ではないだろう

イ わたくしが探し求めている山だろう

ウ わたくしが探し求めた山ならよいのだが

エ わたくしが探し求めている山だったのか

意味…

(3) 線②「おぼえて」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 思い出されて イ 想像して

ウ 覚えていて エ 思われて

(4) — 線③「何とか申す」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 何とかいいましたね

イ 何とかいってください

ウ 何というのですか

エ 何と申しあげますか

(5) — 線④「女、答へていはく」とあるが、女が答えた部分は、どこからどこまでか。文中から最初と最後の三字を抜き出せ。


）


第二十一講・復習問題《古典》古文の読解ルール(2)

授業で使ったテキストをじっくり見直して、あとの問題を解きなさい（一つ5点 計25点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

（かぐや姫に熱心に求婚した五人の貴公子のうち、くらもちの皇子は、蓬萊の玉の枝を探しにいくと言って船出するが、実は、にせの玉の枝を作らせていた。皇子は、翁と姫に、架空の冒険談を語る。）

これやわが求むる山ならむと思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐらして、二、三日ばかり、見歩くに、天人のよそほひしたる女、山の中よりいで来て、銀の金鉢しろかねかなまるを持ちて、水をくみ歩く。これを見て、船より下りて、「この山の名を何とか申す。」と問ふ。女、答へていはく、これは蓬萊の山なりと答ふ。これを聞くに、うれしきことかぎりなし。

〔「竹取物語」より〕

（注）蓬萊の玉の枝……根が銀、茎が金、実が真珠しんじゆできているといわれる木の枝。蓬萊（蓬萊山）は、中国の伝説上の理想郷。

問一 ―― 線①～③の言葉を、現代仮名遣いで書け。

①

②

③



問二 〓 線A「何とか申す」を、係り結びに留意して現代語訳せよ。

問三 〓 線B「女、答へていはく」とあるが、女が答えた部分は、どこからどこまでか。文中から最初と最後の三字を抜き出せ。

、

第二十一講・確認テスト《古典》古文の読解ルール(2)

次の設問について、最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 「求む」の意味を答えよ。

① 探す

② 求める

③ 尋ねる

④ 訪ねる

☐

問二 「歩く<sup>あり</sup>」の意味を答えよ。

① 歩く

② 歩きまわる

③ ゆっくり歩く

④ 踏み分ける

☐

問三 「何とか申す」の「か」の意味を答えよ。

① 疑問

② 反語

③ 強意

④ 詠嘆

☐

問四 「いはく」の意味を答えよ。

① 言うが

② 言うならば

③ 言うとしても

④ 言うことには

☐

問五 竹取物語の成立した時代を答えよ。

① 奈良時代

② 平安時代

③ 鎌倉時代

④ 室町時代

☐

第二十二講・《古典》古文の弱点補強

主語・仮名遣い・係り結びを読み取る問題

？



例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

昔、絵仏師えぶつしの良秀りょうしゅうという者がいた。ある日、家の隣から火事が起こり、火がせまってきたので、自分一人、大通りへ逃げ、家の向かい側で自分の家が焼けるのを見ていた。人々が「たいへんなことですね。」と言って見舞ったけれども、良秀は、家の焼けるのを見てうなずいては、ときどき笑って、「ああ、たいへんなもうけものをしたよ。今までは下手に描いてきたものだな。」と言ったので、そのとき見舞いに来た人たちは、

「こはいかに、かくては立ちたまへるぞ。<sup>①</sup>あさましきことかな。物のつきたまへるか。」と言ひければ、「なんでふ物のつ

これはまあどうして

立っていらつしやるのだ

もののけでもとりつきなさったか

どうしてもののけなど

5

くべきぞ。年ごろ不動尊の火炎を悪あしくかきけるなり。今見れば、かうこそ燃え<sup>②</sup>と、心得こころえつるなり。これこそせう<sup>③</sup>とりつくことがあろうか

(火は) このように燃えるものだった 会得えいとくした

とくよ。<sup>④</sup>この道を立てて世にあらんには、仏だによくかきたてまつらば、百千ももちの家も出できなん。わたうたちこそ、させる

世の中を生きてゆくには仏様さへうまくお描き申しあげれば

百や千の

できるだろう

あなたたち

これといった

能もおはせねば、物をもをしみたまへ。<sup>⑤</sup>と言ひて、あざ笑ひてこそ立てりけれ。才能も持ちでないから

立っていた

〔「宇治拾遺物語」より〕

(注) 絵仏師……仏画を描くことを職業とする人。

もののけ……人にたたりをするもの。人にのりうつて悩ますという。

不動尊……不動明王。怒りの表情をし、右手に剣、左手に縄をもち、背に火炎を負い、いつさいの邪悪<sup>じゃあく</sup>をしずめる力を持つといわれる。

(1) 線①「あさましきことかな」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 見苦しいことだなあ      イ あきれたことだなあ

ウ あさはかなことだなあ      エ なさけないことだなあ

(2) ②にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア けら      イ けり

ウ ける      エ けれ

(3) 線③「せうとく」の意味を表す言葉を、前半の現代語の文中から五字で抜き出せ。

(4) 線④「この道」とは、具体的にはどのようなことを指すか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えよ。

ア 仏道修行の道      イ 人間としての行い

ウ 仏画の道      エ 心に悟った道理

(5) 線⑤「物をもをしみたまへ」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 物をおしみなさるのだ イ 物をおしむべきだ

ウ 物をおしんでいなさい エ 物をおしんではいけない

☐

(6) 線「今までは下手に描いてきたものだ」とあるが、良秀は何を「下手に描いてきた」と言っているのか。本文中から六字で抜き出せ。

☐

(7) 文章全体から、良秀は、家の焼けるのを見てどう感じていると思われるか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 腹を立てている イ 喜んでいる

ウ あきらめている エ 関心がない

☐

第二十二講・復習問題《古典》古文の弱点補強

授業で使ったテキストをじっくり見直して、あとの問題を解きなさい（二つ 5点 計30点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

昔、絵仏師の良秀りょうしゅうという者がいた。ある日、家の隣から火事が起こり、火がせまってきたので、自分一人、大通りへ逃げ、家の向かい側で自分の家が焼けるのを見ていた。人々が「たいへんなことですね。」と言って見舞ったけれども、良秀は、家の焼けるのを見てうなずいては、ときどき笑って、「ああ、たいへんなものうけものをしたよ。今までは下手に描いてきたものだ。」と言ったので、そのとき見舞いに来た人たちは、

「こはいかに、かくては立ちたまへるぞ。<sup>①</sup>あさましきことかな。物のつきたまへるか。」<sup>②</sup>と言ひければ、「<sup>③</sup>なんでふ物のつ

くべきぞ。<sup>④</sup>年ごろ不動尊の火炎を悪しくかきけるなり。今見れば、かうこそ燃えけれど、心得つるなり。これこそせう

とくよ。<sup>⑥</sup>この道を立てて世にあらんには、仏だによくかきたてまつらば、百千の家も出できなん。わたうたちこそ、させる

能もおはせねば、物をもをしみたまへ。」<sup>⑤</sup>と言ひて、あざ笑ひてこそ立てりけれ。

〔「宇治拾遺物語」より〕

(注) 絵仏師……仏画を描くことを職業とする人。

もののけ……人にたたりをするもの。人にのりうつて悩ますという。

不動尊……不動明王。怒り<sup>いか</sup>の表情をし、右手に剣、左手に縄をもち、背に火炎を負い、いつさいの邪悪<sup>じあく</sup>をしずめる力を持つといわれる。

問一 — 線①「あさましき」の意味を答えよ。

問二 — 線②「の」の文法的意味を答えよ。

問三 — 線③「なんでふ」を現代仮名遣いで書け。

問四 — 線④「年ごろ」の意味を答えよ。

問五 — 線⑤「こそ」の結びにあたる言葉を本文中から抜き出せ。

問六 — 線⑥「この道」とは、具体的にどのようなことを指すか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 仏道修行の道

イ 人間としての行い

ウ 仏画の道

エ 心に悟った道理



第二十二講・確認テスト《古典》古文の弱点補強

次の設問について、最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 「あさましき」の意味を答えよ。

- ① あさましい
- ② いやしい
- ③ あきれる
- ④ うらめしい

☐

問二 「年ごろ」の意味を答えよ。

- ① 長年
- ② 年代
- ③ 年頃
- ④ 年月

☐

問三 「かうこそ」の「こそ」の意味を答えよ。

- ① 疑問
- ② 反語
- ③ 強意
- ④ 詠嘆

☐

問四 「だに」の意味を答えよ。

- ① だけ
- ② さえ
- ③ まで
- ④ から

☐

問五 宇治拾遺物語の文学ジャンルを答えよ。

- ① 物語
- ② 説話
- ③ お伽草子
- ④ 随筆

☐

第二十三講・《古典》漢文の読解ルール 故事成語・書き下し文の読み取り？



1 漢文の読み方

漢文は、もともと中国の文章であるが、それを日本語の語法に従って読むことを「訓読する」という。そのために、「送り仮名」や、読む順序を示す記号である「返り点」が工夫された。送り仮名と返り点を合わせて「訓点」といい、訓読したものを仮名交じり文で書き表したものを「書き下し文」という。

(1) 送り仮名（助詞・助動詞・用言の活用語尾）は、漢字の右下にカタカナで付ける。

(2) 返り点は、漢字の左下に付ける。

・レ点 一字だけ上に返って読む。

・一二点 二字以上返って読む。

・上中下点 一二点だけでは足りない場合に用いる。

（これらを組み合わせて用いることもある。）

2 漢文特有の言い回しに注意する。

例 「曰はく」と…会話の引用

「くなかれ」……禁止

3 語句の意味に注意して内容を読み取る。

漢字そのものの持つ意味、前後の文脈のつながりから文中での使われ方を判断していくようにする。

例題

次の漢文を読んで、あとの問いに答えなさい。

A 学<sup>ビテ</sup>びて時にこれを習<sup>フ</sup>ふ、また説<sup>よろこ</sup>ばしからずや。  
 機会あることに復習し体得する  
 なんとうれしいことではないか

① 朋<sup>とも</sup>あり 、また樂<sup>たのしみ</sup>しからずや。人知<sup>し</sup>らずして 慍<sup>うら</sup>みず、また君子<sup>じゆんし</sup>ならずや。  
 人が認めてくれなくても  
 不平不満を抱かない

学<sup>ビテ</sup>而<sup>ニ</sup>時<sup>フ</sup>習<sup>フ</sup>之<sup>これヲ</sup>、不<sup>また</sup>亦<sup>バ</sup>説<sup>よろこ</sup>乎<sup>や</sup>。有<sup>レ</sup>朋<sup>とも</sup>自<sup>より</sup>遠<sup>とほ</sup>方<sup>はう</sup>来<sup>きた</sup>、不<sup>また</sup>亦<sup>バ</sup>樂<sup>よろこ</sup>乎<sup>や</sup>。人<sup>し</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>ら</sup>而<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>慍<sup>うら</sup>、不<sup>また</sup>亦<sup>バ</sup>

君<sup>きみ</sup>子<sup>こ</sup>乎<sup>や</sup>。

B 学<sup>ビテ</sup>びて思<sup>おも</sup>はざればすなはち罔<sup>くわう</sup>し。思<sup>おも</sup>ひて学<sup>まな</sup>ばざればすなはち殆<sup>あや</sup>ふし。  
 物事の道理を正確につかめない  
 危険である

学<sup>ビテ</sup>而<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>思<sup>おも</sup>、則<sup>すなはち</sup>罔<sup>くわう</sup>。思<sup>おも</sup>而<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>学<sup>まな</sup>、則<sup>すなはち</sup>殆<sup>あや</sup>。

(一) 論語 〔より〕

(1) 線①「ずや」、②「ばすなはち」は、漢文特有の言い回しであるが、その意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

- ア 原因結果      イ 禁止  
ウ 仮定          エ 反語

① ☐

② ☐

(2) 線①「朋」とは、この場合、どのような友人を指すと考えられるか。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えよ。

- ア 共に楽しく遊ぶ友人  
イ 遠くから訪ねてくれる友人  
ウ 同じ学問の道に志す友人  
エ 自分の本音を語れる友人

(3) ☐にあてはまる書き下し文を答えよ。

(4) 線①「君子」とはどのような人物か。次の中から最も適当なものを選び、記号で答えよ。

- ア 人格者          イ 最高位の人  
ウ 高貴な人      エ 有能な人

☐

☐

☐

(5) — 線③「思而不学」に、書き下し文を参考にして訓点を付けよ。

思  
而  
不  
学

(6) A・Bの文中の、「学ぶ」、「思ふ」は次のどちらの意味で用いられているか。記号で答えよ。

ア 書物を読んだり師から教わったりする。

イ 自分でよく考え、研究する。

「学ぶ」

☐

「思ふ」

☐

## 第二十三講・復習問題《古典》漢文の読解ルール

授業で使ったテキストをじっくり見直して、あとの問題を解きなさい（二つ 5点 計15点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 学<sup>まな</sup>びて時にこれを習<sup>し</sup>ふ、また説<sup>よ</sup>ばしからずや。

朋<sup>とも</sup>あり遠方より来たる、また樂<sup>よろこ</sup>しからずや。

人知らずして慍<sup>うら</sup>みず、また君子<sup>くんし</sup>ならずや。

学<sup>まな</sup>びて思<sup>おも</sup>はざればすなはち罔<sup>くら</sup>し。

思<sup>おも</sup>ひて学<sup>まな</sup>ばざればすなはち殆<sup>あや</sup>ふし。

問一 — 線①「朋」とは、この場合どのような友人を指すと考えられるか。漢字二字で答えよ。

問二 — 線②「君子」とはどのような人物か。漢字三字で答えよ。



問三

本文は『論語』の一節であるが、中国の書物から生まれた、教訓のある言葉をなんといいか。四字の漢字で答えよ。


第二十三講・確認テスト《古典》漢文の読解ルール

次の設問について、最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 「習之」の「之」の読みを答えよ。

- ① あれ
- ② それ
- ③ これ
- ④ どれ

問二 「自遠方」の「自」の読みを答えよ。

- ① じ
- ② おのづから
- ③ みずから
- ④ より

問三 「不亦楽」の「不」の読みを答えよ。

- ① ず
- ② じ
- ③ まじ
- ④ あらず

問四 「君子」の意味を答えよ。

- ① 人格者
- ② 主君
- ③ 貴人
- ④ 公人

問五 「論語」とは誰の教えが書かれたものか。

- ① 孔子
- ② 老子
- ③ 孟子
- ④ 荀子



# 第二十四講・《古典》漢詩の読解ルール

漢詩のかたちと表現技法をとらえる

？

## 1 漢詩のきまりを知る。

### (1) 漢詩の形式

・ 絶句 四句から成る詩

五言絶句 (二句が五字)  
七言絶句 (二句が七字)

・ 律詩 八句から成る詩

五言律詩 (二句が五字)  
七言律詩 (二句が七字)

### (2) 絶句の構成

第一句 起句 うたい起こす

第二句 承句 起句を承けて展開する

第三句 転句 場面を転換する

第四句 結句 全体の結び

## 2 漢詩の情景・作者の心情を読み味わう。

漢詩では、情景と心情を組み合わせてうたったものが多い。例題の詩は、情景↓心情だが、逆の場合もある。

3 漢詩の主な表現技法

- (1) 対句 字数・構成の同じ二句の対応。
- (2) 体言止め 句末を体言で終わらせ、余韻を持たせる。
- (3) 倒置法 語順を入れかえ、最初にくる部分を強調。

例題

次の漢詩と解説文を読んで、あとの問いに答えなさい。

絶句

杜甫<sup>とほ</sup>

江<sup>みどり</sup>は碧<sup>アヲ</sup>にして鳥<sup>い</sup>は逾<sup>い</sup>よ白<sup>ハク</sup>  
川<sup>カハ</sup> 水鳥<sup>ミヅトリ</sup>はいっそう白く見える

江<sup>ハ</sup> 碧<sup>ニシテ</sup> 鳥<sup>ハ</sup> 逾<sup>ヨ</sup> 白<sup>ク</sup>

山<sup>ヤマ</sup>は青<sup>アヲ</sup>くして花<sup>ハナ</sup>は然<sup>シテ</sup>えんと欲<sup>ホツ</sup>す  
青々<sup>アヲアヲ</sup>と茂<sup>シホ</sup>り

山<sup>ハ</sup> 青<sup>クシテ</sup> 花<sup>ハナ</sup> 欲<sup>ホツ</sup> 然<sup>シテ</sup>

今<sup>イマ</sup>□<sup>ミ</sup>看<sup>ミ</sup>す又<sup>マタ</sup>過<sup>ス</sup>ぐ  
見<sup>ミ</sup>てい<sup>ル</sup>る間<sup>マ</sup>に

今<sup>イマ</sup> □<sup>ミ</sup> 看<sup>ミ</sup> 又<sup>マタ</sup> 過<sup>ス</sup>

何<sup>ナニ</sup>れの日<sup>ヒ</sup>か是<sup>コ</sup>れ帰<sup>キ</sup>る年<sup>ネン</sup>ぞ

何<sup>レノ</sup> 日<sup>カ</sup> 是<sup>レ</sup> 帰<sup>ル</sup> 年<sup>ゾ</sup>

この詩は、作者がうち続く戦乱を避け、友人を頼って成都<sup>せいと</sup>にいたときの作品である。前半の二句には成都<sup>せいと</sup>の美しい風景<sup>ふうけい</sup>が、後半の二句にはその異郷の地の風景を目の前にして悲<sup>かな</sup>しみに沈<sup>しづ</sup>む作者の心情がうたわれている。

(注) 然……燃と同じ。

成都……今の中国四川省の省都、成都市。

- (1) この詩で、①前の句をうけてさらに展開する、②場面を一転する、という役割を持つのは、それぞれ第何句か。漢数字で答えよ。

① 第

 句

② 第

 句

- (2) — 線①「花は然えんと欲す」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。また、この部分を参考

にして、—— 線「花欲然」に、訓点を付けよ。

ア 花は燃えるように赤く咲いてほしい

イ 花はあたりまえのように赤く咲いている

ウ 花は今にも燃え出しそうに赤く咲いている

エ 花は燃えるように赤く咲こうとしている

意味：

花  
欲  
然

- (3) □にあてはまる季節として最も適当なものを漢字一字で答えよ。

- (4) — 線②「美しい風景」は、詩の中に色彩を表す字が含まれていることによって鮮やかに表現されている。前半の二句の中から、色彩を表す漢字を四つ抜き出せ。

・

・

・

(5) — 線③「悲しみ」とは、どのような悲しみか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 故郷へ帰れないまま時が過ぎてゆく悲しみ。

イ いつかは友人と別れねばならない悲しみ。

ウ 戦乱が続いて国土が破壊されてゆく悲しみ。

エ 美しい成都を去らねばならない悲しみ。

(6) この詩で、対句になっているのはどの句とどの句か。漢数字で答えよ。

(7) この詩の形式を何というか。答えよ。

第

句と第

句

絶句

## 第二十四講 ● 復習問題 《古典》 漢詩の読解ルール

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、あとの問題を解きなさい（二つ 5点 計20点満点）  
次の漢詩と解説文を読んで、あとの問いに答えなさい。

絶句

杜甫

江は碧にして鳥は逾よ白く

江は碧にして鳥は逾よ白く

山は青くして花は然えんと欲す

山は青くして花は然えんと欲す

今春看す又過ぐ

今春看す又過ぐ

何れの日か是れ帰る□ぞ

何れの日か是れ帰る□ぞ

この詩は、作者がうち続く戦乱を避け、友人を頼って成都にいたときの作品である。前半の二句には成都の美しい風景が、後半の二句にはその異郷の地の風景を目の前にして悲しみに沈む作者の心情がうたわれている。

（注）然……燃と同じ。

成都……今の中国四川省の省都、成都市。

問一 漢詩中の空欄にあてはまる漢字一字を答えよ。

問二 この詩で対句になっているのはどの句とどの句か。行数で答えよ。

問三 この漢詩について説明した次の文の空欄にあてはまる言葉を、漢字二字で答えよ。

へ帰れないまま時が過ぎてゆく悲しみ。

問四 この漢詩の形式を何というか。漢字四字で答えよ。

行目と

行目

## 第二十四講・確認テスト《古典》漢詩の読解ルール

次の設問について、最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 「絶句」とは何行詩のことか。

- ① 四行詩
- ② 六行詩
- ③ 八行詩
- ④ 十二行詩

問二 漢詩の偶数句末の母音を揃えることを何というか。

- ① 対句
- ② 押韻
- ③ 対比
- ④ 頭韻

問三 同じ文型で逆の内容を表現することを何というか。

- ① 対句
- ② 押韻
- ③ 対比
- ④ 頭韻

問四 「何れ<sup>いづ</sup>」の意味を答えよ。

- ① いづ
- ② だれ
- ③ 何
- ④ どのように

問五 「是れ」の読みを答えよ。

- ① あれ
- ② それ
- ③ これ
- ④ どれ



第二十五講・《古典》漢文の弱点補強

漢詩・故事成語・書き下し文を読み取る問題？



例題

1 次の漢詩を読んで、あとの問いに答えなさい。

春暁<sup>しゅんげう</sup>

孟浩然<sup>もうこうねん</sup>

春眠<sup>あかつき</sup>暁<sup>あかつき</sup>を覚<sup>さ</sup>えず

春<sup>①</sup>眠<sup>い</sup>不<sup>ふ</sup>覚<sup>あ</sup>暁<sup>え</sup>

②

処<sup>こ</sup>処<sup>こ</sup>聞<sup>き</sup>啼<sup>てい</sup>鳥<sup>てう</sup>

夜来風雨の声

夜来風雨<sup>しやらいふうう</sup>声<sup>こゑ</sup>

③ 花落つること知る多少

花<sup>は</sup>落<sup>つ</sup>知<sup>し</sup>多<sup>た</sup>少<sup>せう</sup>

(注) 暁……夜明け

処処……ところどころ

夜来……ゆうべから

多少……たくさん

(1) 線①「春眠不覚曉」に、書き下し文を参考にして、返り点を付けよ。

春  
眠  
不  
覚<sub>エ</sub>  
曉<sub>ヲ</sub>

(2) ②に入る書き下し文を書け。

(3) 線③「花落つること知る多少」の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 花はつぎつぎに散り続けている。

イ 花はついぶん散ったことだろう。

ウ 花がいつ散ったのか知らずにいた。

エ 花もわずかに散り残っている。

(4) この詩の印象として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア はかなさ イ のどかさ

ウ けだるさ エ さびしさ

〔2〕 次の漢文を読んで、あとの問いに答えなさい。

A 子曰はく、「人遠き慮り<sup>①</sup>なければ、必ず近き憂ひ<sup>うれ</sup>有り。」と。

子曰、<sup>ハク</sup>「人無<sup>ケレバ</sup>遠慮<sup>キ</sup>、必有<sup>ズ</sup>近憂<sup>リト</sup>。」

B 子曰はく、「学びて思はざれば則ち罔<sup>すなは</sup>し。思ひて学ばざれば則ち殆<sup>あやふ</sup>し。」と。

子曰、<sup>ハク</sup>「学<sup>ビテ</sup>而<sup>ズレバ</sup>不<sup>レ</sup>思<sup>ハ</sup>則<sup>チ</sup>罔<sup>シ</sup>。思<sup>ヒテ</sup>而<sup>ズレバ</sup>不<sup>レ</sup>学<sup>バ</sup>則<sup>チ</sup>殆<sup>シト</sup>。」

(注) 罔し……物事の道理を明確につかむことができない

(1) Aの——線①「遠き慮り」の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 将来への心くばり      イ 広大な計画

ウ 目上の人への心くばり      エ 遠くの友人への思いやり



(2) 次はBの漢文の通釈文である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

先生が言われるには、「学ぶだけでその内容をよく考えないと、があやふやになる。自分の考えだけに頼って、人の意見や知識を学ばないと、危険である。」と。

① 右の通釈文のに入る語として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 練習    イ 経験  
ウ 習慣    エ 理解

② Bの――線②「思ひて学ばざれば則ち殆し」が表すこととして最も適切なものを、通釈文を参考にして次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 学問は必要ない    イ 学ぶことは危険である  
ウ 独断は危険である    エ 考えることは重要である

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

当初は優勢であった項羽の軍も、戦いが長引くにつれ、次々と腹心の部下に裏切られ、敗色が濃くなっていった。そしてついに、垓下の地に追いつめられ、劉邦の率いる漢軍に四方ごとく取り囲まれてしまった。

項王の軍 A。兵少なく食尽く。漢軍及び諸侯の兵、之を囲むこと数重なり。夜漢軍の四面皆楚歌するを聞き、項王乃ち大いに驚きて曰く、「漢皆已に Bか。是れ何ぞ楚人の多きや。」と。

項王、軍壁垓下。兵少食尽。漢軍及諸侯兵、围之数重。夜聞漢軍四面皆楚歌。項王乃大驚曰、「漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。」

（項羽の軍は垓下の塞に立てこもったが、兵力は衰え、食糧もほとんど尽きていった。劉邦の率いる漢軍や彼に味方する諸侯の兵は、この城壁を幾重にも包囲した。夜になって、項羽は、四面を囲んだ漢軍が皆楚の国の歌を歌うのを聞き、大いに驚いて言った。「漢は既に我が楚をすっかり手に入れたのか。まあなんと楚人の多いことか。」と。）

④ 事ここに至って勝ち目のないことを悟った項羽は夜中に別れの酒宴を開き、自分の境遇をいきどおり嘆いて、次のように歌った。

力は山を抜き 気は世を蓋ふおほ

時利あらず 驩逝すゐかず

驩の逝かざる 奈何いかんすべき

虞ぐや虞や 若なんぢを奈何せん

(口語訳)

わたしの力は動かぬ山を引き抜き、わたしの気力は天下を覆い尽くす。しかし時運はわたしに味方せず、愛馬「驩」も進もうとしない。進まぬ「驩」をどうしよう。(わたしの愛する) 虞よ虞よ、おまえをどうしたらよいものか。

(「垓下の戦い」より)

(1) 線①「腹心の部下」とはどんな人か。次の中から選び、記号で答えよ。

ア 心の中に悪だくみを抱いている部下。

イ 心の中では従っていない部下。

ウ うわべと心の中が違っている部下。

エ 心の底から信頼し、信用している部下。



(2) 線②「敗色が濃く」と同じ意味で「敗色□□」という四字の熟語を作るとき、□□に入るものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 濃縮    イ 濃厚  
ウ 濃度    エ 濃密

(3) Aには線a、Bには線bの書き下し文を、それぞれ書け。

A

B

(4) 線③「四面を囲んだ漢軍が皆楚の国の歌を歌う」からきた、1 四字の故事成語を書け。また、2 その意味を次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 周囲を敵に囲まれて孤立しているような状態。  
イ たくさんの男性の中に女性が一人だけまじっているような状態。  
ウ 非常に親しいつき合い。

(5) 線④「事ここに至って」とは何がどうなったことを指すのか。書き下し文から十字で抜き出せ。

1

2

## 第二十五講・復習問題《古典》漢文の弱点補強

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、あとの問題を解きなさい（二つ 5点 計20点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

当初は優勢であった項羽の軍も、戦いが長引くにつれ、次々と腹心の部下に裏切られ、敗色が濃くなっていた。そしてついに、垓下の地に追いつめられ、劉邦の率いる漢軍に四方ごとく取り囲まれてしまった。

項王の軍垓下に壁す。兵少なく食尽く。漢軍及び諸侯の兵、之を囲むこと数重なり。夜漢軍の四面皆楚歌するを聞き、項王乃ち大いに驚きて曰く、「漢皆已に□を得たるか。是れ何ぞ楚人の多きや。」と。

（項羽の軍は垓下の塞に立てこもったが、兵力は衰え、食糧もほとんど尽きていった。劉邦の率いる漢軍や彼に味方する諸侯の兵は、この城壁を幾重にも包囲した。夜になって、項羽は、四面を囲んだ漢軍が皆楚の国の歌を歌うのを聞き、大いに驚いて言った。「漢は既に我が楚をすっかり手に入れたのか。まあなんと楚人の多いことか。」と。）

事ここに至って勝ち目のないことを悟った項羽は夜中に別れの酒宴を開き、自分の境遇をいきどおり嘆いて、次のように歌った。

力は山を抜き 気は世を蓋ふ



時利あらず 驩<sup>すゐ</sup>逝<sup>ゆ</sup>かず

驩<sup>い</sup>の逝<sup>かん</sup>かざる 奈何<sup>いかん</sup>すべき

虞<sup>ぐ</sup>や虞<sup>ぐ</sup>や 若<sup>なんぢ</sup>を奈何<sup>いかん</sup>せん

（「垓下の戦い」より）

問一 線①「腹心の部下」とはどんな人か。この言葉を説明した次の文の空欄にあてはまる、最も適切な二字熟語を答えよ。

心の底から

している部下のこと。

問二 線②「敗色が濃く」と同じ意味の四字熟語を答えよ。

問三 本文中の空欄に入る最も適切な漢字一字を答えよ。

問四 「四面を囲んだ漢軍が皆楚の国の歌を歌う」からできた、四字の故事成語を答えよ。

第二十五講・確認テスト《古典》漢文の弱点補強

次の語句の設問について、最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 「暁」の意味を答えよ。

① 明け方

② 朝

③ 夕方

④ 深夜

☐

問二 「慮り」の読みを答えよ。

① おもいはかり

② おもんばかり

③ おもはかり

④ おほはかり

☐

問三 「四面ソカ」の「ソカ」はどれか。

① 楚歌

② 曾歌

③ 素歌

④ 祖歌

☐

問四 「奈何すべき」の意味を答えよ。

① どうするのか

② どうなのか

③ どうしようか

④ どうなんだ

☐

問五 「敗色」に続く熟語を答えよ。

① 濃縮

② 濃厚

③ 濃度

④ 濃密

☐

第二十六講・《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(1)

科学論を読み取る



例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 多くの人は、科学は正しい事実だけを積み上げてできていると思うかもしれないが、それは真実ではない。実際の科学は、事実の足りないところを「科学的仮説」で補いながら作り上げた構造物である。科学が未熟なために、本来必要となるべき鉄骨が欠けているかもしれないのだ。新しい発見による革命的な一揺れが来たら、いつ倒壊してもおかしくない位である。

② だから、「科学が何であるか」を知るには、逆に「何が科学でないか」を理解することも大切だ。科学は確かに合理的だから、理屈に合わない迷信は科学ではない。それでは、占いや心霊現象しんれいげんしやうについてはどうだろうか。占いは、当たらないことがあるから非科学的なのではない。天気予報は、いつも正確に予測できるとは限らないが、科学的な方法に基づいている。また、お化けや空飛ぶ円盤の存在は、科学的に証明されていないわけだが、逆に「お化けが存在しない」ということを証明するのも難しい。なぜなら、いつどこに現れるかも分からないお化けを徹底的てつていてきに探すことはできないわけで、結局見つからなかったとしても、「お化けが存在しない」と結論するわけにはいかない。ひょっとして今この瞬間に自分の目の前にお化けが現れるかもしれないからだ。

③ 哲学者のK・R・ポパーは、科学と非科学を分けるために、次のような方法を提案した。反証（間違っていることを証明すること）が可能なら理論は科学的であり、反証が不可能な説は非科学的だと考える。検証ができるかどうかは問わない。

④ そもそも、ある理論を裏付ける事実があったとしても、たまたまそのような都合のよい事例があっただけかもしれない

ので、その理論を「証明」したことはない。[A]、ある法則が成り立つ条件を調べるといっても、すべての条件をテストすることは難しい。[B]、科学の進歩によって間違っていると修正を受けうるものの方が、はるかに「科学的」であると言える。

[5] 一方、非科学的な説は、検証も反証もできないので、<sup>④</sup>それを受け入れるためには、無条件に信じるしかない。科学と非科学の境を決めるこの基準は、「反証可能性」と呼ばれている。反証できるかどうかが科学的な根拠となるというのは、逆接めいていて面白い。<sup>おもしろ</sup>

[6] 例えば、「すべてのカラスは黒い」という説は、一羽でも白いカラスを見つければ反証されるので、科学的である。しかし、「お化け」が存在することは検証も反証もできないので、その存在を信じることは非科学的である。逆に、「お化けなど存在しない」と主張することは、どこかでお化けが見つかれば反証されるので、より科学的だということになる。一方、「分子など存在しない」という説は、一つの分子を計測装置でとらえることですでに反証されており、分子が存在することは科学的な事実である。

[7] 科学の知識は、経験による根拠を必要としない数学の公理のような「アприオリーな知識」と、経験を根拠としていて反証できる「アポストリオリーな知識」とに、大きく分けられる。

[8] ここで、反証できるアポストリオリーな知識しか科学的と認めないならば、ちょっと極端である。これでは、簡単に証明したり取り下げられたりする理論ばかりが「科学的」ということになってしまい、果たして科学は進歩するのか、という疑問が生ずる。

[9] 科学理論の発展という観点から、アメリカの科学史家のT・S・クーンは、ある一定の期間を代表して手本となるような科学理論（例えば天動説）を「パラダイム（範例）」と名付けて、新しいパラダイム（例えば地動説）へと世界観が変革しながら科学が進歩するということを、豊富な例をもとに主張した。

30

25

20

15

⑩ このように、科学的仮説は検証と反証を繰り返しながら発展していく。科学における仮説の役割がとても大きいことは、数学者・物理学者のH・ポアンカレがはっきりと述べているところでもある。

⑪ しかし、科学者が述べる説が、いつも仮説の形を取っているとは限らない。科学者の単なる思いつきや予想はあくまで意見に過ぎず、科学的な仮説とは違う。科学者は仮説と意見をきちんと分けて述べる必要があるが、一般の人にはその区別がよく分からないので、<sup>⑤</sup>両者を混同することで誤解が生じやすい。

⑫ 科学的な仮説に対しては、それが正しいかどうかをまず疑ってみることが、科学的な思考の第一歩である。仮説を<sup>ウ</sup>呑みにしたのでは、科学は始まらない。

（酒井邦嘉「科学者といふ仕事」より）

（注）数学の公理……数学の理論の基礎となる、証明がいらぬ事柄。

アプリアリ……先天的。

アポストリアリ……後天的。

（1）——線①「それは真実ではない」とあるが、筆者は、どのようなことをうったえようとしているのか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 科学は、他の学問と比べて万人に理解されにくいものだ、ということ。

イ 科学は、事実と科学的仮説とを交えて成り立っている、ということ。

ウ 非科学的なことが、正しい事実として認識されている、ということ。

エ どんなときでも、科学は正しい結果を導き出す、ということ。





(6)

――

線⑤

「両者」

とは何と何を指しているか、文中からそれぞれ抜き出せ。

・

・

第二十六講・復習問題《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(1)

授業で使ったテキストをじっくり見直して、あとの問題を解きなさい（二つ 5点 計35点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 多くの人は、科学は正しい事実だけを積み上げてできているかと思うかもしれないが、それは真実ではない。実際の科学は、事実の足りないところを「科学的仮説」で補いながら作り上げた構造物である。科学が未熟なために、本来必要となるべき鉄骨が欠けているかもしれないのだ。新しい発見による革命的な一揺れが来たら、いつ倒壊してもおかしくない位である。

② A、「科学が何であるか」を知るには、逆に「何が科学でないか」を理解することも大切だ。科学は確かに合理的だから、理屈に合わない迷信は科学ではない。それでは、占いや心霊現象しんれいげんしょうについてはどうだろうか。占いは、当たらないことがあるから非科学的なのではない。天気予報は、いつも正確に予測できるとは限らないが、科学的な方法に基づいている。また、お化けや空飛ぶ円盤の存在は、科学的に証明されていないわけだが、逆に「お化けが存在しない」ということを証明するのも難しい。なぜなら、いつどこに現れるかも分からないお化けを徹底的てつていてきに探すことはできないわけで、結局見つからなかったとしても、「お化けが存在しない」と結論するわけにはいかない。ひょっとして今この瞬間に自分の目のお化けが現れるかもしれないからだ。

③ 哲学者のK・R・ポパーは、科学と非科学を分けるために、次のような方法を提案した。反証（間違っていることを証明すること）が可能なら理論は科学的であり、反証が不可能な説は非科学的だと考える。検証ができるかどうかは問わない。  
④ そもそも、ある理論を裏付ける事実があったとしても、たまたまそのような都合のよい事例があっただけかもしれない

10

5



ので、その理論を「証明」したことはない。しかも、ある法則が成り立つ条件を調べるといっても、すべての条件をテストすることは難しい。むしろ、科学の進歩によって間違っていると修正を受けうるものの方が、はるかに「科学的」であると言える。

⑤ 一方、〔甲〕な説は、検証も反証もできないので、それを受け入れるためには、無条件に信じるしかない。科学と非科学の境を決めるこの基準は、「反証可能性」と呼ばれている。反証できるかどうかが科学的な根拠となるというのは、逆接めいていて面白い。

⑥ B、「すべてのカラスは黒い」という説は、一羽でも白いカラスを見つければ反証されるので、科学的である。しかし、「お化け」が存在することは検証も反証もできないので、その存在を信じることは非科学的である。逆に、「お化けなど存在しない」と主張することは、どこかでお化けが見つかれば反証されるので、より科学的だということになる。一方、「分子など存在しない」という説は、一つの分子を計測装置でとらえることですでに反証されており、分子が存在することは科学的な事実である。

⑦ 科学の知識は、経験による根拠を必要としない数学の公理のような「アприオリな知識」と、経験を根拠としていて反証できる「アポストリオリな知識」とに、大きく分けられる。

⑧ ここで、反証できるアポストリオリな知識しか科学的と認めないならば、ちょっと極端である。これでは、簡単に証明したり取り下げられたりする理論ばかりが「科学的」ということになってしまい、果たして科学は進歩するのか、という疑問が生ずる。

⑨ 科学理論の発展という観点から、アメリカの科学史家のT・S・クーンは、ある一定の期間を代表して手本となるような科学理論（例えば天動説）を「パラダイム（範例）」と名付けて、新しいパラダイム（例えば地動説）へと世界観が変革しながら科学が進歩するということを、豊富な例をもとに主張した。

⑪ C、科学者が述べる説が、いつも仮説の形を取っているとは限らない。科学者の単なる思いつきや予想はあくまで意見に過ぎず、科学的な仮説とは違う。科学者は仮説と意見をきちんと分けて述べる必要があるが、一般の人にはその区別がよく分からないので、両者を混同することで誤解が生じやすい。

（酒井邦嘉「科学者という仕事」より）

アポステリオリ……後天的。

[illegible]

問二 空欄A、B、Cにあてはまる接続語を、それぞれ三字で答えよ。(ただしBは漢字を含む。)

A


B


C


問三 空欄(甲)にあてはまる言葉を、漢字四字で答えよ。


問四 次の文は本文中の内容を説明したものである。空欄にあてはまる最も適当な言葉を、本文中からそれぞれ抜き出せ。

科学は、

ア
---

と

イ
---

とを交えて成り立っている、ということ。

ア


イ


第二十六講 ● 確認テスト 《説明的文章》 論説文の頻出五大テーマ(1)

次の語句の、カタカナ部分を漢字に改めるとどうなるか。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 科学的能力セツ ① 仮設 ② 仮説 ③ 架設 ④ 架説

問二 コウ造物 ① 溝 ② 構 ③ 講 ④ 購

問三 メイ信 ① 名 ② 命 ③ 冥 ④ 迷

問四 円バン ① 版 ② 盤 ③ 磐 ④ 番

問五 反シヨウ可能性 ① 章 ② 証 ③ 賞 ④ 勝

☐
☐
☐
☐
☐

第二十七講・《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(2)

哲学・身体論を読み取る



例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

だれかにほんとうに聴いてもらいたくなるのは、鬱<sup>ふさ</sup>いでいるとき、でも自分でも何を訴えたいのかよくわからないときである。しかし聴くというのはなかなかにもむずかしいことである。何か思いつめているときには、まず「言っちゃってわかるはずがない」と口が重くなるが、「ふん、ふん」とうなずかれると、「そんなにかんたんにわかられてたまるか」という反発が先に立つ。それが感染して、聴くほうも「わかるんだけどわかりたくない」と意固地にもなる。聴こうとするといやがるから、逆に鼻歌うたいながら用事でもしつゝ聴くとはなしに聴く、くらいの感じではじめて口を開いてもらえるということもある。

5

しかし、聴くことがもつとむずかしいのは、聴いても言葉を返しようがないとあらかじめわかっているときである。重篤な病氣になった友人、家族を失った被災者、子どもを失った両親、ホスピスの患者さん、くり返し病に冒される知人……。このひとたちの前に立ったとき、とつさにどう声をかけていいのかわからず、怯<sup>ひる</sup>んでしまう。まさに聴くことしかできないのである。けれども、ひたすら聴くということ、そのことには大きな意味がこもっている。

このような場合にじつと聴くのがむずかしいのには、いくつか理由がある。<sup>②</sup>一つは、苦しみや鬱<sup>ふさ</sup>ぎの理由を問うても答えがないことは、話す本人がわかっていてるから。なぜこのわたしばかりが病に冒されるのか、こんな状態でも生きつづけることは死ぬことより大事なのか……と問いただしても、だれも答えを返せないに決まっている。

第二に、ひとはほんとうに苦しいときには話さないものである。「言っちゃってわかってもらえないはずがない」。それでもよ

10

うやっと口を開いても、一言一言が相手にたしかに届いているか確認しながらしか話せないのです、どうしてもとつとつとした断片的な語りになってしまう。

第三に、迎え入れられるという確信のないところでは、ひとは他人に言葉をあずけないものだ。ほんとうはそのことは考へたくない、忘れていたのに、他人に語ることで苦しみをわざわざ二重にすることはない。

そして最後に、とくに家族の場合、自分が漏らす一言一言を身内は聞き流すことができず、それらに過剰に反応してしまう。「そんなこと思っていたのか。こっちの身にもなってくれ」と返され、そして「A」と二度と口を開かなくなる。

聴く<sup>③</sup>というのは、それほどにむずかしいことである。が、それでもひたすら聴かねばならない。最後まで聴き切らねばならない。聴くだけ、言葉を受けとめるだけということが意味をもつのは、いったいどうしてか。

苦しみや鬱ぎのなかに溺れてしまっているひと<sup>④</sup>が、それでもそれについて語るためには自分の苦しみや鬱ぎについて、どんなきつかけ、どんな経過でこんな苦しみや鬱ぎに襲われることになったのか、その理由と考えられるものは何か、いまはどんな状態か、というふう<sup>⑤</sup>に、苦しみや鬱ぎから身を引き剥がし、ことがらを時系列に並べ換え、整理して語らねばならない。このように自分の苦しみや鬱ぎにある距離をとり、それを対象化するなかで、それらとの関係が変わるということがここではとりわけ重要なのである。つまり、苦しみや鬱ぎを当初あったとは別の地平へと移し変えるところに、他者を前におのれについて語るこの意味はある。語るということは、相手に回答をもらうということではない。見えない自分の姿を映すために、その鏡の役を相手にしてもらうことであるのだ。

が、鏡であるべき聴く者は、話の中身が重いし、しかも相手からなかなか言葉が漏れてこないのです、その緊迫になかなか耐えきれない。身を固くしてじりじりと待つだけで疲れはててしまう。そのうち待ちきれなくなつて、「あなたが言いたいのはこういうことじゃないの?」と誘い水を向ける。話すほうはその明快な語り口について乗ってしまふ。「わかつてもらえた」と。が、これはじつはもつともまずい聴き方なのだ。

B、語るこの意味は、語るることによってみずからの閉塞

から距離をとることにあるのに、そのチャンス<sup>⑤</sup>を聴く側が横取りしてしまうからだ。これでは聴くことにならない。

(驚田清一<sup>わしだきよかず</sup>)「わかりやすいはわかりにくい？」より

(注) 鬱ぐ……何か引つかかることがあって憂鬱な気持ちになること。

重篤……病気が重くて回復の見込みがない様子。

ホスピス……回復不可能な末期がん患者を主に収容する施設。

怯む……気力がくじけること。

時系列……一定の時間ごとの集まり。

閉塞……閉じて塞がること。

(1) 線①「このひとたち」とはどのようなひとたちか。「……ひとたち」に続くように本文中から二十六字で抜き出し、

最初と最後の五字を書け。


、


ひとたち

(2) 線②「いくつか理由がある」とあるが、筆者は理由をいくつ述べているか。算用数字で答えよ。

--

(3) A にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア また今度言おう      イ 言わなきゃよかった

ウ 言ってよかった      エ 次は分かってもらえるだろう

(4) — 線③「聴く」とあるが、「聴く人」は、語る人にとって何であると筆者は述べているか。本文中の言葉を用いて十  
五字以内で書け。

(5) — 線④「苦しみや鬱ぎのなかに溺れてしまっているひと」にとって「語る」とはどのような行為なのかを説明した次  
の文の  にあてはまる言葉を文中からそれぞれ抜き出せ。

苦しみや鬱ぎに a 二字をとり、それらを b 三字することで、当初とは c 十一字 という行為。

a

b

c



(6) B にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア だから イ ところで

ウ しかし エ なぜなら

(7) — 線⑤「そのチャンス」とはどのようなチャンスか。本文中の言葉を用いて答えよ。

(8) 筆者は「聴く」ということについてどのような考えを述べているか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア たとえ聴くことがむずかしいような話でも、最後までひたすらじつと聴かなくてはならない。

イ 話す人がうまく言葉を見つけられない時は、気持ちを察して言葉をかけて助けてあげるべきだ。

ウ 話の内容を理解していることを相手に伝えるため、「ふん、ふん。」とうなずきながら聴くとよい。

エ どう声をかけていいのか困るような話でも答えを返せるように、一言一言を確実に聴くべきだ。

第二十七講・復習問題《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(2)

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、あとの問題を解きなさい(二つ 5点 計25点満点)  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

だれかにほんとうに聴いてもらいたくなるのは、鬱<sup>ふさ</sup>いでいるとき、でも自分でも何を訴えたいのかよくわからないときである。しかし聴くというのはなかなかむずかしいことである。何か思いつめているときには、まず「言っちゃってわかるはずがない」と口が重くなるが、「ふん、ふん」とうなずかれると、「そんなにかんたんにわかられてたまるか」という反発が先に立つ。それが感染して、聴くほうも「わかるんだけどわかりたくない」と意固地にもなる。聴こうとするといやがるから、逆に鼻歌うたいながら用事でもしつづつ聴くとはなしに聴く、くらいの感じではじめて口を開いてもらえるということもある。

A、聴くことがもつとむずかしいのは、聴いても言葉を返しようがないとあらかじめわかっているときである。重篤な病気になった友人、家族を失った被災者、子どもを失った両親、ホスピスの患者さん、くり返し病に冒される知人……。このひとたちの前に立ったとき、とつさにどう声をかけていいのかわからず、怯<sup>ひる</sup>んでしまう。まさに聴くことしかできないのである。けれども、ひたすら聴くということ、そのことには大きな意味がこもっている。

このような場合にじつと聴くのがむずかしいのには、いくつか理由がある。一つは、苦しみや鬱<sup>ふさ</sup>ぎの理由を問うても答えがないことは、話す本人がわかっていてるから。なぜこのわたしばかりが病に冒されるのか、こんな状態でも生きつづけることは死ぬことより大事なのか……と問いただしても、だれも答えを返せないに決まっている。

第二に、ひとはほんとうに苦しいときには話さないものである。「言っちゃってわかってもらえないはずがない」。それでもよ

うやっと口を開いても、一言一言が相手にたしかに届いているか確認しながらしか話せないのです、どうしてもとつとつとした断片的な語りになってしまう。

第三に、迎え入れられるという確信のないところでは、ひとは他人に言葉をあずけないものだ。ほんとうはそのことは考えたくない、忘れていたのに、他人に語ることで苦しみをわざわざ二重にすることはない。

〔B〕最後に、とくに家族の場合、自分が漏らす一言一言を身内は聞き流すことができず、それらに過剰に反応してしまう。「そんなこと思っていたのか。こっちの身にもなってくれ」と返され、そして「言わなきゃよかった」と二度と口を開かなくなる。

聴くというのは、それほどにむずかしいことである。が、それでもひたすら聴かねばならない。最後まで聴き切らねばならない。聴くだけ、言葉を受けとめるだけということが意味をもつのは、いったいどうしてか。

苦しみや鬱ぎのなかに溺れてしまっているひとが、それでもそれについて語るためには自分の苦しみや鬱ぎについて、どんなきつかけ、どんな経過でこんな苦しみや鬱ぎに襲われることになったのか、その理由と考えられるものは何か、いまはどんな状態か、というふうに、苦しみや鬱ぎから身を引き剥がし、ことがらを時系列に並べ換え、整理して語らねばならない。このように自分の苦しみや鬱ぎにある距離をとり、それを対象化するなかで、それらとの関係が変わるということがここではとりわけ重要なのである。

〔C〕、苦しみや鬱ぎを当初あったのとは別の地平へと移し変えるところに、他者を前におのれについて語るこの意味はある。語ることとは、相手に回答をもらうということではない。見えない自分の姿を映すために、その鏡の役を相手にしてもらうことであるのだ。

が、鏡であるべき聴く者は、話の中身が重いし、しかも相手からなかなか言葉が漏れてこないのです、その緊迫になかなか耐えきれない。身を固くしてじりじりと待つだけで疲れはててしまう。そのうち待ちきれなくなつて、「あなたが言いたいのはこういうことじゃないの？」と誘い水を向ける。話すほうはその明快な語り口について乗ってしまう。「わかってもらえ

た」と。が、これはじつはもつともまずい聴き方なのだ。なぜなら、語ることの意味は、語ることによってみずからの閉塞から距離をとることにあるのに、そのチャンスを聴く側が横取りしてしまうからだ。これでは聴くことにならない。

(驚田清一「わかりやすいはわかりにくい？」より)

(注) 鬱ぐ……何か引つかかることがあって憂鬱な気持ちになること。

重篤……病気が重くて回復の見込みがない様子。

ホスピス……回復不可能な末期がん患者を主に収容する施設。

怯む……気力がくじけること。

時系列……一定の時間ごとの集まり。

閉塞……閉じて塞がること。

問一 空欄A、B、Cにあてはまる最も適当な接続語を、それぞれ三字で答えよ。

A

B

C

問二 ———線の指す部分を、本文中から十字で抜き出せ。

問三

筆者は「聴く」ということについて、どのような考えを述べているか。それを説明した次の文の空欄にあてはまる最も適当な言葉を、本文中から九字で抜き出せ。

たとえ


ならない。

ような話でも、最後までひたすらじっと聴かなくては

第二十七講・確認テスト《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(2)

次の語句の、カタカナ部分を漢字に改めるとどうなるか。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 感セン ①選 ②線 ③腺 ④染

問二 イ固地 ①意 ②居 ③委 ④以

問三 ヒ災者 ①非 ②悲 ③被 ④避

問四 確シン ①信 ②心 ③真 ④審

問五 キン迫 ①近 ②禁 ③緊 ④均

☐
☐
☐
☐
☐

第二十八講・《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(3)

日本語論を読み取る？



例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 日本語の間という言葉にはいくつかの意味がある。まずひとつは空間的な間である。「すき間」「間取り」というときの間であるが、基本的には物と物のあいだの何もない空間のことだ。絵画で何も描かれていない部分のことを余白というが、これも空間的な間である。

② 日本の家は本来、床と柱とそれをおおう屋根でできていて、壁というものがない。<sup>①</sup>これは部屋を細かく区分けし、壁で仕切り、そのうえ、鍵のかかる扉で密閉してしまふ西洋の家とは異なる。西洋の個人主義はこのような個室で組み立てられた家に住んできたからこそ生まれたというのはよくわかる話である。

③ それでは、壁や扉で仕切る代わりに日本の家はどうするかというと、障子や襖<sup>ふすま</sup>や戸を立てる。「源氏物語絵巻」などに描かれた王朝時代の宮廷や貴族たちの屋敷を見ると、その室内は板戸や部戸<sup>しとみど</sup>、襖や几帳<sup>きちょう</sup>などさまざまな間仕切りの建具<sup>たてぐ</sup>で仕切られてはいるものの、いたるところすき間だらけである。西洋の重厚な石や煉瓦<sup>れんが</sup>や木の壁に比べると、何という  
 だろうか。

④ しかも、このような建具はすべて季節のめぐりとともに入れたりはずしたりできる。冬になれば寒さを防ぐために立て、夏になれば涼を得るためにとりはずす。それだけでなく、住人の必要に応じて、ふだんは座敷、次の間、居間と分けて使っていても、いざ、大勢の客を迎えて祝宴を開くという段になると、すべてをつないで大広間にすることもできる。このように日本人は昔から自分たちの家の中の空間を自由自在につないだり切ったりして暮らしてきた。

〔5〕次に時間的な間がある。「間がある」「間を置く」というように、こちらは何もない時間のことである。芝居や音楽では声や音のしない沈黙の時間のことを間という。

〔6〕バッハにしてもモーツアルトにしても西洋のクラシック音楽は次から次に生まれては消えてゆくさまざまな音によって埋め尽くされている。たとえば、モーツアルトの「交響曲二十五番」などを聞いてみると、息を継ぐ暇もなく、ときには息苦しい。モーツアルトは沈黙を恐れ、音楽家である以上、一瞬たりとも音のない時間を許すまいとする衝動に駆られているかのように思える。

〔7〕それにひきかえ、日本古来の音曲は琴であれ笛であれ鼓つづみであれ、音の絶え間というものがいたるところにあつて長閑なものだ。その音の絶え間では松林を吹く風の音がふとよぎることもあれば、谷川のせせらぎが聞こえてくることもあるだろう。ときには、この絶え間があまりにも長すぎて、一曲終わってしまったかと思っていると、やおら次の節が始まるということも珍しくない。そんなふうには、いくつもの絶え間に断ち切られていても日本の音曲は成り立ってしまう。

〔8〕空間的、時間的な間のほかに、人やものごととのあいだにとる心理的な間というものもある。誰でも自分以外の人とのあいだに、たとえ相手が夫婦や家族や友人であつても長短さまざまな心理的な距離、間をとって暮らしている。このような心理的な間があつてはじめて日々の暮らしを円滑に運ぶことができる。

〔9〕こうして日本人は生活や文化のあらゆる分野で間②を使いこなしながら暮らしている。それを上手に使えば「間に合う」「間がいい」ということになり、逆に使い方を誤れば「間違い」、間に締まりがなければ「間延び」、間を読めなければ「間抜け」になってしまう。間の使い方はこの国のもつとも基本的な掟おきてであつて、日本文化はまさに間の文化ということができるだろう。

〔10〕では、この間は日本人の生活や文化の中でどのような働きをしているのだろうか。そのもつとも重要な働きは異質なものの同士の対立をやわらげ、調和させ、共存させること、つまり、和を実現させることである。早い話、互いに意見の異なる



る二人を狭い部屋に押しこめておけば喧嘩<sup>けんか</sup>になるだろう。しかし、二人のあいだに十分な間をとってやれば、互いに共存できるはずだ。狭い通路に一度に大勢の人々が殺到すれば、たちまち身動きがとれなくなつてパニックに陥つてしまうが、一人ずつ間遠に通してやれば何の問題も起こらない。

⑪ 和とは異質のもの同士が調和し、共存することだった。この和が誕生するためにはならない土台が間なのである。和はこの間があつてはじめて成り立つということになる。

（長谷川<sup>はせがわかい</sup>権「和の思想」より）

（注）王朝時代……奈良時代・平安時代のこと。

薮戸……格子<sup>こうし</sup>を取りつけた板戸。

几帳……二本の柱に一本の横木を通し、それに布をかけて間仕切りにした建具。

間遠に……間隔をあけて。

（1）——線①「これは」の述語を一文節で抜き出せ。

（2）にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 弱々しさ、まじめさ      イ 新しさ、めずらしさ  
ウ おおらかさ、正しさ      エ 軽やかさ、はかなさ



(4) 次は、四人の中学生が、日ごろから心がけていることについて発表したものである。——線②「間を使いこなしながら暮らしている」という筆者の考えに最も近いものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア わたしは、教室の本棚を整理するときには、本の種類や大きさに気をつけながら、すき間なく本を並べるように心がけています。

イ わたしは、書写の授業で毛筆を使って字を書くときには、紙の余白を意識しながら、全体を整えて書くよう心がけています。

ウ わたしは、部活動の計画を立てるときには、毎月初めにその月の細かな計画を立てて、確実にやり遂げるように心がけています。

エ わたしは、家で勉強するときには、集中力を持続させるため、長時間であっても休息をとらずに取り組むよう心がけています。

(5) 本文の段落構成について説明したものととして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア ①から④までの具体例と⑤から⑨までの具体例を、⑩で比較しながら検討し、⑪でまとめている。

イ ①から⑧までで述べた具体例を⑨でまとめ、それを⑩・⑪で新たな内容と関連づけて述べている。

ウ ①から④までの具体例と⑤から⑦の具体例の違いを、⑨・⑩で対比し、⑪で結論を述べている。

エ ①から⑦までで述べた具体例を⑧で補足し、⑨から⑪で別の例を出しながら問題提起をしている。



第二十八講・復習問題《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(3)

授業で使ったテキストをしっかり見直して、あとの問題を解きなさい(二つ 5点 計45点満点)  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 日本語の〔甲〕という言葉にはいくつかの意味がある。まずひとつは空間的な間である。「すき間」「間取り」というときの間であるが、基本的には物と物のあいだの何もない空間のことだ。絵画で何も描かれていない部分のことを余白というが、これも空間的な間である。

② 日本の家は本来、床と柱とそれをおおう屋根でできていて、壁というものがない。これは部屋を細かく区分けし、壁で仕切り、そのうえ、鍵のかかる扉で密閉してしまふ西洋の家とは異なる。西洋の個人主義はこのような個室で組み立てられた家に住んできたからこそ生まれたというのはよくわかる話である。

③ それでは、壁や扉で仕切る代わりに日本の家はどうするかというと、障子や襖ふすまや戸を立てる。「源氏物語絵巻」などに描かれた王朝時代の宮廷や貴族たちの屋敷を見ると、その室内は板戸しとみどや蓐戸きちよう、襖や几帳きしょうなどさまざまな間仕切りの建具たてぐで仕切られてはいるものの、いたるところすき間だらけである。西洋の重厚な石や煉瓦れんがや木の壁に比べると、何という軽やかさ、はかなさだろうか。

④ A、このような建具はすべて季節のめぐりとともに入れたりはずしたりできる。冬になれば寒さを防ぐために立て、夏になれば涼を得るためにとりはずす。それだけでなく、住人の必要に応じて、ふだんは座敷、次の間、居間と分けて使っていても、いざ、大勢の客を迎えて祝宴を開くという段になると、すべてをつないで大広間にすることもできる。このように日本人は昔から自分たちの家の中の空間を自由自在につないだり切ったりして暮らしてきた。

〔5〕次に時間的な間がある。「間がある」「間を置く」というように、こちらは何もない時間のことである。芝居や音楽では声や音のしない沈黙の時間のことを間という。

〔6〕バッハにしてもモーツアルトにしても西洋のクラシック音楽は次から次に生まれては消えてゆくさまざまな音によって埋め尽くされている。たとえば、モーツアルトの「交響曲二十五番」などを聞いてみると、息を継ぐ暇もなく、ときには息苦しい。モーツアルトは沈黙を恐れ、音楽家である以上、一瞬たりとも音のない時間を許すまいとする衝動に駆られているかのように思える。

〔7〕それにひきかえ、日本古来の音曲は琴であれ笛であれ鼓つづみであれ、音の絶え間というものがいたるところにあつて長閑なものだ。その音の絶え間では松林を吹く風の音がふとよぎることもあれば、谷川のせせらぎが聞こえてくることもあるだろう。ときには、この絶え間があまりにも長すぎて、一曲終わってしまったかと思っていると、やおら次の節が始まるということも珍しくない。そんなふうには、いくつもの絶え間に断ち切られていても日本の音曲は成り立ってしまう。

〔8〕空間的、時間的な間のほかに、人やものごととのあいだにとる心理的な間というものもある。誰でも自分以外の人のあいだに、たとえ相手が夫婦や家族や友人であつても長短さまざまな心理的な距離、間をとって暮らしている。このような心理的な間があつてはじめて日々の暮らしを円滑に運ぶことができる。

〔9〕こうして日本人は生活や文化のあらゆる分野で間を使いこなしながら暮らしている。それを上手に使えば「間に合う」「間がいい」ということになり、逆に使い方を誤れば「間違い」、間に締まりがなければ「間延び」、間を読めなければ「間抜け」になってしまう。間の使い方はこの国のもつとも基本的な掟おきてであつて、日本文化はまさに間の文化ということができるだろう。

〔10〕では、この間は日本人の生活や文化の中でどのような働きをしているのだろうか。そのもつとも重要な働きは異質なものの同士の対立をやわらげ、調和させ、共存させること、

B

、和を実現させることである。早い話、互いに意見の異な

る二人を狭い部屋に押しこめておけば喧嘩<sup>けんか</sup>になるだろう。〔C〕、二人のあいだに十分な間をとってやれば、互いに共存できるはずだ。狭い通路に一度に大勢の人々が殺到すれば、たちまち身動きがとれなくなつてパニックに陥つてしまうが、一人ずつ間遠に通してやれば何の問題も起らない。

〔11〕和とは異質のもの同士が調和し、共存することだった。この和が誕生するためにはならない土台が間なのである。和はこの間があつてはじめて成り立つということになる。

（長谷川<sup>はせがわ</sup>権<sup>けん</sup>「和の思想」より）

（注）王朝時代……奈良時代・平安時代のこと。

蔭戸……格子<sup>こうし</sup>を取りつけた板戸。

几帳……二本の柱に一本の横木を通し、それに布をかけて間仕切りにした建具。

間遠に……間隔をあけて。

問一 空欄（甲）にあてはまる最も適当な言葉を、漢字一字で本文中から抜き出せ。

問二 空欄A、B、Cにあてはまる最も適当な接続語を、それぞれ三字で答えよ。

A


B


C


--

問三

——線の指す部分を、本文中から四字で抜き出せ。


問四

この文章の段落構成について説明した次の文の空欄にあてはまる、最も適当な段落番号をそれぞれ答えよ。

①からアまでで述べた具体例をイでまとめ、それをウとエで新たな内容と関連づけて述べている。

ア	<div></div>
イ	<div></div>
ウ	<div></div>
エ	<div></div>

第二十八講・確認テスト《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(3)

次の語句の、カタカナ部分を漢字に改めるとどうなるか。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 タテ具 ①立 ②断 ③建 ④絶

問二 必ヨウ ①用 ②様 ③容 ④要

問三 自由自ザイ ①剂 ②材 ③財 ④在

問四 ショウ動 ①障 ②訟 ③衝 ④涉

問五 円カツ ①活 ②割 ③括 ④滑

☐
☐
☐
☐
☐



第二十九講・《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(4)

日本文化論を読み取る



例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 「仕切り」は、多くの場合、空間に与えられた機能性（たとえば寝室や台所といった空間の機能）を振り分ける装置であるとともに、人間関係を仕切るものとなっている。

② ① 仕切りが人間関係を仕切る装置であるという言い方は、結果的なこととしてある。むしろ、私たちの人間関係がどのように考えられているかが仕切りに反映されていると言ったほうがいいかもしれない。どのような仕切りであれ、内部と外部という領域の関係を形成する。してみれば、仕切りは、ある社会において、また、ある時代において、人々が何を自らの内とし、何を外としたのかを反映している。

③ 一九一〇年代末から二〇年代にかけて、日本では、それまでの襖ふすまによって曖昧に仕切られていた間取りを廃止するべきだという主張がなされるようになった。つまり、個室と共同の部屋を分離し、家庭内において明確に公と私を分離する間取りを導入するべきだとされた。このことは、ヨーロッパにおける公と私の概念を仕切りによって導入しようとしたことを反映している。

④ ヨーロッパにおける近代的な公私の分離の思想は、近代的な概念としての社会意識を映し出すものであった。それは、簡単に言えば、社会というものは、契約けいやく（約束）によって成り立つものであり、人々はその契約を守る義務を負い、その結果としてだれにも支配されない個人の権利が守られるという考え方である。

A、そうした「約束」が社会に先立って成り立つか否かには議論がある。

⑤ しかし、これまでも少なからず指摘されてきたことだが、日本の近代はそう<sup>③</sup>した社会意識を持っていなかったのではない。そうした中で、個人と公的な空間とを分離するヨーロッパ的な間取りをそのまま導入したと言えよう。日本には、近代的社会の概念ではない「世間」という概念が存在した。この世間とは、内に対して外を意味する。世間は、家庭の外の場合もあるし、ある集団の外の場合もある。つまり、内と外を仕切る世間という概念は、自在に動くものである。頑強な壁ではなく、ちょうど屏風<sup>びょうぶ</sup>による仕切りのようなものだと言えるかもしれない。

⑥ <sup>④</sup> そのように考えてみると、かつての日本の仕切りは、内と外を強固に分離するものではない。それは、日本における人間関係の在り方を映し出している。障子や襖は、人の影や物音を伝え、その仕切りの向こう側の存在のかすかな気配を気付かせる。格子戸<sup>こうしど</sup>もまた、内と外を仕切りつつも、相互の気配を感じさせる。こうした仕切りは、仕切りの向こう側で起こっている事態が仕切りのこちら側に分かってしまう。ゆるやかな仕切りの中で生活するためには、家族、B 周りに対するなにがしかの配慮が必要であった。

⑦ また、日本の仕切りは、垂直面の仕切りだけではなく、水平面での仕切りもある。ちょっとした段差だけで、空間の仕切りの意味となる。「敷居がC」という言葉は、段差が物理的段差ではなく、意識にかかわる暗黙の境界になつていることを意味している。

⑧ 日本の仕切りは、日本における人間関係の在り方を反映していた。他との調和を図りながら、つながりを持って暮らしていくこうとする人間関係が、そこにあったのである。

(柏木<sup>かしわぎ</sup> 博<sup>ひろし</sup> 『『しきり』の文化論』より)

「結果的なこととしてある」とは、「仕切りが人間関係を仕切る装置である」という言い方」よりは、仕切りが□□とい

[illegible]

近代の日本において、人々は「a」を「外」としたが、「a」と「内」との仕切りは「b」という特徴を持っていた。

(3) 線③「そうした社会意識」がどのようなものを述べている一文を本文中から抜き出し、最初の五字を書け。


(4) 線④「そのように考えてみると」について述べた次の文の、

--

にあてはまる言葉を八字で書け。

世間という概念は、ちょうど

--

のようなものである。


(5) 

A
---

・

B
---

にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア A おそらく――B それゆえ    イ A やはり――B すると  
ウ A もちろん――B あるいは    エ A いわば――B そして

--

(6) 

C
---

には、直前の「敷居が」と合わさると、「訪問しにくい」という意味の慣用句になる言葉が入る。二字で書け。

--

(7) 段落相互の關係の説明として最も適當なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア ②段落は、①段落で述べた内容の具体例を多く示し、補足説明している。

イ ③段落は、②段落で述べた内容を整理して、問題点を明らかにしている。

ウ ⑤段落は、④段落で述べた内容を違った角度から検討し、否定している。

エ ⑥段落は、⑤段落で述べた内容を受けて考察を加え、論を展開している。



(8) 筆者がこの文章で述べている内容と合うものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア かつての日本の仕切りは、人間の相互の關係をゆるやかに仕切るとともに、近代の日本の社会における人々の生活意識や行動様式に大きな変化を与えた。

イ かつての日本の仕切りは、内と外を完全に切り離すものではなく、柔軟<sup>じゅうなん</sup>に他とかかわって生きていこうとする日本人の意識を映し出したものであった。

ウ かつての日本の仕切りは、個人と公的な空間とを曖昧に分離し、社会的關係よりも個人の生活や權利を優先させるという近代的な思想の形成を妨げた。

エ かつての日本の仕切りは、自分と周囲との關係をうまく調整するための装置であり、内と外という領域を形式的に區別する機能を有するものであった。



第二十九講・復習問題《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(4)

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、あとの問題を解きなさい(二つ 5点 計25点満点)  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 「A」は、多くの場合、空間に与えられた機能性(たとえば寝室や台所といった空間の機能)を振り分ける装置であるとともに、人間関係を仕切るものとなっている。

② 仕切りが人間関係を仕切る装置であるという言い方は、結果的なこととしてある。むしろ、私たちの人間関係がどのように考えられているかが仕切りに反映されていると言ったほうがいいかもしれない。どのような仕切りであれ、**〔甲〕**部と**〔乙〕**部という領域の関係を形成する。してみれば、仕切りは、ある社会において、また、ある時代において、人々が何を自らの内とし、何を外としたのかを反映している。

③ 一九一〇年代末から二〇年代にかけて、日本では、それまでの襖かすまによって曖昧に仕切られていた間取りを廃止するべきだという主張がなされるようになった。つまり、個室と共同の部屋を分離し、家庭内において明確に**〔丙〕**と**〔丁〕**を分離する間取りを導入するべきだとされた。このことは、ヨーロッパにおける公と私の概念を仕切りによって導入しようとしたことを反映している。

④ ヨーロッパにおける近代的な公私の分離の思想は、近代的な概念としての社会意識を映し出すものであった。それは、簡単に言えば、社会というものは、契約けいやく(約束)によって成り立つものであり、人々はその契約を守る義務を負い、その結果としてだれにも支配されない個人の権利が守られるという考え方である。もちろん、そうした「約束」が社会に先立って成り立つか否かには議論がある。

⑤ しかし、これまでも少なからず指摘されてきたことだが、日本の近代はそうした社会意識を持っていなかったのではない。そうした中で、個人と公的な空間とを分離するヨーロッパ的な間取りをそのまま導入したと言えよう。日本には、近代的社会の概念ではない「世間」という概念が存在した。この世間とは、内に対して外を意味する。世間は、家庭の外的場合もあるし、ある集団の外的場合もある。つまり、内と外を仕切る世間という概念は、自在に動くものなのである。頑強な壁ではなく、ちょうど屏風<sup>びょうぶ</sup>による仕切りのようなものだと言えるかもしれない。

⑥ そのように考えてみると、かつての日本の仕切りは、内と外を強固に分離するものではない。それは、日本における人間関係の在り方を映し出している。障子や襖は、人の影や物音を伝え、その仕切りの向こう側の存在のかすかな気配を気付かせる。格子戸<sup>こうしど</sup>もまた、内と外を仕切りつつも、相互の気配を感じさせる。こうした仕切りは、仕切りの向こう側で起こっている事態が仕切りのこちら側に分かってしまう。ゆるやかな仕切りの中で生活するためには、家族、あるいは周りに対するなにかの配慮が必要であった。

⑦ また、日本の仕切りは、垂直面の仕切りだけではなく、水平面での仕切りもある。ちょっとした段差だけで、空間の仕切りの意味となる。「敷居が高い」という言葉は、段差が物理的段差ではなく、意識にかかわる暗黙の境界になっていることを意味している。

⑧ 日本の仕切りは、日本における人間関係の在り方を反映していた。他との調和を図りながら、つながりを持って暮らしていこうとする人間関係が、そこにあったのである。

(柏木<sup>かしわぎ</sup> 博<sup>ひろし</sup> 『しきり』の文化論)より)

問一 空欄Aにあてはまる最も適当な三字の言葉を、本文中から抜き出せ。

問二 空欄(甲)と(乙)、(丙)と(丁)には、それぞれ対義語が入る。それぞれの空欄にあてはまる最も適当な漢字一字を、本文中から抜き出せ。

(甲) ・(乙)

(丙) ・(丁)

問三 — 線の指す部分を、本文中から六字で抜き出せ。

問四 本文の内容を説明した次の文の空欄にあてはまる最も適当な言葉を、本文中から漢字二字で抜き出せ。

かつての日本の仕切りは、内と外を完全に切り離すものではなく、柔軟に他とかかわって生きていくとする日本人の  を映し出したものであった。



第二十九講 ● 確認テスト 《説明的文章》 論説文の頻出五大テーマ(4)

次の語句の、カタカナ部分を漢字に改めるとどうなるか。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 リヨウ域 ①量 ②領 ③料 ④了

問二 ガイ念 ①外 ②該 ③慨 ④概

問三 指テキ ①滴 ②敵 ③適 ④摘

問四 スイ直面 ①推 ②錘 ③垂 ④睡

問五 キヨウ界 ①興 ②教 ③境 ④経

第三十講・《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(5)

自然文化論を読み取る？



例題

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 人類は文明を築いてきた。それを支える都市・産業の発展は、人々の生活をこの上なく便利で豊かなものに変えてきた。しかし一方では、代償として人間の命の共存者である自然を果てなく食いつぶしてきた。今日ではそれは、身の回りを離れた多くの森や草原、湿原にまで及び、かつて最も自然度の高かったアジア、アフリカ、アメリカの世界三大熱帯のようなどころまで荒廃させるに至っている。このため、人間ともども生物社会の頂点に位置している野生動物や野鳥なども、急速に数を減らしている。

② ところが一方では、ある種の植物や動物、例えばセイタカアワダチソウ、ブタクサなどの帰化植物や、ゴキブリ、イエズミ、カラス、ドバトなどは最近、逆に増加している。ある種が急速に減少すると同時に、ある種が急にふえすぎることは、そこに住んでいる生物集団が実は環境の異変を、生命を賭けて具体的に示している生きた情報なのである。

③ もの言わぬ、人間の共存者たちの急速な消滅は、実は環境の生態学的な危機でもある。生態系の消費者の立場にある、また同じ消費者の中でも食物連鎖の頂点に位置している人間の持続的な生存環境に対しても直接、間接に深刻な影響を与える危険性が高い。人間の共存者を死に追いやるような現代の産業立地、交通施設、いわゆる都市砂漠の中で、人間だけがいつまでも人間独自の豊かな知性や感性を保っていけるだろうか。この生きものの共存環境、生活環境の悪化こそ、実は最も深刻な人類生存の危機といわざるを得ない。

④ 人間の命と一蓮托生いちれんたくしょうの共存者であり、生命の基盤ともいえる緑を保護することは、われわれが生きていくための欠か

せない条件である。わずかなところにも自然の聖域として緑を残さなければならない。A、残すだけではもはや不十分である。野生生物たちが共存できるような生存環境を積極的にうばい返し、創造すべきである。B、その意義を考えるためにも、まだ不十分ではあるが、生命集団と環境の総合科学である、自然のシステムをよみとる生態学などの野外科学によって、緑を理解することを期待したい。

⑤ 生きている緑、自然を正しく理解するためには話をきいたり、本を読んだりするだけでは不十分である。自然に接し、五感を通して感得し、自然の中における人間の位置を知적、感性的、総合的に理解することである。

⑥ 自然のしくみ、とくに生態系の生産者の立場にある主役の緑について正しく理解する。緑が作り出す酸素や有機物で生活しているCとしての野鳥、さまざまな動物、人間の立場を知る。また、彼ら排泄物や死骸を分解し、緑の植物が再生産に使えるようにしている、地球のクリーナーともいわれるべき無数の地中、水中の小動物、微生物などの分解者たちもいる。この生産、消費、分解・還元の太い三つの柱から成り立っている生態系のシステムについて、もう一度見直す必要がある。同時に動く力のない植物の世界においても厳然と存続している生物社会の掟おきてについて正しく理解する必要があるのではないか。

⑦ 人間が生態系の一員として生きていくためには、緑も昆虫も、微生物も共存できる程度の多様な生態系の維持、存続が前提である。そのシステムが健全に存続する程度のバランスを維持、回復する英知と実行力をもたなければならない。われわれは、その多彩な集団の一員に組み込まれている生物社会の地球的、さらに地域的なバランスないしは秩序の中でしか生きることを保証されていないことを再確認し、市民一般のコンセンサスを形成すべきである。

(注) 生態学……自然界にすむ生物の生活に関する科学。

産業立地……産業を営む際、さまざまな条件を考えて場所を決めること。

(宮脇 昭「緑回復の処方箋」より)

コンセンサス……意見の一致。

[illegible]

(3) Cにあてはまる言葉を、1段落から4段落までの中から漢字三字で抜き出せ。


(4) 線②「人間が生態系の一員として……生態系の維持、存続が前提である」とあるが、こう考えられる理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

- ア 人間の共存者たちが減少する問題は、人類が文明を築く上で避けることができない問題だと考えるから。
- イ 人間の共存者たちが示す生きた情報は、ある種の動物や植物の増加や減少について注意を喚起するから。
- ウ 人間の共存者たちの消滅は、人間の持続的な生存環境に対しても深刻な影響を与える危険性が高いから。
- エ 人間と野生生物たちが共存していくためには、積極的に自然に接して植物を正しく理解する必要があるから。

☐

(5) この文章全体を通して、筆者が特に述べようとしていることとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 人間にとって欠かせない緑を残すために、今後は生活環境に適した植物をいろいろな地域に植え付けていく必要がある。

イ 人類生存の危機を解決するために、緑の重要性を認識し、植林などを推し進め、地球の砂漠化を防いでいく必要がある。

ウ 人間は、現在進んでいる自然破壊を反省し、動物や植物が生き続けることができる生活環境作りを研究する必要がある。

エ 人類が生きていくためには、生物社会の掟を共通理解し、人間を含めた生態系のシステムを健全に維持する必要がある。

☐

(6) この文章の段落内容の関係を説明したものとして適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア この文章は、論の展開の上から③段落と④段落の間に区切りがあり、大きく二つに分けられる。

イ ③段落は、①段落と②段落で提示された具体的な事実を考察して、問題点を明らかにしている。

ウ ①段落から③段落までに示された問題点を④段落で深め、⑤段落では新しい話題を述べている。

エ ⑥段落は、④・⑤段落で述べられた内容を受けて論をまとめ、筆者の主張を明らかにしている。



第三十講・復習問題《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(5)

授業で使ったテキストをしっかりと見直して、あとの問題を解きなさい（一つ5点 計35点満点）  
次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 人類は文明を築いてきた。それを支える都市・産業の発展は、人々の生活をこの上なく便利で豊かなものに変えてきた。しかし一方では、代償として人間の命の共存者である自然を果てなく食いつぶしてきた。今日ではそれは、身の回りを離れた多くの森や草原、湿原にまで及び、かつて最も自然度の高かったアジア、アフリカ、アメリカの世界三大熱帯のようなどころまで荒廃させるに至っている。このため、人間ともども生物社会の頂点に位置している野生動物や野鳥なども、急速に数を減らしている。

② ところが一方では、ある種の植物や動物、例えばセイタカアワダチソウ、ブタクサなどの帰化植物や、ゴキブリ、イエズミ、カラス、ドバトなどは最近、逆に増加している。ある種が急速に減少すると同時に、ある種が急にふえすぎることは、そこに住んでいる生物集団が実は環境の異変を、生命を賭けて具体的に示している生きた情報なのである。

③ もの言わぬ、人間の共存者たちの急速な消滅は、実は環境の生態学的な危機でもある。生態系の消費者の立場にある、また同じ消費者の中でも食物連鎖の頂点に位置している人間の持続的な生存環境に対しても直接、間接に深刻な影響を与える危険性が高い。人間の共存者を死に追いやるような現代の産業立地、交通施設、いわゆる都市砂漠の中で、人間だけがいつまでも人間独自の豊かな知性や感性を保っていけるだろうか。この生きものの共存環境、生活環境の悪化こそ、実は最も深刻な人類生存の危機といわざるを得ない。

④ 人間の命と一蓮托生いちれんたくしょうの共存者であり、生命の基盤ともいえる緑を保護することは、われわれが生きていくための欠か



せない条件である。わずかなところにも自然の聖域として緑を残さなければならない。しかし、残すだけではもはや不十分である。野生生物たちが共存できるような生存環境を積極的にうばい返し、創造すべきである。また、その意義を考えるためにも、まだ不十分ではあるが、生命集団と環境の総合科学である、自然のシステムをよみとる生態学などの野外科学によって、緑を理解することを期待したい。

⑤ 生きている緑、自然を正しく理解するためには話をきいたり、本を読んだりするだけでは不十分である。自然に接し、五感を通して感得し、自然の中における人間の位置を知覚的、感性的、総合的に理解することである。

⑥ 自然のしくみ、とくに生態系の〔甲〕者の立場にある主役の緑について正しく理解する。緑が作り出す酸素や有機物で生活している〔乙〕者としての野鳥、さまざまな動物、人間の立場を知る。また、彼ら排泄物や死骸を分解し、緑の植物が再生産に使えるようにしている、地球のクリーナーともいわれるべき無数の地中、水中の小動物、微生物などの分解者たちもいる。この生産、消費、分解・還元の太い三つの柱から成り立っている生態系のシステムについて、もう一度見直す必要がある。同時に動く力のない植物の世界においても厳然と存続している生物社会の掟<sup>おきて</sup>について正しく理解する必要があるのではないか。

⑦ 人間が生態系の一員として生きていくためには、緑も昆虫も、微生物も共存できる程度の多様な生態系の維持、存続が前提である。そのシステムが健全に存続する程度のバランスを維持、回復する英知と実行力をもたなければならない。われわれは、その多彩な集団の一員に組み込まれている生物社会の地球的、さらに地域的なバランスないしは秩序の中でしか生きること保証されていないことを再確認し、市民一般のコンセンサスを形成すべきである。

(注) 生態学……自然界にすむ生物の生活に関する科学。

産業立地……産業を営む際、さまざまな条件を考えて場所を決めること。

(宮脇 昭<sup>みやわき あきひろ</sup>「緑回復の処方箋」より)

30

25

20

15



一連托生……行動や運命を共にすること。

聖域……他のものから侵入されない安全な場所。

野外科学……ありのままの自然を対象として、実際の観察と経験を重要視して行う科学。

感得し……感じ取り、十分理解し。

厳然と……非常にしつかりと。

コンセンサス……意見の一致。

問一 空欄（甲）と（乙）には、対照的な意味の言葉が入る。それぞれの空欄にあてはまる最も適当な漢字二字を、本文中

から抜き出せ。

（甲）

・（乙）

問二 本文の内容を説明した次の文の空欄にあてはまる最も適当な言葉を、本文中からそれぞれ抜き出せ。

人間の共存者たちの消滅は、人間の持続的な A〔漢字二字〕に対しても深刻な影響を与える危険性が高く、人類が生きていくためには、B〔六字〕を共通理解し、人間を含めた生態系のシステムを健全に維持する必要がある。

A

B

問三

この文章の段落構成について説明した次の文の空欄にあてはまる、最も適当な段落番号をそれぞれ答えよ。

①段落から  ア 段落までに示された問題点を  イ 段落で深め、  ウ 段落では新しい話題を述べている。

ア

イ

ウ

第三十講・確認テスト《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(5)

次の語句の、カタカナ部分を漢字に改めるとどうなるか。最も適当なものを選択肢から選びなさい。

問一 代シヨウ ①賞 ②償 ③章 ④称

問二 荒ハイ ①背 ②敗 ③廃 ④排

問三 カン境 ①還 ②環 ③鑑 ④間

問四 感トク ①得 ②特 ③徳 ④督

問五 カン元 ①還 ②環 ③鑑 ④間

☐
☐
☐
☐
☐



# 模範解答

第一講・《国語知識》漢字知識



模範解答

例題

【同音異義語】

- |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| ① 異動 | ② 移動 | ③ 異同 | ④ 解答 | ⑤ 回答 | ⑥ 講義 | ⑦ 抗議 | ⑧ 週刊 | ⑨ 習慣 | ⑩ 減少 |
| ⑪ 現象 |      |      |      |      |      |      |      |      |      |

【同訓異字】

- |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| ⑫ 合 | ⑬ 会 | ⑭ 収 | ⑮ 修 | ⑯ 治 | ⑰ 納 | ⑱ 尋 | ⑲ 訪 | ⑳ 備 | ㉑ 供 | ㉒ 測 | ㉓ 量 | ㉔ 計 |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|

【類義語】

- |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| ⑮ 突然 | ⑯ 全部 | ⑰ 過度 | ⑱ 尊重 | ㉑ 服従 | ㉒ 宿命 | ㉓ 用意 | ㉔ 同意 | ㉕ 手段 | ㉖ 応答 |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|

- |      |      |
|------|------|
| ⑮ 原料 | ⑯ 進歩 |
|------|------|

【対義語】

- |      |      |      |      |      |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| ⑮ 進化 | ⑯ 横断 | ⑰ 消費 | ⑱ 下降 | ㉑ 積極 | ㉒ 共同 | ㉓ 一般 | ㉔ 危険 | ㉕ 自然 | ㉖ 正常 |
|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|

- |      |      |      |
|------|------|------|
| ⑮ 保守 | ⑯ 悪化 | ⑰ 無限 |
|------|------|------|

【慣用句】

- |     |     |     |     |     |     |      |     |      |      |      |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|------|------|------|
| ⑮ 顔 | ⑯ 水 | ⑰ 油 | ⑱ 板 | ㉑ 舌 | ㉒ 首 | ㉓ お茶 | ㉔ 足 | ㉕ くぎ | ㉖ 手塩 | ㉗ さじ |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|------|------|------|

【ことわざ】

⑥1 足

⑥2 顔

⑥3 肩

⑥4 二の足

⑥5 鼻

⑥6 そり（馬）

⑥7 横やり

⑥8 目

⑥9 胸

⑦0 肩

⑦1 口

⑦2 きも

⑦3 手（音<sup>ね</sup>）

⑦4 目（手）

⑦5 口車

⑦6 足

⑦7 ねこ

⑦8 石

⑦9 月

⑧0 旅

⑧1 石橋

⑧2 果報

⑧3 水

⑧4 仏

⑧5 一生

⑧6 馬

⑧7 天命

⑧8 さる

⑧9 けが

【故事成語】

⑨0 ア

⑨1 ウ

⑨2 イ

⑨3 オ

⑨4 エ

第二講・《国語知識》基礎文法 主語と述語・接続詞と指示語



模範解答

例題

- |  |  |
|--|--|
| <p>②</p> <p>(1) オ</p> <p>(2) ア</p> <p>(3) ウ</p> <p>(4) エ</p> <p>(5) イ</p> <p>(6) カ</p> | <p>①</p> <p>(1) しかし</p> <p>(2) さらに</p> |
|--|--|



第三講・《文学的文章》物語・小説の読解ルール(1)

あらすじ・場面をとらえる



模範解答

例題

- (1) プラネタリウム
- (2) さやか 雄策 春美（※順不同）
- (3) 場内の中央に、丸い頭部にいくつものガラスの目玉を持つ巨大な蟻が肢を踏ん張ったような、黒い機械が据えられている。
- (4) ア

第四講・《文学的文章》物語・小説の読解ルール(2)

心情・キャラ設定をとらえる



模範解答

例題

- (1) エ
- (2) イ
- (3) ねえちくたんだ
- (4) ウ
- (5) イ

第五講・《文学的文章》物語・小説の読解ルール(3)

主題をとらえる

！



模範解答

例題

- (1) A イ      B ウ      C ア
- (2) 人間としての道に反した女
- (3) イ
- (4) 旅立ち

第六講・《文学的文章》物語・小説の弱点補強(1)

あらすじ・心情を読み取る問題

!



模範解答

例題

- (1) 十
- (2) ウ
- (3) 除夜の鐘
- (4) (例) ハルさんの僕に対する深い愛情(を感じ取った)
- (5) ウ
- (6) イ

第七講・《文学的文章》物語・小説の弱点補強(2)

主題・心情の変化を読み取る問題！



模範解答

例題

- (1) イ  
(2) (例) 何も作り出せない  
(3) ア  
(4) エ  
(5) ウ  
(6) ア  
(7) (例) 祭りの見物人  
(8) ア  
(9) ア

第八講 ● 《説明的文章》 説明文の読解ルール(1)

指示語・接続語から筆者の主張をおさえる

！



模範解答

例題

- (1) 読者がくゝな文章
- (2) イ
- (3) 数字とくゝること
- (4) 誤解

第九講・《説明的文章》説明文の読解ルール(2)

段落ごとの内容から筆者の主張をおさえる

！



模範解答

例題

- (1) ア
- (2) 8
- (3) 自分のゝること
- (4) ウ
- (5) a 解放      b 欠点      c 前向き

第十講・《説明的文章》説明文の読解ルール(3)

要旨・筆者の主張をおさえる！



模範解答

例題

- (1) ア
- (2) ウ
- (3) 来る日も来くにもしない
- (4) なんらかの
- (5) イ



第十一講・《説明的文章》説明文の弱点補強(1)

指示語・接続語・段落内容をとらえる問題



模範解答

例題

- (1) イ
- (2) 網の目(のようなネットワーク)
- (3) ウ
- (4) A エ B ア
- (5) 情報を発信することよりも情報を受信することの方を好む
- (6) われわ〜うか。
- (7) イ

第十二講・《説明的文章》説明文の弱点補強(2)

要旨・主張をとらえる問題



模範解答

例題

- (1) イ
- (2) 感覚が鋭敏だからといって、かならずしも多くのものが知覚されているとはかぎらない(ということ。)
- (3) どこに関心をおいてイメージをつくるかが異なるため
- (4) ④・⑤
- (5) ・自分たちの文化的な文脈の中にあるもの  
・村人の生活の文法で解釈できるもの
- (6) (例) 親鳥のくちばしの先にある赤い点をつければ、餌がもらえということ。
- (7) エ

第十三講 ●

《文学的文章》随筆の読解ルール(1)

文意・構成をとらえる

！



模範解答

例題

- (1) こんなあい  
(2) A ていねいな B 生き方  
(3) ウ  
(4) イ

第十四講

《文学的文章》随筆の読解ルール(2)

表現・主題をとらえる

！



模範解答

例題

- (1) イ
- (2) 倒置
- (3) ウ
- (4) ウ
- (5) 都市で生活
- (6) エ

第十五講 ●

《文学的文章》  
随筆の弱点補強

構成・表現を読み取る問題

！



模範解答

例題

- (1) エ
- (2) 嫁ぐ娘を送り出すような
- (3) イ

第十六講・

《韻文》詩の読解ルール

構成・情景・修辞技法をとらえる！



模範解答

例題

- (1) イ
- (2) エ
- (3) 食わずには
- (4) 私の目にはじめてあふれる獣の涙。
- (5) イ

第十七講

《韻文》短歌の読解ルール

かたちと修辞技法をとらえる

！



模範解答

例題

- ① ① B  
② E  
③ D  
④ C

②

- (1) エ  
(2) ア  
(3) イ  
(4) ウ  
(5) エ  
(6) ふるさとの訛

第十八講・《韻文》俳句の読解ルール 季語と切れ字をとらえる



模範解答

例題

① (1) 五月雨

(2) や

(3) ア F イ C ウ D

② (1) 暑く

(2) ① 堪えている ② 大群集(群集)

(3) ア



第十九講・《韻文》短歌・俳句の弱点補強

主題・心情・技法を読み取る問題！



模範解答

例題

① (1) D

(2) B

(3) 氷らんとする

② (1) (季語) 吹流し

(季節) 夏

(2) B

(3) きりもなや

第二十講・《古典》古文の読解ルール(1)

主語・歴史的仮名遣いをおさえる！



模範解答

例題

- |     |   |    |   |     |   |    |   |     |
|-----|---|----|---|-----|---|----|---|-----|
| (1) | ① | いう | ② | よろず | ③ | なん | ④ | いたり |
| (2) |   | エ  |   |     |   |    |   |     |
| (3) |   | ウ  |   |     |   |    |   |     |
| (4) |   | ウ  |   |     |   |    |   |     |
| (5) |   | ア  |   |     |   |    |   |     |

【現代語訳】

今ではもう昔のことだが、竹取の翁おきなという人がいた。野や山に分け入って竹を取っては、いろいろな物を作るのに使っていた。名前を、さぬきのみやつこといった。

(ある日のこと、)その竹林の中に、根本の光る竹が一本あった。不思議に思つて、近寄つて見ると、筒の中が光っている。それを見ると、背丈が三寸ほどの人が、たいへんかわいらしい様子ですわっていた。

第二十一講・《古典》古文の読解ルール(2) 係り結びの法則



模範解答

例題

- (1) ① おもいて                      ② よそおい                      ③ とう  
 (2) イ・蓬萊の山  
 (3) エ  
 (4) ウ  
 (5) これは山なり

【現代語訳】

これこそわたくしが探し求めていた山だろうと思って、（うれしくはあるのですが）やはり恐ろしく思われて、山の周囲をこぎ回って、二、三日ほど、様子を見て回っていますと、天人の服装をした女が、山の中から出てきて、銀のおわんを持って、水をくんでゆきます。これを見て、（わたくしは）船から下りて、「この山の名を何というのですか。」と尋ねました。女は答えて「これは蓬萊の山です。」と言いました。これを聞いて（わたくしは）うれしくてたまりませんでした。

第二十二講・《古典》古文の弱点補強

主語・仮名遣い・係り結びを読み取る問題



模範解答

例題

- (1) イ
- (2) エ
- (3) もうけもの
- (4) ウ
- (5) ア
- (6) 不動尊の火炎
- (7) イ

【現代語訳】

「これはまあどうして、このように立っていらつしやるのだ。あきれたことだなあ。もののけでもとりつきなさったか。」  
 と言ったので、(良秀は)「どうしてもものけなどとりつくことがあろうか。長年(わたしは)不動明王の火炎を下手に描  
 いていたのだ。今見ると、(火は)このように燃えるものだったと、会得したのだ。これこそもうけものよ。仏画の道を職  
 業として世の中を生きてゆくには、仏様さえうまくお描き申しあげれば、百や千の家などすぐできるだろう。あなたたちこ  
 そ、これといった才能もお持ちでないから、物をおしみなさるのだ。」と言って、あざ笑って立っていた。

第二十三講・《古典》漢文の読解ルール

故事成語・書き下し文の読み取り！



模範解答

例題

- (1) ① エ      ② ア  
(2) ウ  
(3) 遠方より来たる  
(4) ア  
(5) 思<sup>ヒテ</sup> 而<sup>レ</sup> 不<sup>レ</sup> 学<sup>バ</sup>  
(6) 「学ぶ」…ア      「思ふ」…イ

【現代語訳】

A 書物を読み、学んでは、機会あるごとに復習し体得する、なんとなくいいことではないか。志を同じくする友だちが遠い所から訪ねてきて、学問について語り合う、それこそ楽しいことではないか。人が認めてくれなくても、不平不満を抱かない。それこそ徳の備わった人格者ではないか。

B 書物を読み、学んでも、よく考えて研究しないと、物事の道理を正確につかめない。(それとは逆に、)いくら考えても、読書をして学ばなければ、(独断に陥って)危険である。

第二十四講・《古典》漢詩の読解ルール 漢詩のかたちと表現技法をとらえる



模範解答

例題

- (1) ① 二 ② 三  
 (2) ウ・花<sup>ハ</sup> 欲<sup>ス</sup> 然<sup>エント</sup>  
 (3) 春  
 (4) 碧・白・青・然（※順不同）  
 (5) ア  
 (6) 一・二  
 (7) 五言

【現代語訳】

川は深みどりに澄みわたり、水鳥はいつそう白く見える。山は青々と茂り、花は今にも燃え出しそうに赤く咲いている。今年の春も見えている間にまた過ぎていく。いったいいつ、故郷へ帰る年がくるのだろうか。

第二十五講・《古典》漢文の弱点補強

漢詩・故事成語・書き下し文を読み取る問題



模範解答

例題

- ① (1) 春 眠 不<sub>レ</sub>覚<sub>エ</sub> 曉<sub>ヲ</sub>

- (2) 処処啼鳥を聞く

- (3) イ

- (4) イ

- ② (1) ア

- (2) ① エ ② ウ

- ③ (1) エ

- (2) イ

- (3) A 垓下に壁す B 楚を得たる

- (4) 1 四面楚歌 2 ア

- (5) 漢軍の四面皆楚歌する

【現代語訳】

- ① 春の夜明けは眠く、いつ夜が明けたのかわからない。方々でさえずる小鳥の声が聞こえる。夕べは風雨の音がしていた

が、花はさぞたくさん散ってしまったことだろう。

②

A 先生が言われるには、「人は将来への心くばりをしていないと、必ず手近なところに思いわずらうことがでてくるものである。」と。

B 先生が言われるには、「学ぶだけでその内容をよく考えないと、理解があやふやになる。自分の考えだけに頼って、人の意見や知識を学ばないと、危険である。」と。



第二十六講・《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(1)

科学論を読み取る

！



模範解答

例題

- (1) イ
- (2) いづどこに現れるかも分からない
- (3) イ
- (4) 6
- (5) 非科学的な説
- (6) 意見・科学的な仮説（※順不同）

第二十七講・《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(2)

哲学・身体論を読み取る



模範解答

例題

- (1) 聴いても言へかっている(ひとたち)
- (2) 4
- (3) イ
- (4) (例) 語る人の見えない姿を映す鏡
- (5) a 距離      b 対象化      c 別の地平へと移し変える
- (6) エ
- (7) 語ることによってみずからの閉塞から距離をとるチャンス。
- (8) ア

第二十八講・《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(3)

日本語論を読み取る！



模範解答

例題

- (1) 異なる
- (2) エ
- (3) I 自由自在につないだり切ったり
- II (例) 音の絶え間がある
- (4) イ
- (5) イ

第二十九講・《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(4)

日本文化論を読み取る



模範解答

例題

- (1) (例) 私たちの人間関係がどのように考えられているかを反映している
- (2) a 世間      b 自在に動く
- (3) それは、簡
- (4) 屏風による仕切り
- (5) ウ
- (6) 高い
- (7) エ
- (8) イ

第三十講・《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(5)

自然文化論を読み取る！



模範解答

例題

- (1) 生きものの共存環境、生活環境の悪化
- (2) ア
- (3) 消費者
- (4) ウ
- (5) エ
- (6) ウ



# 復習問題・ 確認テスト 模範解答

第一講・復習問題《国語知識》漢字知識

模範解答

問一 ① 異動 ② 移動 ③ 解答 ④ 回答 ⑤ 講義 ⑥ 抗議 ⑦ 合 ⑧ 会

⑨ 収 ⑩ 修 ⑪ 治 ⑫ 納 ⑬ 測 ⑭ 量 ⑮ 計

問二 ① 進化 ② 横断 ③ 消費 ④ 積極 ⑤ 共同 ⑥ 一般 ⑦ 危険 ⑧ 自然（天然）

⑨ 保守 ⑩ 悪化

問三 ① 顔 ② 舌 ③ 首 ④ 足 ⑤ 手 ⑥ 肩 ⑦ 足 ⑧ 鼻 ⑨ 胸 ⑩ 足

問四 ① 猫 ② 石 ③ 月 ④ 旅 ⑤ 石橋 ⑥ 果報 ⑦ 水 ⑧ 仏 ⑨ 馬 ⑩ 天命

問五 ① ア ② ウ ③ イ ④ オ ⑤ エ



第一講・確認テスト《国語知識》漢字知識

解答

問一  
②

問二  
②

問三  
③

問四  
④

問五  
④

第二講・復習問題《国語知識》基礎文法

模範解答

- ① エ
- ② カ
- ③ キ
- ④ コ
- ⑤ ク
- ⑥ イ
- ⑦ シ
- ⑧ セ
- ⑨ ソ
- ⑩ ウ

第二講・確認テスト《国語知識》基礎文法

解答

問一 (一) ② (二) ① (三) ④

問二 (一) ① (二) ③

第三講・復習問題《文学的文章》物語・小説の読解ルール(1)

模範解答

問一 四

問二 丸い頭部にいくつものガラスの目玉を持つ巨大な蟻が肢を踏ん張ったような

問三 エ

解答

問一

③

問二

③

問三

①

問四

②

問五

③

第三講・確認テスト《文学的文章》物語・小説の読解ルール(1)

第四講・復習問題《文学的文章》物語・小説の読解ルール(2)

模範解答

問一 エ

問二 胸

問三 ウ

解答

問一

④

問二

①

問三

①

問四

③

問五

④

第四講・確認テスト《文学的文章》物語・小説の読解ルール(2)

第五講・復習問題《文学的文章》物語・小説の読解ルール(3)

模範解答

問一 A イ B ウ C ア

問二 不孝な娘

問三 (甲) (例) 将来 (乙) (例) 無事



解答

問一  
①

問二  
③

問三  
②

問四  
④

問五  
①

第五講・確認テスト《文学的文章》物語・小説の読解ルール(3)

第六講・復習問題《文学的文章》物語・小説の弱点補強(1)

模範解答

問一 連体詞

問二 字が上手なこと。

問三 除夜の鐘

大みそか

問四 (甲)素直 (乙)母親

第六講・確認テスト《文学的文章》物語・小説の弱点補強(1)

解答

問一 ②

問二 ①

問三 ③

問四 ④

問五 ②

第七講・復習問題《文学的文章》物語・小説の弱点補強(2)

模範解答

問一 (例) しっかり

問二 感心 (別解 感動)

問三 未熟

問四 腕

問五 照れ

第七講・確認テスト《文学的文章》物語・小説の弱点補強(2)

解答

問一  
①

問二  
③

問三  
③

問四  
①

問五  
②

第八講・復習問題《説明的文章》説明文の読解ルール(1)

模範解答

問一 (甲) 事実 (乙) 意見 (※順不同) (丙) 混同 (※完答)

問二 たとえば

問三 しかし

問四 ① 同じく事実を伝える態度で書く文章

(※完答)

② 意見を述べる態度で書く文章

問五 誤解

第八講・確認テスト《説明的文章》説明文の読解ルール(1)

解答

問一  
①

問二  
③

問三  
④

問四  
②

問五  
①

第九講・復習問題《説明的文章》説明文の読解ルール(2)

模範解答

問一 笑い

問二 対比

問三 累加（並立）

問四 メタ認知

問五 人と人とのコミュニケーションを円滑にする



第九講・確認テスト《説明的文章》説明文の読解ルール(2)

解答

問一  
①

問二  
②

問三  
③

問四  
④

問五  
①

第十講・復習問題《説明的文章》説明文の読解ルール(3)

模範解答

問一 たとえば

問二 だが

問三 だから

問四 なにかをつくり出したり表現すること

問五 (甲) 人間 (乙) 社会 (※順不同)

解答

問一

④

問二

③

問三

②

問四

①

問五

④

第十講・確認テスト《説明的文章》説明文の読解ルール(3)

第十一講・復習問題《説明的文章》説明文の弱点補強(1)

模範解答

問一 毛細血管

問二 A ア B ウ

問三 (甲) 情報 (乙) 好奇心

第十一講・確認テスト《説明的文章》説明文の弱点補強(1)

解答

問一

④

問二

①

問三

②

問四

③

第十二講・復習問題《説明的文章》説明文の弱点補強(2)

模範解答

問一 A たとえば B ところが(別解 けれども)

問二 文化・生活(※順不同)

問三 (甲) 赤い点 (乙) 餌

問四 (甲) 見る (乙) 約束事

第十二講・確認テスト《説明的文章》説明文の弱点補強(2)

解答

問一  
④

問二  
③

問三  
②

問四  
①

問五  
④

第十三講・復習問題《文学的文章》随筆の読解ルール(1)

模範解答

問一 ①②③・④・⑤⑥⑦⑧・⑨ (※完答)

問二 A ていねいな B 生き方

問三 文化の伝承



第十三講・確認テスト《文学的文章》随筆の読解ルール(1)

解答

問一

④

問二

①

問三

②

問四

③

問五

①

第十四講・復習問題《文学的文章》随筆の読解ルール(2)

模範解答

問一 話を聞いた

問二 倒置(法)

問三 擬音語・擬態語(※順不同)

問四 都市で生活している

問五 感謝

第十四講・確認テスト《文学的文章》随筆の読解ルール(2)

解答

問一  
③

問二  
①

問三  
③

問四  
②

問五  
①

第十五講・復習問題《文学的文章》随筆の弱点補強

模範解答

問一 変幻自在

問二 嫁ぐ娘を送り出すような

問三 (例) 自分の豆腐を買いに来る人(のため)

第十五講・確認テスト《文学的文章》随筆の弱点補強

解答

問一

③

問二

④

問三

③

問四

②

問五

①

第十六講・復習問題《韻文》詩の読解ルール

模範解答

問一 同音の反復

問二 体言止め

問三 私の目にはじめてあふれる獣の涙。

問四 (甲) 犠牲 (乙) 自分 (別解 自己)

第十六講・確認テスト《韻文》詩の読解ルール

解答

問一 ②

問二 ④

問三 ①

問四 ①

問五 ④

第十七講 ● 復習問題 《韻文》 短歌の読解ルール

模範解答

- A 反復法
- B 三句切れ
- C 倒置法
- D 体言止め
- E 字余り



第十七講・確認テスト《韻文》短歌の読解ルール

解答

問一  
④

問二  
④

問三  
④

問四  
②

問五  
③

第十八講・復習問題《韻文》俳句の読解ルール

模範解答

A	季語…野菊	季節…秋
B	季語…いちじく	季節…秋
C	季語…曼珠沙華	季節…秋
D	季語…水仙	季節…冬
E	季語…五月雨	季節…夏
F	季語…つばくらめ	季節…春

第十八講・確認テスト《韻文》俳句の読解ルール

解答

問一  
④

問二  
②

問三  
③

問四  
③

問五  
①

第十九講・復習問題《韻文》短歌・俳句の弱点補強

模範解答

問一 (甲) 夕やけ空

(乙) 湖

(丙) 氷らんとする

問二 きりもなや

第十九講・確認テスト《韻文》短歌・俳句の弱点補強

解答

問一  
①

問二  
③

問三  
②

問四  
③

問五  
④

第二十講・復習問題《古典》古文の読解ルール(1)

模範解答

問一 ①いう ②い

問二 (例) 竹取の翁というものがいたそうだ。

問三 不思議に思っ

問四 かわいらしく

解答

問一

③

問二

①

問三

②

問四

④

問五

①

第二十講・確認テスト《古典》古文の読解ルール(1)

第二十一講・復習問題《古典》古文の読解ルール(2)

模範解答

問一 ① よそおい ② 問う ③ いわく

問二 何と言うのですか

問三 これは山なり



第二十一講・確認テスト《古典》古文の読解ルール(2)

解答

問一 ①

問二 ②

問三 ①

問四 ④

問五 ②

第二十二講 ● 復習問題 《古典》 古文の弱点補強

模範解答

問一 驚きあきれる

問二 主格

問三 なんじょう（なじょう）

問四 長年

問五 けれ

問六 ウ

第二十二講 ● 確認テスト《古典》古文の弱点補強

解答

問一 ③

問二 ①

問三 ③

問四 ②

問五 ②

第二十三講 ● 復習問題 《古典》 漢文の読解ルール

模範解答

問一 (例) 親友

問二 人格者

問三 故事成語

第二十三講・確認テスト《古典》漢文の読解ルール

解答

問一

③

問二

④

問三

①

問四

①

問五

①

第二十四講 ● 復習問題 《古典》 漢詩の読解ルール

模範解答

問一 年

問二 一（行目と）二（行目）

問三 故郷

問四 五言絶句

第二十四講 ● 確認テスト《古典》漢詩の読解ルール

解答

問一 ①

問二 ②

問三 ①

問四 ①

問五 ③

第二十五講 ● 復習問題 《古典》 漢文の弱点補強

模範解答

問一 信頼（信用）

問二 敗色濃厚

問三 楚

問四 四面楚歌



第二十五講 ● 確認テスト《古典》漢文の弱点補強

解答

問一 ①

問二 ②

問三 ①

問四 ③

問五 ②

第二十六講 ● 復習問題 《説明的文章》 論説文の頻出五大テーマ(1)

模範解答

問一 科学は正しい事実だけを積み上げてできている

問二 A だから B 例えば C しかし

問三 非科学的

問四 ア 事実 イ 科学的仮説

第二十六講 ● 確認テスト 《説明的文章》 論説文の頻出五大テーマ(1)

解答

問一 ②

問二 ②

問三 ④

問四 ②

問五 ②

第二十七講 ● 復習問題 《説明的文章》 論説文の頻出五大テーマ(2)

模範解答

問一 A しかし B そして C つまり

問二 自分が漏らす一言一言

問三 聴くのがむずかしい

第二十七講 ● 確認テスト 《説明的文章》 論説文の頻出五大テーマ(2)

解答

問一 ④

問二 ①

問三 ③

問四 ①

問五 ③

第二十八講 ● 復習問題 《説明的文章》 論説文の頻出五大テーマ (3)

模範解答

問一 問

問二 A しかも B つまり C しかし

問三 日本の家

問四 ア 8 イ 9 ウ 10 エ 11

第二十八講 ● 確認テスト 《説明的文章》 論説文の頻出五大テーマ(3)

解答

問一  
③

問二  
④

問三  
④

問四  
③

問五  
④

第二十九講 ● 復習問題 《説明的文章》 論説文の頻出五大テーマ(4)

模範解答

問一 仕切り

問二 (甲) 内 (乙) 外 (※順不同)  
(丙) 公 (丁) 私 (※順不同)

問三 日本の仕切り

問四 意識



第二十九講 ● 確認テスト 《説明的文章》 論説文の頻出五大テーマ(4)

解答

問一 ②

問二 ④

問三 ④

問四 ③

問五 ③

第三十講・復習問題《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(5)

模範解答

問一 (甲) 生産 (乙) 消費

問二 A 環境 B 生物社会の掟

問三 ア [4] イ [5] ウ [6]

第三十講・確認テスト《説明的文章》論説文の頻出五大テーマ(5)

解答

問一

②

問二

③

問三

②

問四

①

問五

①

